

2023 明海大学
「大学と地域連携の未来」シンポジウム
実施報告書

2023年3月

主催：明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
後援：東京都教育委員会・足立区教育委員会・浦安市教育委員会・
時事通信出版局・(財)きょういく創造育成財団

目次

1. 巻頭言・感謝の辞.....	2
2. 当日のプログラム.....	3
3. 参加状況.....	4
4. 開会式	
4-1. 開会挨拶：明海大学 学長 安井 利一.....	5
4-2. 足立区教育委員会 教育長 挨拶：大山 日出夫.....	6
4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉.....	6
5. 基調講演	
「DX時代の授業づくりについて考える」合田 哲雄（文化庁 次長）.....	7
6. 学生発表（大学生による日本語指導支援）.....	1 8
7. 学生発表（留学生等による児童・生徒との交流）.....	2 2
8. 学生発表（大学生による学習支援）.....	2 8
9. パネルディスカッション	
アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携	
～ 地域連携の現状を踏まえた ICT の可能性 ～.....	4 0
10. 閉会式	
閉会挨拶：明海大学 副学長 高野 敬三.....	5 2
11. アンケート.....	5 3
◆ その他の事業報告	
12. 日本語指導教員研修（足立区/都立飛鳥高校/都立田柄高校/都立南葛飾高校）....	6 2
13. 2022 年度 英語授業改革セミナー.....	6 4
14. 文部科学省委託 令和4年度明海大学との連携による専門人材育成・確保事業 — MEIKAI-JOE プラス 2022 小学校外国語科等講座 —.....	6 6
15. 2022 年度教職課程・地域学校教育センター（METTS）の歩み.....	6 8
16. 2022 年度 METTS NEWSLETTER 第1号から第10号.....	7 0
17. 2022 年度 METTS 事業参加学生一覧.....	7 3

1. 巻頭言・感謝の辞

明海大学 学長 安井 利一

2023年2月4日に開催いたしました「大学と地域連携の未来」シンポジウムに際しまして、本学と連携協定を締結していただいている教育機関の関係者の皆様、小中学校・高等学校の先生方、地元地域の方々など150名近くの皆様にご参加いただきましたことに、まずもって篤く御礼申し上げます。また、開会式のご挨拶をいただきました東京都足立区教育委員会教育長の大山日出夫様、浦安市教育委員会教育長の鈴木忠吉様をはじめ、基調講演の講師をご快諾いただきました文化庁次長の合田哲雄様、パネルディスカッションのパネリストとしてご登壇いただきました足立区教育委員会学力定着推進課指導主事佐藤学様、東京都立田柄高等学校校長山崎聡子様にご心より感謝申し上げます。

本シンポジウムは、地域学校教育センターを本学に設置した2016年度以来実施しており、今回で7回目を数えるに至りました。ここ2年間は、新型コロナウイルスの影響によりオンラインによる開催といたしましたが、コロナ禍の状況を慎重に鑑み、本年度につきましては、対面とオンラインによる「ハイブリッド」の形式で実施することといたしました。

全世界的に多大な影響を及ぼした新型コロナウイルスは、まだ完全に収束した訳ではありません。この間に私たちが失ったものが多いのは事実ですが、オンラインによる授業や会議が身近になるなど新たな可能性が見え始めているのも事実です。オンラインの利便性と対面のリアリティ、その二つを今年のシンポジウムでは多少なりとも実現できたものと考えております。

こうした背景も踏まえ、今年度のテーマは、「アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携」とし、更にサブテーマを「地域連携の現状を踏まえたICTの可能性」といたしました。基調講演では、合田様から「DX時代の授業づくりについて考える」の演題の下、これからのデジタル社会のさらなる進展の中で、教育の果たす役割や在り方について、多大なるご示唆をいただくことができました。また、3つのグループからなる学生の発表では、コロナ禍における実践を積み重ねてきたからこそその苦労や工夫を交えながらの生の実践を報告することができました。さらに、パネルディスカッションでは、教育委員会と学校そして学生の立場から、地域連携の今日的な意義について議論を展開していただきました。貴重なご意見をいただいた登壇者の皆様には、改めて感謝の意を表したいと存じます。

ご参会の皆様、そしてオンラインで参加していただいた皆様からいただいたご意見をもとに、明海大学は今後とも一層、地域に根ざした大学として小中学校、高等学校等の支援を積極的に行っていく所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2023年2月4日

2. 当日のプログラム

- 1 シンポジウムタイトル：2023 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム
アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携 ～地域連携の現状を踏まえた ICT の可能性～
- 2 開催日時、会場（※対面とオンラインのハイブリッド開催）：
【開催日時】2023年2月4日（土）12：00～16：40
【会場】2206 大講義室（配信会場）、2205 講義室、2204 講義室
- 3 タイムスケジュール

時間	内容
12：30	【開会式】 司会：橋本 ありさ（明海大学外国語学部英米語学科4年） 及川 龍之介（明海大学外国語学部英米語学科4年） 【学長挨拶】 安井 利一 【足立区教育委員会 教育長 挨拶】 ※Zoom によるリモート登壇 大山 日出夫 【浦安市教育委員会 教育長 挨拶】 ※Zoom によるリモート登壇 鈴木 忠吉
12：40	【基調講演】「DX時代の授業づくりについて考える」 合田 哲雄 文化庁 次長
13：40	休憩
学生発表	
	司会：橋本 ありさ（明海大学外国語学部英米語学科4年）
13：50	【グループ A】 大学生による日本語指導支援 大橋 瑠織（外国語学部日本語学科3年） 【グループ C】 大学生による学習支援 君塚 翔伍／横田 裕哉（外国語学部英米語学科4年） 上原 二葉（外国語学部英米語学科3年） 池内 夏美／高木 由紀／小川 翔太郎／田中 啓夢／富樫 美智雄（外国語学部英米語学科2年） 清宮 咲歩／滝沢 珠里（外国語学部日本語学科3年） 【グループ B】 留学生等による児童・生徒との交流 小林 悠太／鈴木 歩／R.P.P.マドゥランガ クマーラ（外国語学部英米語学科4年） 桑原 百蘭／ゲン ティ トウイ ズオン（外国語学部英米語学科3年） 呉 義偉（外国語学部日本語学科4年） 梁 予（外国語学部日本語学科3年） サブコタ ルベス（ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティ・ツーリズム学科1年）
15：25	休憩

時間	内容
15:30	<p>【パネルディスカッション】 アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携 ～ 地域連携の現状を踏まえた ICT の可能性 ～</p> <p>パネリスト</p> <p>佐藤 学 (足立区教育委員会 学力定着推進課 指導主事) 山崎 聡子 (東京都立田柄高等学校長) 呉 義偉 (明海大学外国語学部日本語学科4年) 児島 晴香 (明海大学外国語学部英米語学科3年)</p> <p>コーディネーター</p> <p>大池 公紀 (明海大学 外国語学部 教授 教職課程センター 副センター長) 米村 珠子 (明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター 教授)</p> <p>司会</p> <p>及川 龍之介 (明海大学外国語学部英米語学科4年)</p>
16:35	<p>【閉会式】 【閉会挨拶】 高野 敬三 (明海大学 副学長)</p>

3. 参加状況

教員 (小学校・中学校・高等学校・大学等)	38
教育委員会	27
学生・大学院生	50
地域住民	7
マスコミ	1
その他	7
計	130

4. 開会式

4-1. 開会挨拶：明海大学 学長 安井 利一

ただ今、ご紹介いただきました明海大学学長の安井と申します。本日は2023「大学と地域連携の未来」のシンポジウムにご参加をいただきまして、ありがとうございます。

この企画は本学の学生がいろいろと地域で活動し、お世話になっている、このことに関して集大成として発表しディスカッションをしながら、それぞれその教育的な成果ということについてさらに向上させようという企画でございまして、今回で7回目ということになっております。

本日はいつも学生がお世話になっている皆さま方にご参加をいただいております。この場をお借りして厚く御礼を申し上げたいと思っております。誠にありがとうございます。また、今日は基調講演で文化庁次長の合田さんがお話をしていただいていることになっています。合田さんと私は、2012年の中教審(中央教育審議会)で一緒しました。この時の答申は、大学の質的転換に関するもので、大学・高等教育にとって極めて大きなインパクトのあるものでした。その後、私立大学協会でも一緒した記憶がございますが、合田さんは教育課程課長も務められ、学習指導要領の改訂、大学教育や大学の在り方に関するマネジメントや学生の主体的学習、アクティブラーニング等、様々な施策に関わってこられました。その中に地域連携もあり、私どもの大学といたしましても地域の連携の中で学生の主体的な学びをつくっていききたいなと思い、取り組んできたところでございます。今日、こうした会を開くことができるのもまた、合田さんのそういったお考えというものが大きく影響しているというふうに考えております。

今日は、教育連携をしていただいております東京都立田柄高等学校の山崎聡子校長様、足立区教育委員会の学力定着推進課の佐藤学指導主事にも、パネルディスカッションの方にご参加をいただけるということで、大変光栄に思っております。ま



た、本日はご多用中にもかかわらず教育連携を締結しております東京都足立区教育委員会教育長の大山日出夫様、千葉県浦安市教育委員会教育長の鈴木忠吉様にオンラインでご挨拶を頂戴できるということでございます。ありがとうございます。

このシンポジウムが次の新たな時代における小中高等学校、また、大学教育との連携ということで、さらに大きな発展につながる、そういったシンポジウムになってくれることを期待しているところでございます。

最後に、このシンポジウムを開催するに当たりましては、本学の地域学校教育センターの高野センター長をはじめ教員の皆さまには多大なご尽力をいただいたことを、大学として改めて御礼を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきますと思います。

本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。

4-2. 足立区教育委員会 教育長 挨拶：大山 日出夫 ※リモート登壇

足立区教育長の大山と申します。本日はシンポジウムが盛大に開催をされますことを心よりお慶びを申し上げます。本来であれば現地にお邪魔をしなければいけないのですが、他の公務もありましてオンラインということでお許しをいただければと思います。

明海大学の皆さま方には足立区との連携事業におきまして、大学を挙げて支援をしていただいているということを常にかけております。学生や留学生の皆さんも毎年、入れ替わりもあることと存じますが、足立区との連携事業を支えていただき、大変に感謝をしている次第です。

小中学生はなかなか大学ということについてイメージができないと思いますが、こうした事業を通じて将来の自分の姿というもののイメージがかなり明確になったのではないかと感じておりま



す。私が参加をさせていただいたスピーチプレゼンテーションコンテストでは、英語マスター講座の卒業生が明海大学で学んでいるということも確認ができました。この事業を通じてとても良い循環ができているなというふうに感じているところでございます。お願いばかりで大変恐縮ではございますが、私ども足立区としては明海大学とのこの連携事業を通じて子どもたちが着実に力をつけていると感じております。どうぞ今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉 ※リモート登壇

皆さまこんにちは。地元浦安市教育委員会教育長の鈴木忠吉です。本日は、シンポジウムの開催、誠におめでとうござひます。貴大学には本市教育行政の推進に当たり多大なるご理解、ご配慮を賜っておりますことにこの場をお借りして御礼申し上げます。

さて、浦安市と明海大学は6年前の2017年（平成29年3月）に教育委員会と大学との連携に関する協定を締結しております。ただ、この締結以前から、明海大学の学生さんによるボランティア活動など、地域国際交流やインターンシップの受け入れなど行ってきたところでは、しかしこの協定の締結により、本市と明海大学の連携が一層促進されてきました。具体的な取組としましては、教員の英語指導力向上のための研修、児童、生徒に対しては放課後の市内中学生の学習支援を行う青少年自立支援未来塾や小学校高学年の知的好奇心や広い視野をもつことを目的としたうらやす子どもクエストなど、その全てが子どもたちの学び



の充実につながっています。子どもたちの成長にとって、学校と地域の連携が益々重要になってまいります。こうした中、このシンポジウムを通じて今一度、学校と地域の未来の在り方を考えてみたいというふうに思ひます。社会に開かれた教育課程の実現に向け、明海大学をはじめとする地域の様々な方々のお力をお借りしながら、新しい時代を切り開き、しなやかに生きる子どもたちを育てていきたいと考えております。

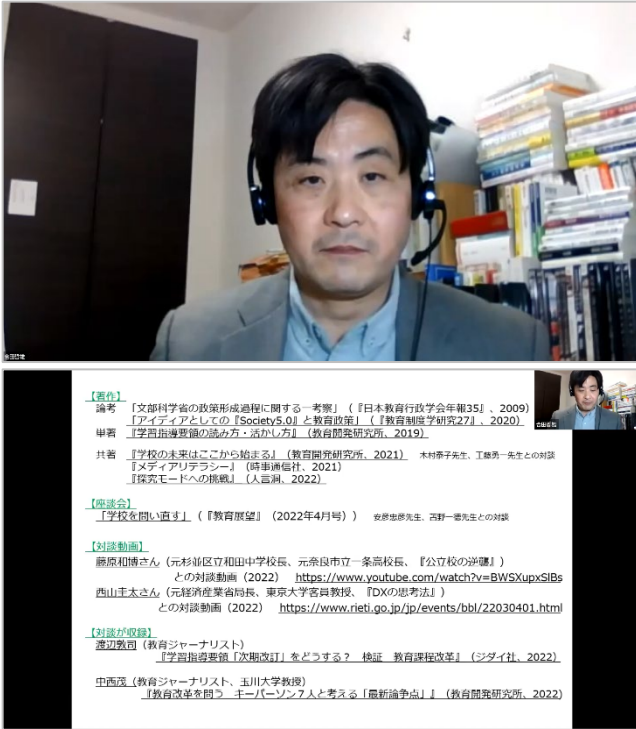
今後とも明海大学と浦安市教育委員会の相互協力をお願い申し上げます、簡単ではございますが、ごあいさつとさせていただきます。

5. 基調講演

◆「DX時代の授業づくりについて考える」※リモートでの講演

合田 哲雄（文化庁 次長）

一 講演内容



皆さま方、こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました、合田でございます。先ほど、学長からお話ございましたように、安井学長には10年近くいろいろご指導を賜ってまいりました。今日は、私が50分間程お話をさせていただいて、その後、いろいろまた議論をさせていただきたいと思っております。

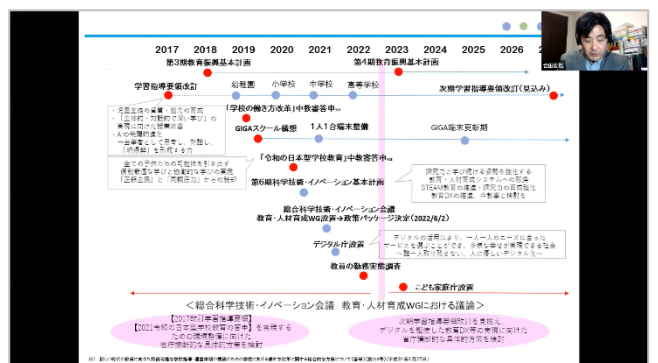
今日は恐らく学生の皆さんも多くいらっしゃると思いますので、DXというふうに言われますが、デジタル時代の学校教育の在り方について、今、政府全体でどんな議論をしているのか、そしてどういう方向に進もうとしているのかということをお話させていただきたいと思っております。

先ほど司会の方から私のこれまでの経歴についてご紹介いただきました。もしご関心がございましたら今、お示ししているシートのちょうど真ん中辺りに元杉並区立和田中学校校長、リクルートご出身で民間人校長のトップランナーでいらし

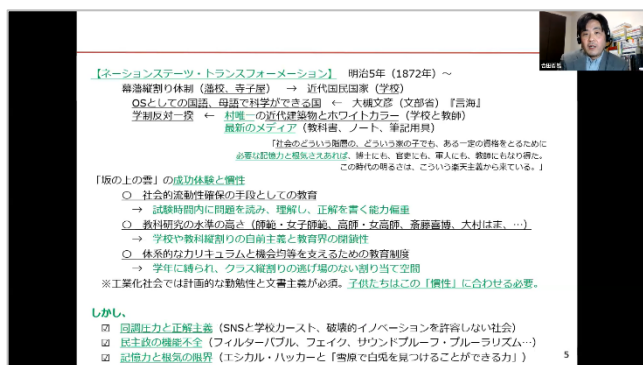
た藤原和博さんとの対談の動画が YouTube に載っております。それから今、私は教育関係の方々に西山圭太さんという元々経産省におられた方が書いた『DXの思考法』という本を強くお勧めしていきまして、この西山圭太さんと対談した動画も YouTube に載っておりますので、もしご関心がありましたらそういったものをご覧いただければと思っております。

さて、今、この2023年2月というのがどういう地点かということをお示ししたのが今のシートでございます。私自身が担当課長として携わらせていただきました2017年の改訂から既に6年が経とうとしているところです。ご存知の通り学習指導要領というのは10年に1回、改訂されるサイクルですので、次の改訂が2027年頃ということになりますと、ちょうど今、その折り返し地点だということになります。

次の改訂はこれまでの改訂とはかなり質的に異なるものとなります。その最大の要素は一人1台の情報端末を整備するGIGAスクール構想というものが実現して初めての改訂になるということにあります。このことがこれからの教育の在り方に大きく影響してくると思えます。お聞きになった方もおられると思いますが、昨年2022年というのは明治5年に日本に学校制度が発足、学制が発布されて150周年という節目の年でございました。この学制というのは、教育史で学んでおられますように、画面に司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』



という小説をNHKがドラマ化した時のオープニングのナレーションを書かせていただいておりますが、この学制というのは、教育史で学んでおられますように、それまでの親の職業にしか就けなかったという社会から「社会のどういう階層の、どういう家の子でも、ある一定の資格をとるために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも、官吏にも、軍人にも、教師にもなり得た。この時代の明るさは、こういう楽天主義から来ている」という時代への転換です。まさに記憶力と根気さえあれば、親の職業にかかわらず自分の人生が変えられる、という楽天主義が日本の学校教育を輝かせていたというふうに申し上げることができると思います。



ただ、この『坂の上の雲』の成功体験は、物理学で言うところの「慣性」と裏腹でありまして、記憶力と根気を示すための手段として試験時間内に問題を読み、理解し、正解を書く能力というのが偏重されたわけです。人間には様々な能力がありますが、読むことと書くことが偏重されたということが言えます。それから体系的なカリキュラムと機会均等を支えるための教育制度つまり記憶力と根気があれば人生を変えられる、そのためのチャンスは平等に与えましょう、という仕組みが、子どもの側からすれば、学年に縛られ、クラス縦割りの逃げ場のない割り当て空間のように思えるというような慣性に結びついていていたと思います。工業化社会というのは勤勉であること、そしてあらゆることを文書に表現して記録すること、これが必須でしたから、子どもたちはこの慣性に合わせる必要があったわけですが、今、そのことが大きな隘路、次に述べるような困難さに直面をしているわけです。

一つは同調圧力と正解主義、これは若い学生の皆さんも携帯ですぐに返事をしないと仲間外れにされるようなことがあるというふうにお聞きしますけれど、我が国、大人の社会でもこの同調圧力と正解主義が破壊的イノベーションというものを許容しないという社会の大きな背景になっています。中央教育審議会の答申の中で同調圧力と正解主義を乗り越えないといけないというかなり明確なメッセージが出されている所以であります。

もう一つは民主主義の機能不全ということが言われています。デジタル化によって自分と同じ考え方をする、そういう情報に囲まれて生きていくことができるようになるとどんどん分断が進んでいくということが、世界の先進国で起っているということでもあります。

それから先ほど申し上げた記憶力と根気というものがもう限界に達しているということでありまして、ご存じの通り我が国は様々なハッカーによる情報システムに対する攻撃にさらされています。それと戦うのがエシカル・ハッカーかつてのホワイト・ハッカーでありますけれども、このエシカル・ハッカーに求められる素質というのは「雪原で白兔を見つけることができる力」というふうに言われています。つまり、普通の人なら気にならないようなほんのちょっとした差異とかズレというものが気になってしょうがない、という力が求められているわけです。

しかしながらこの150年間、学校教育においてはそういう子どもは、細かいことにこだわり過ぎる子だとか、お友達と仲良くできない子だと言われてつらい思いをしてきたというところでありまして、したがってエシカル・ハッカーですとか、あるいはゲームのデバッグ作業を請け負うある会社の社員の半分以上は不登校かひきこもりの経験があるということになります。我が国の情報セキュリティを守る守護神のようなエシカル・ハッカーたちを日本の学校教育は言葉は悪いですが、切り捨ててきた、つらい思いをさせてきたということでもあります。

ただ、日本の教育界には、私自身が感じるにはかなり特異な構造がありまして、文部省や文部科学省などから言われるまでもなく、一人一人の子どもたちの特性や関心に応じた教育を通じて子どもたちの力を引き出したいという、そういう先生方の内発的な思いというのが通奏低音のようにずっとあったというふうに思っております。一つのハイライトが100年前の大正自由教育、あるいは75年前の戦後新教育だというふうに思います。ただ、これらの意欲的な取組というのは、例えば100年前の大正自由教育であれば、昭和恐慌と戦争への道という時代背景の中で、みんなと同じことができることが大事だという大きな時代潮流にのみ込まれてしまつてとん挫したり、大きなうねりにはならなかったりというのは皆さま方が教育史を通じてご存じの通りです。

今、「Society5.0」だとかデジタル化を背景にした社会の構造的な変化というのは、どういう変化なのか言え」と言われれば、「みんなと同じことができることが大事」な社会から「他者との差異や違いに意味や価値がある」社会への転換だと思えます。これは子どもたちや若い皆さんがどうすべきなのか以上に、我々のような世代、大人たちがどういうふうに我が国、社会をしていくのかということが問われているのだと思えます。みんなと同じことができることが大事な社会というのは、息苦しい社会ではありますが、ぬるま湯のようで居心地がいいところがあります。特に年を取れば取るほど、発言権が増すという構造になっていますので、今、社会の意思決定をする人たちは、これを変えようというモチベーションはなかなか起きないということなのですが、それが変わらなければ、かつてアジアに日本という、隆盛を極めた国があったねというエピソードで終わるのか、それとも世界に存在感のある成熟社会になれるかどうかの岐路でありまして、そのことを我々大人が問われているということだと思えます。

そしてまた、これを教育の世界に引き付けると、話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと、のそれぞれでも子どもたち、あるいは我々自身には得

意・不得意があります。文字情報だけではなくて、音や映像などを扱う情報によっても得意・不得意があります。ある関東圏の高校で、その高校は必ずしも勉強が大好きな子どもたちが集まっているわけではありません。学生の皆さんも高校時代に『山月記』を授業でやった記憶がある方もいらっしゃるかと思いますが、『山月記』という物語は私のような公務員、官僚にとってみればかなり胸に迫ってくる作品です。自分の虚栄心のために仕事をしているのか、何のために仕事をしているのか、というのを問うような重いテーマを背負った小説なわけですが、多分皆さんもそうだったと思いますし、私もそうでしたけれども、高校生にとってみればそんなに興味深い小説ではないかもしれせん。しかし、そのある関東圏の高校の女性の国語の先生はこの『山月記』を読んで1～2分の動画を作ってみようという授業をなさいました。その動画を私も拝見しましたが、相当驚きました。実に『山月記』という作品を深く理解をしていて、あなたの人生とは何かを問う、みたいなオープニングから始まった動画を見てなるほど、と思えました。

今までは、『山月記』を読んでそれをペーパーテストで表現をするということしか、表現手段がありませんでしたが、これからはそれを動画にさせるという表現方法がある。それだけ我々の表現方法が広がっているにもかかわらず、入試の方法や学力テストの方法はそれに対応していないということに改めて痛感したわけです。

ただみんなと同じことができるようにするのはなく、特性や関心の違いを前提にその力を引き出しつつ互いに自立した者同士の対話や協働によって成立する、広い意味での民主主義の基盤を形成すること、これが公教育の今日的意味だというふうに思っています。

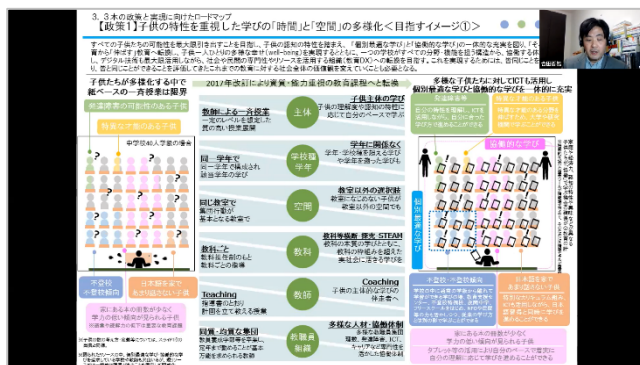
公立の小中学校には国と地方合わせて年間10兆円というお金が投資されています。それはこういう、広い意味での民主主義の基盤を形成するという事に対する国民の投資だというふうに言えると思っております。先ほど、冒頭ご覧いただ

いたように、GIGA スクールをはじめとした最近の公教育の大きな変化というのは、基本的には一人一人の子どもたちの特性や関心に応じた教育を通して子どもたちの力を引き出したいという、これまで教育界が求めてきたことをどう実現するかという流れだというふうにご理解をいただければと思います。

それに関連して、文部科学省の教科調査官などをお務めになった奥村先生が『コミュニティ・オブ・クリエイティビティ』という本を編著でお書きになっておられて、その中で心理学がご専門の阿部先生という方が、「ひらめきやすい人」というのは心理学的にはどういう人なんだろうか、ということを書いておられます。この「ひらめきやすい人」というのが、広い意味でのイノベーション、異なるものと異なるもの新結合によって新しい価値を生み出す、という意味でのイノベーションの大本だと思えますけれども、その阿部先生は初めから偏見をもたない、柔軟に考えを改めることができる、自分の誤りを適切に見直せる、というのが心理学的にひらめきやすい人の類型だと仰っておられます。

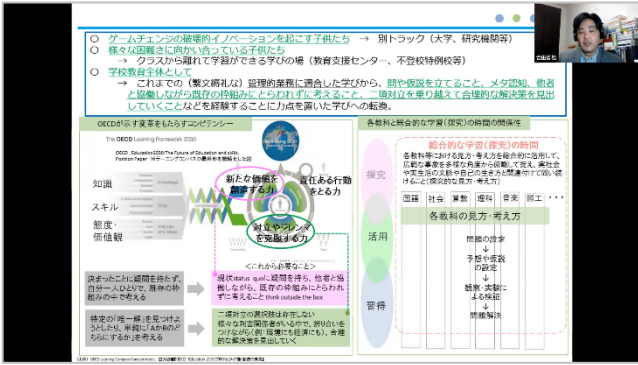
スライドの画面に、父親が一人息子を連れてドライブに出かけ、交通事故に遭った。瀕死の息子さんさんが病院に運ばれた。外科医が手術室に入り手術台に寝かされた子どもを見るなり、「この子は私の息子だ」と言って驚いた、という文章があります。私もこの文章を読んだ時にこの息子さんは複雑な家庭で、お父さんが2人いるのかな、と思ってしまいました。しかしこの外科医というのは女性だということがこの文章の前提になっているとすれば、それに思い至らなかった私は、バイアスがあるというふうに思います。その下にインクルージョンの研究者、野口晃菜博士のお書きになった『差別のない社会をつくるインクルーシブ教育』という本もご紹介をさせていただきました。このインクルーシブ教育というのは、何をすればインクルーシブ教育だというのではなくて、理想に向かって歩むプロセスそのものがインクルーシブ教育だというふうに仰っていて、これはかなり普遍

的なことだというふうに思います。我々、マジョリティと言われている人たちがもっているある種の特権というものに自覚的にならない限り、インクルーシブ教育というのは成り立たないし、それもある状態にすればインクルーシブ教育だというのではなくて、社会も子どもたちも我々も大きく変わる中で、理想に向けて歩むプロセスそのものがインクルーシブ教育だというのは、これから申し上げる教育の大きな転換と言えることだというふうに私は思います。



昨年6月に政府の総合科学技術・イノベーション会議というところが、初等中等教育に関する政策パッケージを示しました。これは答申のような文章ではなくて、今、ご覧いただいているようなこういう図とか絵で表現したものです。もしご関心があったらパラパラとめくっていただければと思いますが、ここにありますようにこれからの教育の在り方というのは、一人1台の情報端末を使うことによって、現に教室の中には様々な子どもがいる中、我々が考えているあの学校の、あの四角い教室以外にデジタルの中でのバーチャルな場も含めて、いくつかの教室が子どもたちの特性や関心に応じて組み立てられるというように教育の世界が変わっていくというのが今の政策の大きな流れであるというふうに申し上げていいと思います。

ポイントは大きく3つありまして、1つは、ゲームチェンジの破壊的イノベーションを起こす子どもたちというのは学校だけではなく、様々な場での学びの場を提供する必要があるということ。それから、そういう子と重なっている場合が多いのですが、様々な困難さに向かい合っている子どもたちというのは、クラスから離れて学習できる



学びの場というのをパブリックに、公が確保し提供するということが求められているわけでありませぬ。そして、学校教育全体としては、これまでの、できるだけ与えられた問いにできるだけ短い時間で正解を導き出すという力以上に、問いや仮説を立てること、メタ認知、あるいは他者と協働しながら既存の枠組みにとらわれずに考えること、二項対立を乗り越えて合理的な解決策を見出していくこと、ということが求められるということであつて、それが OECD での議論ですとか、今、各学校で展開されている新しい学習指導要領の基本的な考え方とも重なってくるということでもあります。

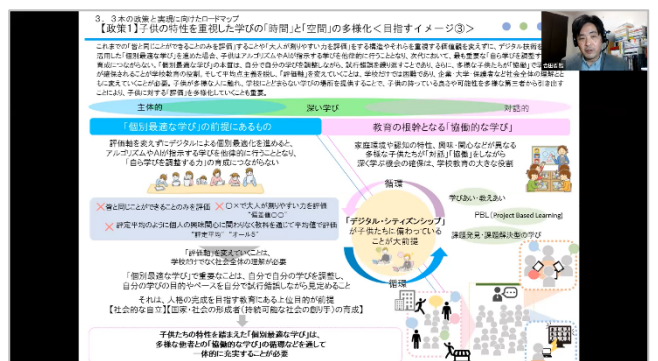
特に学生の皆さんは、それぞれの教科の見方・考え方ということをお聞きになったことがあるかもしれません。見方・考え方というのはその教科が全ての子どもたちに、ある意味では強制されている理由、根拠でありまして、例えば上から3つ目の歴史的な見方・考え方で書かれていることは、歴史を因果関係で捉える、比較の視点で捉える、相互作用で捉えるといったような見方・考え方を働かせることであります。

我々が歴史を学ぶのは、「いい国つくろう鎌倉幕府(1192年)」といったように、歴史的な事象と年号を暗記するためではなくて、我々が未知の状況に立ち至ったと思った時に過去を振り返って、これからの選択や判断をより質の高いものにするにあたって、過去の歴史的な事象を因果関係で捉えるとか、比較作用の視点で捉えるとか、相互作用で捉えるといったようなことが、これから目の前の子どもたちが10年後、20年後、社会で、社会生活によってより質の高い意思決定をする上で、必要不可欠だからこそ、歴史の学びをしているということです。数学的な見方・考え方も同じで、高

校の数学で二次関数をやるのは、二次関数の曲線が美しいからということ以上に、その二次関数を通してあらゆる社会問題の解決は、あちらを立てればこちらが立たずのトレードオフの関係にあるだけでなく、例えばコロナにおいても、命か経済かというふうな単純な二項対立を超えて、どういふふうな社会的な合意を形成していくのかといった時に、この二次関数の発想は大事だよねということが、数学の、数学的な見方・考え方なわけがあります。

そしてまた、社会において向き合う課題というのは教科縦割りではありません。いわば相互問題として出てくるわけでありませぬ。その時に探求的な見方・考え方というのは、目の前にある課題を解決するために、どの教科の見方・考え方を使得、あるいは組み合わせせて、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉えるかということであり、目の前の事象だけにとらわれるのではなくて、一度、メタのレベルで全体を見渡し、抽象論ではなくて、実社会や実生活との文脈や人ごとではなく自己の生き方と関連づけて、そして重要なのは安易に結論を出すことなく問い続けるというようなことを繰り返すことが個人の社会生活にとっても我が国のデモクラシーにとっても大事だということです。探求的な見方・考え方を働かせる総合的な学習の時間、総合的な探究の時間というのが大事だという構造になっているということで、これは教職で学ばれている学生さんにとってみればおさらいのような話で、恐縮でございました。

先ほどご覧いただいたように、これからの教育は間違いなく個別化が進むと思います。つまり個別最適な学びが進むわけですが、その時に、ちょうど今のシートの真ん中辺りですが、みんなと同



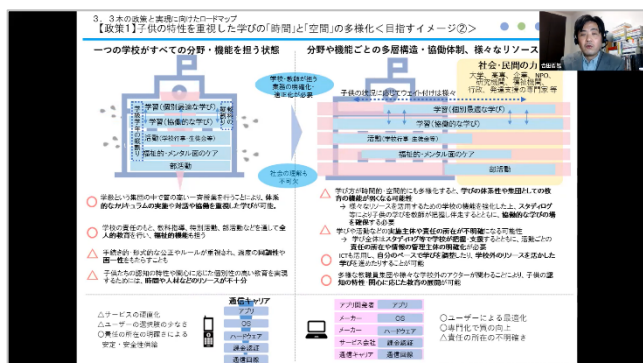
じことができることのみが評価されるとか、〇×で大人が測りやすい力だけが評価されるといったようなことが変わらないまま情報端末によるデジタル化によって個別最適化が進められると、単にアルゴリズムや AI が指示する学びを他律的に行うことになります。

2017年の改訂でも重視していますし、これからますます学校教育で重視されるのは、自らの学びを自らで調整する力にあります。教科書に追われるのではなくて、むしろ教科書を使って自分の立てた問いを解決する。そのために自らの学びを調整する力が大事になってくるわけでありまして、その時に大事なのが、協働的な学びでありまして、つまり個別最適な学びというものを進めていくと同時にどのような形であれ、他者と対話し協働しながらその問題を深める、また、他者との対話や協働というものが自らの学びを深める上でも不可欠だという認識を共有するように、この2つを循環させていくということが大事になってくるわけでありまして。本日のこのシンポジウムのテーマである「大学と地域連携の未来」というのは、まさにここに関わっていて、これから今の学生さんが学校の先生になっていただいた際には、学校の在り方も相当変わってくると思えます。今までのように学校縦割り、学年縦割り、学級縦割り、教科縦割りの構造から図の右側のようにレイヤー構造ごとに様々な、つまり大学も含めた様々な学校外のアクターとの連携というのが不可欠になってくる。そういった学びをまとめて、子ども一人一人の中で、興味や関心、特性に応じてカスタマイズしていく、そのための重要な手段として一人一台の情報端末がある。情報端末はただ単に、例えば太陽系の構造を2次元で見られるだけではな

くて、3次元で見られますといったよう視覚的な革新というのがすごく大事ですが、それ以上に、今、申し上げたように、一人一人の子どもたちが自分の学びを自分で組み立てるということができるツールとなり得るといことが大きなポイントだというふうに思います。

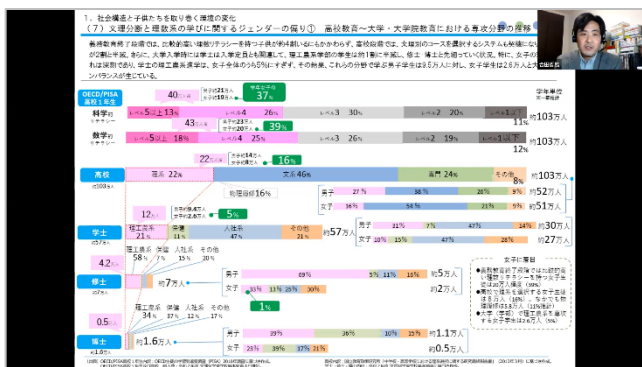
そうなりますと、先生方にそういう教育をしてくださいと政府としてお願いするだけではなくて、学校を成り立たせている3つのリソースについて考える必要があります。3つのリソースとは、時間と人材と財源です。このそれぞれについて、文部科学省だけではなくて、霞が関の多くの省庁と一緒に先生方を支えていくことに取り組みましようということ、今年6月に総合科学技術・イノベーション会議が政策パッケージとしてまとめたわけです。その重要なポイントは、4年後、5年後の指導要領においては、教科の本質等を踏まえた教育内容の重点化、あるいは教育課程編成の弾力化ということをやっけていかなくてはならないということが言われていますし、これからは教壇に誰が立てるのか、教壇に立つのは誰かという仕組みも大きく変えていかなければなりません。かつては18歳で先生になろうと思って教育学部に入って22歳で先生になって60歳まで勤め上げるというのが言わば定番のモデルでしたけれども、恐らく今、若い方々で22歳で就いた職業に一生というか、60歳まで勤め上げようと思っている人の方が少ないんじゃないかなというふうに思います。今の教員免許制度というのは古いです。伝統的なキャリアパスを構造に組み立てられていますので、これからは理数系の専門家だとか、発達支援の専門家だとか、AIやプログラミングの専門家が教育学部に入り直すことなく普通免許が取れるような仕組みというものがどうしても必要になってくるというふうに思います。

そういった意味においては私立大学の教職センターといった場所がどういう機能を果たしていくのかというのが、これから私は大きなポイントだと思いますし、先生方自身も、兼職・兼業や回転ドア方式の雇用といったようなこと、これをしつ



かりやっついていかないと教育界に人が参入しないと
 いうことになりかねないということでもあります。
 財源については確実に増やしていきながら、かつ、
 今まで財源の配り方は基本的には全て紙ベースが
 前提になっていましたので、これをデジタル化と
 いうものに転換しながら充実をしていく必要がある
 と思います。

今、申し上げたようなことは、これも詳しい説明
 は省かせていただきますが、昨年6月のいわゆる
 骨太方針にほぼ全部入っています。ここまで教育
 の大きな転換について、政府の骨太方針という
 閣議決定の文書に盛り込まれたことは今までなか
 ったというふうに思いますが、その中でも、大学
 の専攻分野のポートフォリオを変えていきましょ
 うという、これまでだったら本当に実現可能な
 と多くの方が思われるようなことも書かれてお
 ります。その背景には、15歳の段階、高校1年生
 の夏、OECDのPISA調査という、全世界で子ども
 たちの学習状況を把握するその仕組みの中で日本
 の女子生徒の数学的リテラシーと科学的リテラ
 シーはレベル4以上という国際的にかなり高い数
 字になっており、その割合が4割という状況にあ
 ります。これはOECD諸国トップでありまして、
 15歳の段階では日本の女性は世界でも科学的リ
 テラシーと数学的リテラシーが高いということが
 数字の上でも表れています。



しかしながら、高校に行って普通科の理系で学
 ぶ女性の生徒さんは同世代の16%、大学で理学部、
 工学部、農学部といったようなサイエンス系の学
 部で学ぶ女性の学生さんは同世代のわずか5%に
 までなってしまいます。この背景には、一つには
 確実に社会的、文化的なバイアスがあります。文
 系は女性らしいが、機械工学は女性らしくないと

いう保護者の意識調査の結果がある。これは最近、
 東京大学の横山広美先生が『なぜ理系に女性が少
 ないのか』という新書の中に提示されていること
 です。こうしたバイアスはぜひ取り除かなければ
 なりません、資料をご覧くださいたらお分かり
 の通り、高校の普通科理系で学んでいる生徒さん
 がそのまま大学に進学したら、理工農系だけでな
 くて、保健系を加えても実は大学の入学定員は足
 りないという実情がございます。私は文系ですし、
 文系がいらないとかダメだとか言っているつもり
 は全くありません。問題は日本の教育の構造の中
 で文系を選ぶと理系の学びから離れて行ってしま
 うということでもあります。特に今、デジタル化に
 よって我々人類はサイバー空間での演繹的な科学
 としての計算科学と、帰納的な科学としての特に
 データ科学というものを手にいたしました。今ま
 で把握できなかったことが把握できるようになっ
 たわけですが、この構造を文系と言われる人たち
 も理解をしておかないと、科学もマネージできな
 いし、社会もマネージできないということであり
 ます。問題なのは文理分断だということでありま
 すが、そのこともありまして、実は今年の暮れに
 成立いたしました令和4年度の第二次補正予算で
 は大学の理数分野への転換のために3,002億円と
 いう基金が設けられました。これは学部の理数系
 分野への転換が無理だとか、大学では知的成長よ
 りもサークルや体育会活動の方が大事だとか、知
 識再生型の入試は変わらないとか、女性は文系、
 といったようなバイアスを打破するものでありま
 す。

学生の皆さんにおかれましては、もし教壇に立
 たれた時には、子どもたちの理数分野への小さな
 関心や興味をぜひ大きく育てていただきたいと思
 っております。特に、理数分野に対して関心を持
 った女性の児童・生徒に対しては、これから政府
 も皆さんのことをしっかりバックアップするので、
 親御さんが何と言おうとも、自らの関心を大きく
 伸ばしてほしいと励ましていただきたいと思います。
 もちろん、不確実な時代だからこそ人文的な
 思考が重要であることは言うまでもありません。

ただ、歴史教科書の脚注暗記（記憶）競争を超えた文系の学びの意義というものをぜひ子どもたちと共有していただければというふうに思います。こういった形で大きく時代は動き始めていますが、もう少し深く申し上げると、皆さんはアジャイルガバナンスという言葉をもしかしたらお聞きになったことがあるかもしれません。政府の閣議決定文書、法文書にも掲載されている言葉なのですが、これまでのサプライサイドに立った枠組みからデマンドサイドに立って、デジタルを生かしながら構造や政策、予算というものをアドホックにというよりも小刻みに、データに基づいて見直していくという発想であります。

教育について言えば、これまでの文部科学省・県教委・市教委・校長会・学校というサプライサイドに立った縦のピラミッド構造から、今日の会もそうですけれども、教師、それから学生さん、子どもを含む多様なアクターが SNS なんかを使ってつながっていて、対話・協働して、そしてそれぞれの納得解や最適値を求めて探究するというデマンドサイドに立った構造になっているわけがあります。

これは私の私見だと思って聞いていただければと思うのですが、今の学校教育法というのは学校組織法ともいべきもので、小学校というのを置きますよ、小学校には校長を置きますよ、そして副校長や教頭を置きますよ、というように、徹頭徹尾組織論で書かれた法律になっています。ただアジャイルガバナンスの時代では、おそらく小学校ではなくて、「初等教育プログラム」と書くべきだと思います。そして本日は「大学と地域連携の未来」というテーマでシンポジウムが行われているわけですが、そうすることによって学校や学年を超えた子どもたちの学びの時間的・空間的な多様化、そして大学も含めた学校外の様々なアクターの学びへの参画が促進されるということになるかと思っております。

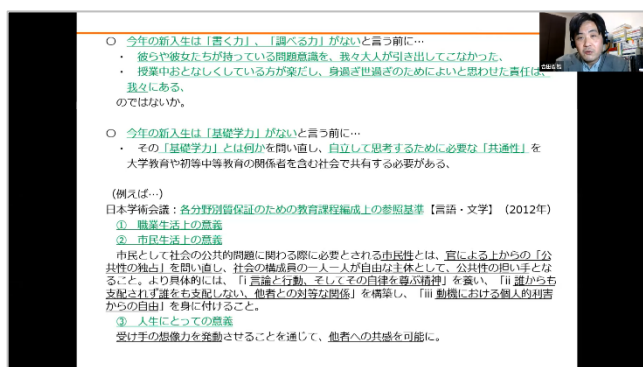
学生の皆さんが教壇に立たれる頃に次の改訂、つまり 2027 年ごろの改訂が実施をされるというような時期に立ち会うのではないかなと思います。

その時には情報端末一人 1 台となつての初めての改訂ですから、教育課程の構造も相当大きく変わるといふふうに思っていますし、先ほど申し上げたように、免許制度や教員配置基準も大きく変わっていくことになろうかと思っております。これまで以上に全国 35,000 人の校長先生や 1,700 人の教育長といった方に若くても適任者を登用するというような仕組みも必要だと思っております。一人 1 台の情報端末を使うことによって、子どもたちの特性や関心に応じた学びをどう組み立てていくのかというような学校教育に大きく転換するという時期に今、一番大きな、乗り越えなければいけない壁というのは、我々自身の意識だと思っております。学校というのはこういうものだ、というバイアスがこれまで申し上げたような学びの転換に当たっての一番大きな壁になるというふうに思っています。

大人の皆さんの頭の中にある、かつて自分が受けてきた教育とは異なるため、一つ一つが実現されるにつれ、不安や違和感が生じるかもしれない。しかし、例えば社会化の授業で源頼朝はなんで京都から遠く離れた鎌倉に幕府を置いたんだろう、ということを探し議論するような授業に立ち会うとして、大人から見れば、社会科の授業を見に来たのに学級会だったというふうな不満とか不安が起こるかもしれません。そこは我々、教育行政に携わる者がかつてのように「いい国つくろう鎌倉幕府」と暗記するだけでは足りない、これからの子どもたちは未知の状況に立ち至ったといった時にこれまでの貴族政治から武家政権を樹立するという時代の大きな転換点の中で、源頼朝がどういう選択をしたのかという探究は、子どもたちが将来行うであろう社会生活における意思決定の質を高める上で不可欠と言えます。だから今、こういう授業をやっているのです、ということをしつかりと対話して認識を共有することが大事だというふうに思っています。

それから、大学入試が変わらないと初等中等教育が変わらないという議論もずっとありました。私もリクルートのカレッジマネジメントという雑

誌でもう7年、8年前からずっとこのことは言い続けてきました。端的に言えば、知識再生型の問題中心の入試、文理分断な学部・学科構成、学生の力を伸ばすためのデザインなきカリキュラムというのは、大学の規模が大きいから、首都圏・大都市圏にあるから、伝統があるからといって生き残れるだろうかということをぜひ私は大学には考えてくださいとお願いをしております。安井学長がリードする明海大学というのはその意味においては小さくてもキラリと光る特長のある大学だというふうに思っておりますけれども、こういう中で私自身も大学といろいろな対話をしてくる中で一番申し上げたいのは、最近の新生は書く力とか、調べる力がないと仰る大学の先生は確かにいらっしゃると思いますが、しかし授業中おとなしくしている方が楽し、身過ぎ世過ぎのためによいと思わせた責任は、我々大人にあるということです。彼らや彼女たちがもっている問題意識というのを我々大人が引き出してこなかった。総合的な学習の時間というのはそのための重要な時間だというふうに思います。それから今の新生は基礎学力がないみたいなことを言う先生、大学の先生もいらっしゃると思います。その場合の基礎学力とは何かということをしつかりと考えていく必要があると思います。



例えば10年前、日本学術会議は大学教育においてそれぞれの分野ごとに参照基準というのをつくりました。もちろん学習指導要領のようなものではありませんけれども、大学の先生が知恵を出し合って、この分野のカリキュラムということについての大きな下敷きをお書きになったわけですが、例えば言語・文学においては、この学ぶ意義というのは社会生活を送る上での意義、市民

生活上の意義、人生にとっての意義があるということを行っています。特にこの市民生活上の意義では、言語や文学を学ぶことが、例えばその市民性という意味においては、誰からも支配されず、誰をも支配しない、他者との対等な関係を構築するんだということが書かれてあって、私はその通りだと思います。だとするならば、初等中等教育との役割分担の中で、どういうことを初等中等教育で行い、それを大学ではどう引き上げるのか、引き出すのかということを実際に考えて共有することが必要だというふうに思っていますし、その大きな流れは私は今、起きているというふうに思います。

こうした形でこれから教育が大きく変わっていく中で、今の学生さんは教職という人生を選んでいただいた。教職という職業を選んでいただいたら教壇に立つと思うんですけども、一言だけ付け加えさせていただきますと、ぜひこれからは、自分で問いを立てて課題を解決するという学びが大事であることはもちろん大前提としながらも、子どもたちの中には、極めて厳しい環境の中で課題の解決にストレートに向かわない子どももいること、あるいはすぐに解決しないような難問、難題に取り組む子どもたちもいること、そういう子どもたちとしっかりと向き合うことが忘れてはならない大事なことであり、思っております。

最後でございますが、ヒンディー語では、「私はヒンディー語を話すことができる」を「私にヒンディー語がやってきてとどまっている」というふうに表現をするようでございます。言葉を使い、思考することは過去の長い文化との対話の上で成立する。今、アイデアとか知識とかデータといった目に見えないものに大きな価値が生じる社会になってくると、独創的なアイデアを出した人がwinner-takes-allで全部利益を独り占めするという社会になりつつあります。しかし、いかに独創的な知識や思考であっても、過去の知的蓄積からのギフトでもあるという謙虚な気持ちをもつということが真の意味で教育的だというふうに私は思います。また、それは日本の学校教育が積み上げ

てきたことだというふうに思います。米国は **winner-takes-all** でいいかもしれないけれど、日本においてはクリエイティビティ、創造性と社会の公正さ、フェアネスと、個人の尊厳、ディグニティというものを両立させる、そういう社会をめざすための重要な基盤としての教育があるというような大きなビジョンを、ぜひ我々は共有する必要があるのではないかと考えております。駆け足で恐縮でございましたけれども、私からのご説明は以上でございます。ありがとうございました。

一 質疑応答

【質問者 1】

資料の 7 ページに「みんなと同じことができることが大事」から「他者との差異や違いに意味や価値があるという大きな変革」で、これを大人が行うことが大事である、と仰っていたと思います。このことについて、具体的に大人がどのようなことを行っているのか教えてください。

【合田】

ありがとうございます。極めて重要なご質問だと思います。率直に申し上げるとうまくいっていません。なぜなら大人になってみれば、みんなと同じことができる社会というのは、居心地がいいからです。ただ、少なくない大人がこれを変えていこうというふうに行っていることも事実です。今、大きく時代の歯車を回し、時代を大きく変えている人たちは私のような官僚機構にいる官僚でもなければ、大企業の幹部でもありません。教育の世界で言えば、認定 NPO 法人のカタリバをリードしている今村久美さんとか、それから同じく認定 NPO 法人の **Learning for All** の代表をやっている李さんですとか、そういう本当に 30 代、場合によっては 20 代の若い人たちがこの社会を大きく変えようとしています。我々の世代ができることはそういう人たちをしっかりと支えて、そういう人たちが大きく社会を変えることのお手伝いをしていくということでありまして、ちょうど今、日本社会全体が大きくせめぎ合っているということだと思います。私は個人的には先ほど申し上げたカタリバの今村久美さんや **Learning for All** の

李さんたちが存分に活躍できる社会をつくりたいと思っていますし、随分、社会構造も大人の意識も変わりつつありますが、なおせめぎ合っていると思います。ぜひ学生の皆さん、皆さん方は少なくともデジタルということに関して言えば、間違いなく我々ロートル世代にはない力を持っています。今、ウクライナで戦争が起こっていますが、これに直面することの意味というのは非常に大きいと思います。今の若い人たちにしかない、そういったポテンシャルというものをぜひ生かしていただいて、主張していただきたいと思っています。

あるベンチャーを立ち上げた若い方が、老害というのは年齢の問題ではない、学びを止めた人が影響力を持つようになった時に老害というのが生じるのだと仰っていて、私も全くその通りだというふうに思います。ぜひ若い方々には我々ロートル世代をよくよく見ていただいて、学びを止めた人か、そうではないのか、そうでない場合は我々をぜひ使って、使い倒して皆さんの大きな価値やビジョンというものを実現していただければと思います。前述しましたが、かつてアジアには日本という、かつて隆盛を極めた国があったよねというエピソードから、皆さん方の力で日本という国は年齢に関わらず学び続けているし、挑戦もできる、それからその属性とか背景によって不当な扱いを受けることのない非常にユニークで面白い国だと世界から思われるということが私は大事ではないかと思っています。

【質問者 2】

お話ありがとうございます。個別最適化とか今後の学校や教育の在り方が大きく変わっていくという説明の所で疑問に感じたのですが、評価の視点について質問します。現在行われている、いわゆる学力調査というものがございますけれども、そういったものは今後どのように変わっていくとお考えでしょうか。

【合田】

これも大変重要なご指摘だと思います。学力調査に関して言うと、今までは大きな技術的な制約がありました。すなわち紙ベースで全国一斉に同じ

日に同じスケジュールで行う。それを突き詰めたのが大学入学共通テストですけれども、ご存じの通り、今、この学力学習状況調査をどうしていくのかという一つの大きな挑戦としていわゆるコンピューター・ベースド・テスト（CBT）に転換するという議論が行われていて、実際、文科省の担当局では国立教育政策研究所とともにその取り組みを進めています。

CBT に転換されれば、全国同じ日に一斉に行って、隣の市と平均点が1点違うとか2点違うとかという、そういうゲームでは全くなくなるわけです。CBT 化するという事は、いつどこで受けてもいい。しかもそれは、一つは子どもたちの成長を把握するという事と、それからもともと全国学力学習状況調査はめあてというのか、何のために行うかという、子どもたちに「お前、勉強していないじゃないか」と言うためのものではなくて、我々大人つまり教える側とか、教育行政の側に、こういうふうな形で点数の差が出ているのはどういう原因で、どういう措置が必要なのかということをあぶり出すためにやっているわけでありまして。

そう考えると、やっぱりデジタル化というものの衝撃は大きくて、今、CBT 化に向けて実際に学力学習状況調査の検討というか検証事業をやっておりますので、そうなった時に学力学習状況調査の形というのは大きく変わってくると思います。ちなみに、評価という観点で申し上げますと、ちょっと別の文脈でございまして、今日はあまり詳しくはご説明しなかったのですが、やっぱり我々はこれからそのレポートとかプレゼンとかディベートだとか、そういったものに対する評価、いわゆるパフォーマンス評価をどう実現していくのかということが大きな課題だというふうに思っています。

歴史教科書の脚注をいくつ覚えたかで合否が決まる入試が変わらないのは、それが一番採点が楽だからですし、採点する側が責任を取らなくていいからです。パフォーマンス評価というのは評価される側以上に評価する側の見識や覚悟が問われるものでありまして、それを科学的にどう支えら

れるか。AI とかビッグデータを使いながら、その採点をどう支えられるのか、ということの内閣府で比較的大きな研究費をつぎ込んで研究しようということが今、進められております。

それとルーブリックといった取組の中で、子どもたちの評価というものをどう変えていくのかというのが、次の改訂の中で多分非常に大きなポイントになる。タキソノミーといったような学びの地図というか土俵ですね。ということではないかなと思っています。学力学習状況調査について言えば、私はデジタル化によってこれから大きく構造が変わる、変わるべきだと私は思っています。

【質問者2】

そうだなと思いながら伺っておりました。具体的に、いわゆる問題とされるような聞き方であるとか、子どもにこれに対して回答できるかと提示する課題ですね、その設計が変わっていくよというふうな理解でよろしいでしょうか。

【合田】

ぜひそうしたいと思っておりますが、そのためには質問者の先生をはじめ多くの専門家の力を借りなければなりません。なぜならば、そういう試験は日本は今までやってきませんでした。そういう意味においては、これも学習評価の基本だと思っておりますが、学習評価というのは先ほど申し上げたように、我々が子どもたちのどういう力を引き出そうとしているのか、与えられた問いに短い時間で解けるというだけではなくて、問い方自体を変えて、問いを立てるということについて子どもたちの力をどう引き出すのかという方向に学習調査というのをどういうふうに進化させるのかといったようなことを、デジタル化という一つの大きな構造的な変化を契機にしながら取り組んでいきたいと考えます。ただこれも、そういう編集方針とか意思がないと、先ほど申し上げたように膨大なデジタルドリルになってしまうので、そうならないように社会的な合意を形成しながら取り組んでいく必要で、だからこそ専門家の方々の力が不可欠だというふうに思っています。

6. 学生発表（大学生による日本語指導支援）

日本語指導支援（東京都立飛鳥高等学校）

参加学生	全日制課程	応用言語学研究科博士後期課程 3年 林 苗 外国語学部日本語学科 4年 田中 愛唯、菊地 竜星、平 七海 3年 茨田 真愛
	定時制課程	外国語学部日本語学科 4年 田中 愛唯 3年 大橋 瑠織 卒業生 永沼 綾乃

1 はじめに

本報告は東京都立飛鳥高等学校で日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科および応用言語学研究科の学生が日本語指導支援を行ったものである。

4月	7日間	11月	12日間
5月	13日間	12月	7日間
6月	13日間	1月	9日間
7月	7日間	2月	9日間
9月	7日間	3月	3日間
10月	13日間		

2 実施概要

(1) 飛鳥高等学校全日制課程（1クラス）

① 年間実施日（月曜日 計 18日間）

5月	9日、23日	11月	7日、21日
6月	6日、13日	12月	12日
7月	11日	1月	16日、30日
9月	5日、12日、 26日	2月	6日
10月	3日、31日	3月	13日、20日

② 参加者

生徒 5人、学生 4人

③ 内容

上級クラス、受講した生徒はみな、大学進学志望者。「話す・書くにつながる日本語読解 中上級」を使用し、主に読解の授業をした。生徒自身で問題を解き、その後、全体で確認をするという流れで進めた。読解の他にも、自分の意見を論理的に話せる、書ける練習も取り入れ、大学でも通用するような日本語指導を意識している。

(2) 飛鳥高等学校定時制課程

（日本語講座4クラス）

① 年間実施日

火曜日、水曜日、木曜日、金曜日
計 100日間

② 参加者

生徒 29人

学生 2人（田中 愛唯、大橋 瑠織）

③ 内容

生徒は漢字圏の中国の他、非漢字圏のバングラデシュやフィリピン、ネパールなど、様々で年齢も様々。初級クラス、中級クラス、上級クラスがあり、授業日によって生徒のレベルは異なる。教材は、「みんなの日本語」。文法指導を学習者のレベルを考えながら行った。生徒の年齢に幅があるため、生徒ごとの目的を把握する必要があった。また非漢字圏の生徒も多いので漢字の指導も必須であった。

3 学校の感想

全日制課程 副校長 竹原 義和 先生

全日制課程では毎年、「在京外国人生徒募集枠」で20人の外国籍生徒を受け入れています。このほかにも、毎年、外国にルーツをもつ、多くの生徒が入学してきます。

本校では放課後にレベル別に日本語講座を開講しており、これらの講座では日本語を学習するばかりでなく、日本での生活習慣や校則などを知る良い機会にもなっています。本校に入学した生徒たちが早く学校生活を充実して送ることができる

よう、多くの関係機関と連携して日本語指導支援を充実させていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

全日制課程 主任教諭 會田 哲也 先生
全日制課程では日本語講座を習熟度別に4種類設置しており、明海大学の講座では最も習熟度の高い数人が学んでいます。今年度は90分の授業を19回実施しました。

授業においては、日本語の長文を読み、自らも書くという実践などを通じ、生徒の力を伸ばしていただきました。先生方の授業の工夫により、生徒たちは楽しげに学んでいます。また、年齢の近い先生方に教えていただくことで、自らの進路選択においても良い刺激を受けております。

定時制課程 副校長 東 達康 先生
日頃から本校の日本語指導に御支援、御協力を賜り、誠にありがとうございます。日本語指導支援員の皆様のお力添えで、3年前より新設された学校設定科目「日本語」、今年度より2、3学年を対象にした学校設定科目「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」を設置することができました。

これにより系統的に日本語指導が行えるようになり、生徒にとってはより一層の日本語能力の向上に向けた支援ができるようになりました。昨年度以上に日本語能力検定試験に挑戦する生徒が増加しました。今まで以上に多くの合格者を輩出できるよう努力してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

定時制課程 主任教諭 紺野 敦志 先生
3年前より本校に新設された学校設定科目「日本語」そして本年度より2、3学年を対象にした学校設定科目「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」において、今年も本校の教員と明海大学からの日本語指導支援員による習熟度別の授業を実施しました。生徒それぞれの能力に合わせた文法項目を指導することができました。

また、初級者と中級者の合同授業においても支援者とのTTにより、どの生徒も日本語の勉強に積極的に取り組む指導体制をつくることができました。

4 見えて来た今後の課題

日本語指導支援は授業内のみとなっているため、授業外の個別のサポートを行えるようにすることも課題である。

5 実施してみての感想

作成した教材を「見やすい」、「分かりやすい」と生徒から言ってもらえたり、授業内で説明や補助をした際に、「気づいた」、「分かった」など、生徒の表情が変わった様子を見ると、とても嬉しいですし、何より、生徒にとってどうすればよいのかが目に見え、次の授業へ活かすことができていると感じます。（日本語学科3年 大橋 瑠璃）

6 2月4日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年大橋瑠璃が登壇し、上記の取組内容を報告するとともに、日本語を教えることの意義について次のように語った。

私が担当している、中級クラスに配布した、自由作文の教材です。この授業では、「～でしょう」「～かもしれません」を使用した自由作文の練習を行いました。いきなりこの文型を使用して書くというのは難しいため、先程の語彙リストや補助教材のように、自由作文にも例文を載せております。私の場合、自由作文の例文では、私自身のことを書くようにしています。そのようにすることで、生徒に興味を持ってもらうことができたり、身近に感じてもらえていると思います。自由作文は書く練習が目的ではありますが、普段の授業ではあまり聞くことができない、生徒の経験や将来の夢などを知るきっかけにもなり、生徒とのコミュニケーションが増えることで、信頼関係の構築にも繋がっているように感じます。



日本語指導支援（東京都立南葛飾高等学校）

参加学生	応用言語学研究科博士後期課程 3年	林 苗
	前期課程 2年	沈 伽迪、楊 凱
	外国語学部日本語学科 4年	菊地 竜星、角田 涼輔、浦野 遥風
	3年	茨田 真愛、高橋 紅葉、松本 夏保、 ヴ バオ ゴック

1 はじめに

東京都立南葛飾高等学校で外国にルーツを持つ日本語指導が必要な生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生が日本語支援を行った。今年度は、コロナウィルスの感染対策を十分にした状態で、対面での日本語指導支援を実施することとなった。授業の実施にあたり、高校の先生方に多大なご尽力を賜っている。

2 実施概要

(1) 年間実施日(月曜日、木曜日 計 33 日間)

4月	18日、21日、 25日	10月	3日、6日、 24日、27日、 31日
5月	9日、12日、 30日	11月	7日、10日、 14日、24日
6月	9日、13日、 16日、20日	1月	16日、19日、 23日
8月	22日、23日、 24日 (夏期講習)	2月	2日、6日、 9日、13日、 16日
9月	8日、26日、 29日		

(2) 参加者

2クラス 生徒約 16人

参加学生 上記表題に記載の 10人

(3) 内容

N3を目指すレベルの生徒に対する JLPT 対策・産出力(話す・書く)の育成が中心である。

JLPT に合格をしても、長文を読んだり、作文をしたりすることが苦手という生徒が多いので、運用力を上げる授業内容を工夫している。

3 学校の感想

東京都立南葛飾高等学校

校長 伊達崎 広 先生

本校は、在京外国人生徒枠があり、多数の外国につながる生徒が入学しています。在京外国人生徒等の学力向上のためには、日本語能力の向上が必要不可欠であり、明海大学との連携事業による日本語指導には大変に感謝しております。日本の学校で学ぶ在京外国人生徒が、安心して学校生活を送り、その中でより良く自己実現ができるよう、今後も高大連携を大切にしながら、教育環境の改善に努めてまいります。

教務部 田村 有見恵 先生

本校の第1学年の在京外国人生徒を対象に、週2回、生徒の日本語レベルに応じて日本語指導をしていただいています。生徒にとって優しく、わかりやすい授業をしていただき、生徒は日本語を楽しく意欲的に学ぶことができています。そのため、多くの生徒の日本語能力試験の合格に結びつき、希望進路実現につながっています。大変感謝申し上げます。

4 参加生徒の感想

1年 石橋 茉莉奈 さん

7時間目の授業の感想は、とても楽しく、日本語が上達しました。同じクラスの友達がモチベーションを高めてくれますし、先生方はとても親切です。私はまだ漢字が苦手ですが、漢字を理解して話すことは上達しました。

1年 横山 綾美 さん

7時間目が始まってから今まで、先生たちの優しさや親しみやすさ、そして楽しさを感じていました。最初は緊張した雰囲気でしたが、今では笑いの絶えないクラスになっています。また、読解の

やり方や作文の書き方、書くときの注意点など、どれも詳しくてわかりやすく教えてくださり、とても勉強になりました。高2になったらN1に向けて頑張ります。

5 見えて来た今後の課題

JLPT 試験対策をしていることもあり生徒のクラス間の入れ替わりが多い。また、「読めない」、「理解できない」となると、生徒のモチベーションが下がるので、教材の見直しや授業展開についての試行錯誤が必要だった。

6 実施してみたの感想

日本語指導支援を行う中で、自分自身の発音に課題があることにも気づきました。私にとっても日本語は外国語であるため、まだまだ課題があると感じますが、日本語を学んできた経験というのは、私の強みであると思っています。そのため、今後は、自分自身の課題を改善しつつ、自分の強みを活かして、生徒の気持ちに寄り添った授業を行ってまいります。

(日本語学科3年 ヴ バオ ゴック)

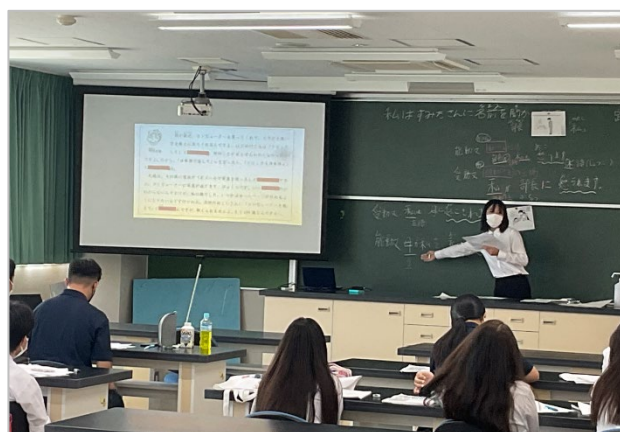
7 2月4日の発表

2月4日に開催したシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年大橋瑠織が登壇し、実施報告を行った。ここでは報告内容の抜粋を記す。

読解の問題を解き進める上で、語彙リストなどの補助が必要になってきます。教材の右隣に記載している語彙リストを、問題を解く前から配り、生徒が理解しやすいよう、工夫しております。こちらの語彙リストは、N3・N4クラスを担当している学生が作成し、配布したものです。1つの語彙に対して、最低2つの例文は記載するようにし、どのように使用されるかが分かりやすくなるよう、



意識しております。



語彙リスト

- (～) 驚く: ①予想しなかったことに会ってびっくりする。
一例: ・彼が結婚したと聞いて、驚いた。
・事故のお知らせに驚いた
②感心する。一例: 歌の素晴らしいさに驚いた
- 世の中: ①社会/世間一例: 彼は世の中をよく知っている
②時代一例: 変な世の中になったもの。
③人生一例: 本当に世の中がいやになった。

7. 学生発表（留学生等による児童・生徒との交流）

明海大学あけみ英語村 2022—小学生異文化交流プロジェクト—

第1回	日時	2022年6月29日（水）13時～16時
	参加者	足立区立舎人小学校 5年生 80人、本学留学生 14人・教職課程履修生 39人、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会
第2回	日時	2022年10月4日（火）13時～16時
	参加者	足立区立足立入谷小学校 5年生 24人、本学留学生 16人・教職課程履修生 34人、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会

1 はじめに

世界のさまざまな国・地域から来ている本学の留学生及び教職課程履修生と足立区の小学生とが英語を使って異文化交流する「明海大学あけみ英語村」は、今年度で6年目の取組となった。

今年度は2年ぶりの対面形式で開催した。参加した小学生も本学の学生も、マスク着用やこまめな換気、手指消毒などの感染症対策を徹底させて実施した。コロナ禍でも例年通り、2回実施することができた。

2 プログラム

- (1) 開村式（15分）
 - (ア) 安井学長あいさつ
 - (イ) 小学生代表あいさつ
- (2) 各グループでのイングリッシュ・キャンパス・ツアー（45分）
- (3) パトリツィア教授とタイソン准教授によるコミュニケーション・アクティビティ（30分）
- (4) 閉村式（15分）
 - (ア) 高野副学長あいさつ
 - (イ) 小学校校長あいさつ
 - (ウ) 小学生代表あいさつ 等

3 主なアクティビティの特徴

(1) イングリッシュ・キャンパス・ツアー

小学生は5・6人、留学生や教職課程履修生は3・4人で1つのグループとなり、計12グループがキャンパス・ツアーを実施した。ツアー中は全て英語でおこなわれ、学生や留学生は英語で図書館のラーニング・コモンズやイングリッシュ・

ゾーン、学食、テニスコートなどを説明し、小学生とコミュニケーションを楽しんだ。



(2) コミュニケーション・アクティビティ

アメリカ出身のパトリツィア先生とカナダ出身のタイソン先生が英語で自己紹介をした後に、簡単な日常英会話の見本を見せた。小学生たちはそれに倣って大きな声で自分の好きなスポーツや食べ物、キャラクターなどを答えた。そして、グループに分かれて、留学生や教職課程の大学生と自分の好きなものについて英語でやり取りをおこなった。うまく回答できるとダンボールで作られたスーパーカーを持って前に進んでいくゲームをおこない、小学生は英語を使ったコミュニケーション活動を楽しんだ。





4 小学生アンケート結果及び分析 (一部抜粋)

(アンケート回答者： 舎人小学生 84名
栗原小学生 56名)

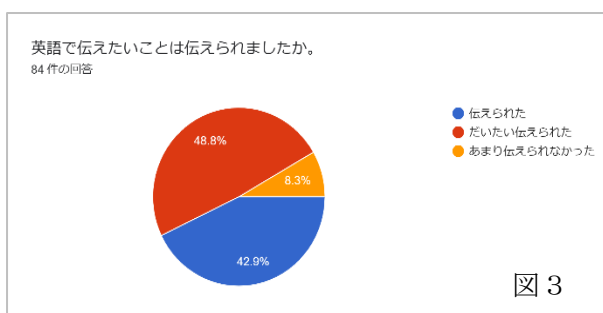
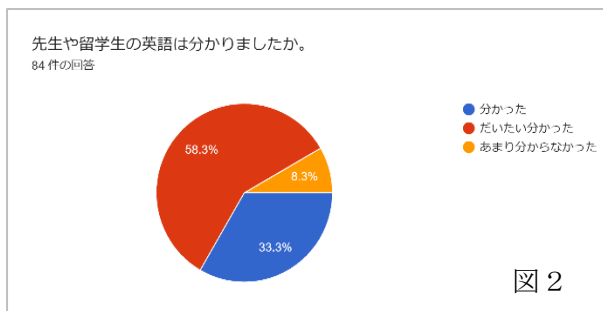
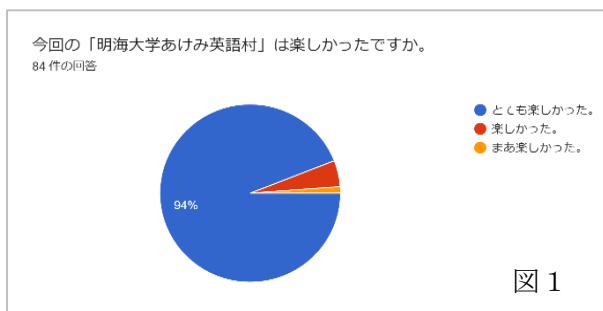
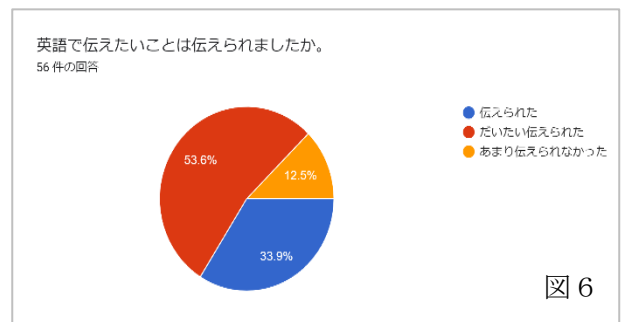
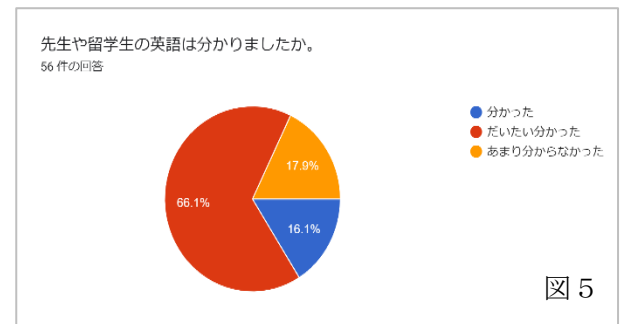
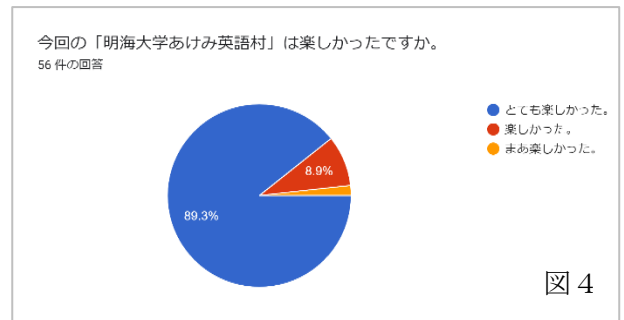


図 1 から、「とても楽しかった」と「楽しかった」を合わせた肯定的回答が舎人小では 98.4%あった。ほとんどの小学生が「あけみ英語村」を楽しんでくれたことが分かった。また、図 2 によると「先生や留学生の英語は分かりましたか。」という質問に対して、肯定的回答が 91.6%あった。

図 3 では「英語で伝えたいことは伝えられましたか。」という問いにも、91.7%が肯定的に回答した。この結果から、この事業を楽しむだけでなく、英

語を聞いて「分かった」とか、話して「伝えられた」といった成功体験を積むことができたようだ。



次に、栗原小であるが、図 4 では肯定的回答は 98.2%と高評価であった。また図 5 によれば、82.2%が英語が分かったと回答した。図 6 からは、「だいたい伝えられた」が 1 番多かったが、「英語で伝えることができた」と 87.5%が肯定的に回答した。

両校のアンケート結果を比較すると、全体的に舎人小のほうが数値が高いことが分かる。しかし、これは舎人小は参加学年が 5 年生であったが、栗原小は 4 年生だったことが大きく影響していると考えられる。

実際、小学生とコミュニケーションをした留学生や教職課程履修生からは「5 年生のほうが多くコミュニケーションをとることができていた」という感想を聞かせてくれていた。ただ、どちらもかなり高い満足度と成功体験をもつことができたことはアンケート結果から間違いのないと言える。

足立区中学校異文化交流学習会

今年度参加校	足立区立新田中学校	実施日	2022年 9月 9日
	足立区立第十中学校	実施日	2022年 10月 17日
	足立区立扇中学校	実施日	2022年 12月 14日
	足立区立第五中学校	実施日	2022年 12月 17日

1 はじめに

足立区と連携協定を締結した2016年度より、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かした英語教育支援をおこなってきた。その一環として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生が足立区の小中学生と英語を使った異文化交流学習会をおこなってきた。

今年度は、コロナ禍3年目であったが異文化交流学習会を4校の足立区立中学校と開催することができた。1校はコロナウイルスの影響でオンライン開催となったが、他の3校は対面形式で開催した。本学の図書館のラーニングcommonsを会場としてZoomを利用して配信した。参加する留学生は、マスク着用や手指消毒などの感染症対策を徹底して実施した。以下に、足立区立中学校でおこなった交流学習会について簡潔に記した。

2 足立区立新田中学校との異文化交流学習会



- ① 参加者：本学留学生8名と中学1年生約180人、2年生190人
- ② 参加留学生の出身国：アメリカ、中国、フィリピン、ネパールの計4か国
- ③ 概要：Zoomを利用したオンライン形式で行った。留学生は3時間目と4時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつPCを使い、中学生はクラス単位で1台のタブレットを使用した。Zoomのブレイクアウトルームを活用し

て留学生は一人一クラスに入って交流した。留学生は写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介した。また、中学生も自分たちで予め考えていた質問をしたり、留学生からの質問に答えたりした。中学生も留学生も英語を使ってのコミュニケーションを楽しむことができた。

3 足立区立第十中学校との異文化交流学習会



- ① 本学留学生8人と中学2年生約160人
- ② 参加留学生の出身国：アメリカ、韓国、中国、ドイツ、ドミニカ共和国、フィリピンの計6か国
- ③ 概要：留学生8人は、対面形式で2時間目から6時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつ中学生のグループに加わりパワーポイントや写真を使って自分と自国の紹介をした。中学生も自分たちで予め考えていた質問をしたり、留学生からの質問に答えたりした。

4 足立区立扇中学校との異文化交流学習会

- ① 参加者：本学留学生8人と中学2年生約60人、中学3年生70人
- ② 参加留学生の出身国：韓国、中国、ドイツ、ドミニカ共和国、フィリピン、モンゴルの計6か国
- ③ 概要：留学生8名は、2時間目から4時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつ中学生のグループに加わり持参してきた写真を使って自分と自国の紹介（例：ドイツの食文化や



モンゴルの大自然)した。中学生も自分たちで予め考えていた質問(例: Which is older, Ginkakuji or Horyuji?)をした。留学生にとっては難しい質問も多かったが、一生懸命考えて答えていた。

5 足立区立第五中学校との異文化交流学習会

- ① 参加者: 本学留学生7人と中学2年生約 100人
- ② 参加留学生の出身国: アメリカ、中国、ドイツ、ドミニカ共和国、フィリピンの計5か国
- ③ 概要: 留学生7名は、2時間目から4時間目の英語の授業に参加した。まず、留学生は一人ずつ中学生のグループに加わり持参してきた写真を使って自分と自国の紹介(例: アメリカの食文化や行事、フィリピンの有名なレストラン)をした。その後、中学生も自分たちで予め用意していた発表(例: 和菓子やお気に入りのアニメ)をした。



6 中学生事後アンケート結果及び分析

(一部抜粋)

事後アンケートで9つの質問をしたが、ここでは上記の表の3つの質問について取り上げる。

表にあるように、中学生は留学生との英語コミ

令和4年度第3回 明海大学連携事業推進協議会 (1) 令和4年度 連携事業実績報告					5
① 留学生・学生と児童・生徒の交流					留学生交流事業
設問	肯定的回答				全体
	新田中	第十中	届中	第五中	
留学生と英語でコミュニケーションするのは楽しかったですか	85.4%	85.4%	84.6%	92.6%	「楽しかった」の回答 87%
いろいろな国の人と交流するには英語が必要と感じましたか	94.8%	93.1%	94.9%	96.3%	「英語は必要」の回答 95%
もっと英語を話せるようになりたいと思いましたか	89.6%	89.8%	88.0%	85.2%	「もっと話せるようになりたい」の回答 88%

ニケーションを楽しんだようだ(87%)。また「英語の必要性」についてもほとんどの生徒が必要を実感した(95%)。さらに、これもほとんどの生徒が英語を「もっと話せるようになりたい」と感じていた(88%)。

最後に、参加した中学生と留学生のコメントを紹介する。

- 「大体の英語は聞き取って理解することが出来ました。ただ、少し難しい単語や、表現などまだまだ学ぶ必要がたくさんあるように感じました。留学生と交流はとても良い経験になりましたし英語が楽しく学べました。また機会があったら、次は直接お会いし、交流できたらなと思います。」
(新田中学生)
- 「英語が苦手ですけど今回は、楽しく話せることができました。自分の力で話すのが苦手なんですけど今回の事を通して少し英語の会話が『楽しい』とか『また話してみたいな』と思えました。」
(第五中学生)
- 「中学生は、みんな頑張って自分の言葉で英語を使って話そうとしてくれて楽しい時間になりました。」
(留学生)
- 「初めて日本の中学校に来て直接中学生と英語でコミュニケーションを取ることができて、とてもいい経験になりましたし、自分の英語力も成長できた気がします。中学生にとっても良い機会になったようなのでとても嬉しく思いました。」
(留学生)

大学生と話そう会 2022

参加学生	<p>■ 第1回</p> <p>外国語学部日本語学科 3年 清宮 咲歩、滝沢 珠里、三森 茉柊、 2年 岡村 萌果、能勢 舞桜</p> <p>外国語学部英米語学科 3年 上原 二葉、内山 瑞貴、川元 麻衣、桑原 百蘭、 福川 陽南、田中 啓夢</p> <p>・ 参加留学生</p> <p>外国語学部日本語学科 3年 リ・ショウイ、リョウ・イゼン、リョウ・ユ、グエン・ティ・アン 経済学部経済学科 3年 グエン・ティ・ヴァン・アイン、グエン・キム・イエン、 ホアン・ヴァン・ドゥク、レ・トゥー・ハー</p> <p>不動産学部不動産学科 2年 エン・コウレイ</p> <p>ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティー・ツーリズム学科 2年 グエン・ティ、フォン・タオ、コボリ・エミ・ホイ・メイ、 チョン・ヴィエット・ニヤット、ファム・トゥ・フェン</p> <p>1年 サブコタ・ルベス</p>
	<p>■ 第2回</p> <p>外国語学部日本語学科 4年 ウー・イウエイ、3年 三森 茉柊</p>

田柄高等学校訪問交流会

参加学生	<p>■ 参加留学生</p> <p>外国語学部日本語学科 4年 ウー・イウエイ、1年 マ・ズイカ、レ・ティ・フェ 外国語学部英米語学科 4年 リュウ・ハクブン、3年 グエン・ティ・トゥイ・ズオン 経済学部経済学科 2年 パク・ジュアン</p>
------	---

1 大学生と話そう会 2022

(1) 第1回の概要

5月29日にオープンキャンパスと同日、「大学生と話そう会 2022」第1回が開催された。このイベントは、明海大学と連携高校との関係をより強固にするとともに、高校生が直接大学生と交流することで明海大学での勉強や学生生活について理解を深めることを目的として、地域学校教育センターの主催で、2018年度から実施している。

今回は、都立飛鳥高校、都立竹台高校、都立南葛飾高校、都立葛西南高校、千葉県立浦安高校の5校から、1、2年生73人が参加し、そのうち57人は様々な国や地域の背景をもつ在京外国人生徒の参加者であった。また、5校から10人の引率教員も参加があった。

高校生たちは、午前中に大学紹介やオープンキャンパスの学科魅力発見コーナー展示などを見学し

た後、昼食は学生食堂マリーンズで学食を体験し、午後に30周年記念館スチューデントホールでの交流会に参加した。

安井利一学長と参加した連携校代表の飛鳥高校東達康副校長先生からの挨拶の後、20テーブルに着席した教職課程を履修している学生11人及び本学外国人留学生13人と高校生のグループ内で、高校生から大学生に質問したり、地球規模の課題についてディスカッションを行ったりする交流を行った。

高校生からは、大学生活などについて熱心に質問が出され、大学生はそれぞれの知識や経験から高校生にアドバイスしたり話をしたりしていた。また、ディスカッションでは、海洋資源、貧困、教育のうち、グループで選んだテーマについて、現状や原因、解決策などについてのブレインストーミングを行っていた。

準備から誘導案内、そして交流会での進行役など、明海大学の学生たちも、高校生のためにボランティアとして一日頑張った。

(2) 第2回の概要

11月12日には、「大学生と話そう会 2022」第2回が開催された。今回は、都立葛西南高校、千葉県立浦安高校から、1、2年生3人が参加した。また、2人の引率の先生方も参加してくださった。

高校生たちは、午前中に明海祭を見学した後、昼食(弁当)をとり、大学生との交流会に参加した。外国語学部日本語学科3年三森茉穂と同4年ウー・イウェイ(留学生)と高校生3人のグループ内で、高校生からの質問に大学生が答えた。

高校生からは、「授業で分からなかったことについて質問しやすい環境が整っていますか」「大学でいい成績を取るにはどうしたらいいですか」「高校に比べて勉強量が多いですか」「勉強とアルバイトを両立させるためにはどうしたらいいですか」「明海大学の外国語学部日本語学科を選んだ理由はどのようなことですか」など熱心に質問が出され、大学生はそれぞれの知識や経験から高校生にアドバイスしたり話をしたりした。

(3) 高校生の感想

参加した高校生からは、「大学生活に魅力を感じました」「大学生と話ができて、明海大学のことがいろいろ学べてよかったです」などの感想が聞かれた。



2 田柄高校訪問交流会

(1) 実施概要

7月13日に、本学と高大連携協定を結んでいる東京都立田柄高等学校において「留学生との交流会」が行われた。これは、本学外国人留学生と高校生との交流を通じてお互いの文化に触れ理解を深めることを目的としたものである。

本学からは、中国、台湾、韓国、ベトナム出身の

外国人留学生6人が交流会に参加した。本学留学生は田柄高等学校の1年生5クラスに分かれ、それぞれ自国文化について写真やスライド資料を投影しながら紹介を行った。

最後に留学生全員と国際交流委員を務める生徒たちが視聴覚教室に集まった。山崎聡子校長先生から歓迎のごあいさつをいただいた後、留学生と生徒たちが懇談して交流を深めた。日本語学科4年で台湾出身のウー・イウェイは、「これまでに経験した交流会はすべて英語によるものでしたが、日本語で交流するのは初めてで、とてもいい経験になりました」と語っていた。また、英米語学科4年で中国出身のリュウ・ハクブンは、「お互いの文化の良いところを見習いながら、視野を広げることが大切であると感じました」と語っていた。

(2) 高校生の感想

都立田柄高校1年 邱 詩育 さん

明海大学から世界中の留学生の方がお越しください、ありがとうございました！

高校での初めての国際交流体験でした。準備委員として最初は不安でしたが、自分のクラスへ来てくださった方が偶然にも僕の出身国、台湾の方で、PPTを駆使したプレゼンがとても楽しく興味を深められ、クラス全体で盛り上がりました。非常感謝！



3 2月4日当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年リョウ・ユと外国語学部英米語学科3年桑原百蘭が登壇し、「大学生と話そう会 2022」の報告を行った。また、外国語学部日本語学科4年ウー・イウェイと外国語学部英米語学科3年グエン・ティ・トゥイ・ズオンが登壇し、「田柄高校訪問交流会」の活動の内容と活動を通して学んだことなどを発表した。

8. 学生発表（大学生による学習支援）

浦安市小学校英語支援

参加学生（派遣先）	外国語学部英米語学科 4年 及川 龍之介、君塚 翔伍（富岡小学校） 佐藤 向日葵（見明川小学校） 武藤 美優、池上 温哉（高洲北小学校） 佐保 翼、横田 裕哉（高洲小学校） 鈴木 歩、橋本 ありさ（明海小学校）
-----------	---

1 はじめに

各自治体では、小学校の英語指導を充実させるため ALT の派遣や英語教諭の免許をもった教員の配置に取り組んでいるほか、教員に対する英語指導研修に取り組んでいる。そうした中、将来、英語教員を志す学生にとって、在学中に学校現場での英語指導の実践に携わることが出来る機会はとても重要である。

2 実施の概要

参加する学生は、英米語学科の学生のうち教職課程を履修し、将来、何らかの形で英語指導に携わりたいと希望している学生である。

ここ数年は新型コロナウイルスの影響もあり、計画的な配置が難しい面もあったが、2022年度については浦安市教育委員会との連携の下、5月から6月にかけて管下の小学校に事業概要について周知をしていただき、申し込みをいただいた学校に大学から改めて希望される支援の内容や時期、人数などを調整のうえ、7月から派遣することとなった。しかし、夏休み前に感染者の状況が全国的に増加したこともあって、予定していた活動の始期を遅らせざるを得なかった学校もあった。

(1) 実施期間

2022年7月～2023年3月（予定を含む）

(2) 実施場所と主な活動日（曜日）

- ・ 富岡小学校 火 1～6時間目
- ・ 見明川小学校 月・火 2～4時間目
- ・ 高洲小学校 月・水 2～4時間目
- ・ 高洲北小学校 月・水 1～4時間目
- ・ 明海小学校 火 1～4時間目

(3) 主な取組

授業では、学級担任や英語専科の教員や ALT の求めに応じて対話の相手役をしたり、発音のモデルをしたり、ペアワークで児童の相手をしたり、児童への指示を手伝ったり、英語のゲームに参加したり、個別の支援を必要とする児童への援助を行ったりした。また、教材準備の補助をしたり、必要に応じて配布物の整理などの校務の補助を行ったりした。

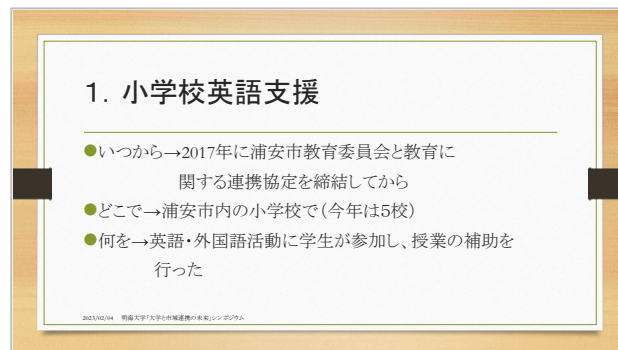
3 2月4日当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科4年横田 裕哉が登壇し、以下のような内容の報告を行った。

小学校英語支援は、2017年の浦安市教育委員会と明海大学との教育に関する連携協定を結んだことに端を発しています。

浦安市内の小学校で希望する学校に対し、英米語学科の学生が入り、授業の補助を行っています。

今年は5校の小学校に対して9名の学生が授業のお手伝いをさせていただきました。



実は、今年はコロナの影響で、7月の活動は予定していたものを一部中止せざるを得ませんでした。9月からは、富岡小学校、見明川小学校、高洲小学校、高洲北小学校、明海小学校の5校に、のべ

2. 今年度の状況

- 7月に活動を開始したが、コロナの影響で一部中止せざるを得ない状況となった
- 9月からは、富岡小学校、見明川小学校、高洲北小学校、高洲小学校、明海小学校の5校に
外国語学部英米語学科4年生の9人が参加した

2023/02/04 群馬大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム

300 時間以上、授業補助として入ることができました。

実施した成果として、小学校の先生方からは、「ALT の入れない授業で、お手伝いいただき助かった。」

「明るく子どもたちに接してくれて休み時間でもひっぱりだこの人気者でした。」

という感想が寄せられました。

私たちがお手伝いすることで、市内の小学校の英語や外国語活動に貢献できたならば、とても嬉しいことです。

3. 成果

- 小学校の先生方からは「ALT の入れない授業でお手伝いいただき助かった。」
「明るく子どもたちに接してくれて休み時間でもひっぱりだこの人気者でした。」
といった感想が寄せられた



2023/02/04 群馬大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム

4 学生の感想

- 初めは、小学生と打ち解けられるか心配でしたが、児童の皆さんが休み時間に遊ぼうと誘ってくれ、打ち解けることができたと感じます。授業では児童一人一人が進んで学習に取り組み、積極的に発表や活動に勤しむ姿や少し説明すると「そういうことなんだ」と言った感想を聞くと嬉しくなりました。教える喜びを得ることができました。(佐藤 向日葵)
- 浦安市の小学校で外国語の授業のボランティアを経験させていただいたことは、4月から教師として働く私にとってとても貴重な時間になりました。外国語の授業の進め方や工夫の仕方、子供たちとの関わり方を学び実践することだけでなく、時代に合わせた授業づくりや学校経営

についても知ることができました。毎回のボランティアの時間の中で、児童から沢山の元気と笑顔をもらい、教師の魅力を実感しながら過ごすことができました。ボランティアで経験したことを教師になった際に活かしたいと思います。

(武藤 美優)

- 私はこの活動を通して「教員は児童が楽しいと思える授業を行うことが重要である」ということを学びました。すべての教科に共通していることですが、教科に対して苦手意識を持つ時期が早ければ早いほど、その苦手を克服することが困難になるため、教員は常に児童が興味のある内容などに注目しておく必要があると考えました。(及川 龍之介)

5 学校の感想

- 困っている子のところに行きサポートしてくれたので助かりました。子供と年齢が近いこともあり、相談しやすいようでした。有難うございました。来年度もぜひよろしくお願いいたします。(明海小学校 板垣 雅則 先生)
- 外国語の授業では、児童の目線に立って、サポートをしてくれていたのが、児童も安心して学習に取り組むことができていました。また、時間が空いているときは、ALT の教材準備を行ったり、休み時間は児童と校庭で遊んだりするなど、積極的に関わろうとする姿勢が見られ、感心しました。いつも記録を丁寧にとり、明るく挨拶する姿が見られました。学校としても、助かる場面が多くありました。また、これからも活動していただけるとありがたいです。(高洲小学校 小松 三佳 先生)

6 おわりに

学校からは、児童と年齢の近い学生が参加することの利点や英語指導支援に対する感謝の言葉をいただいている。一方で、週あたりの派遣の曜日の増加や時間帯を決めたいいわゆる「帯時間」の配置への希望もあり、学生の時間割のことを考えると難しい面もあるが今後の課題である。

2022年度 浦安市青少年自立支援「未来塾」

参加学生 (17名)	外国語学部日本語学科 3年 清宮 咲歩、滝沢 珠里、牧 和摩
	外国語学部英米語学科 4年 佐保 翼、高橋 凜、武藤 美優
	3年 上原 二葉、内山 瑞貴、児島 晴香、手崎龍之介、 渡辺 渚稀
	2年 喜多 巧祐、佐藤 百恵、豊島 隼人、布施 名菜、 古川 湖菜、安田 結貴

1 はじめに

浦安市青少年自立支援未来塾は、浦安市立中学校9校の生徒を対象に、子どもたちの学習習慣を確立し、確かな学力の向上を図ることを目的とする学習支援である。

今年度、各中学校近隣の6か所の公民館を会場として、地域の教職経験者や大学生などが学習支援員として6月から2月までの間に英語と数学の2科目について、全17回の学習支援を行った。

2 実施概要

2022年度の本学学生が参加した未来塾の概要は、次の通りである。時間はいずれも18:30～20:00である。

【英語教室】(全17回)

(1) 見明川中・富岡中未来塾

- ・会場：富岡公民館
- ・期間：2022年6月8日～2023年2月16日
原則として水曜日

- ・参加学生：渡辺 渚稀、武藤 美優

(2) 入船中・美浜中未来塾

- ・会場：美浜公民館
- ・期間：2022年6月9日～2023年2月16日
原則として木曜日

- ・参加学生：豊島 隼人、上原 二葉

(3) 日の出中・明海中未来塾

- ・会場：日の出公民館
- ・期間：2022年6月9日～2023年2月16日
原則として木曜日

- ・参加学生：古川 湖菜、内山 瑞貴、高橋 凜

【数学教室】(全17回)

(1) 堀江中未来塾

- ・会場：堀江公民館
- ・期間：2022年6月14日～2023年2月21日

原則として火曜日

- ・参加学生：佐藤 百恵

(2) 見明川中・富岡中未来塾

- ・会場：富岡公民館
- ・期間：2022年6月15日～2023年2月22日
原則として水曜日

原則として水曜日

- ・参加学生：牧 和摩、喜多 功祐、佐保 翼



(3) 入船中・美浜中未来塾

- ・会場：美浜公民館
- ・期間：2022年6月16日～2023年2月24日
原則として木曜日

原則として木曜日

- ・参加学生：清宮 咲歩、安田 結貴、
児島 晴香

(4) 日の出中・明海中未来塾

- ・会場：日の出公民館
- ・期間：2022年6月16日～2023年2月24日
原則として木曜日

- ・参加学生：滝沢 珠里、手崎 龍之介

(5) 高洲中未来塾

- ・会場：高洲公民館
- ・期間：2022年6月15日～2023年2月22日
原則として水曜日

- ・参加学生：布施 名菜

3 学習支援の内容

今年度は、未来塾共通のテキストを使用せず、生徒各自が持参した学校や塾の課題、教科書の予習・復習に取り組む中で出てきた質問に対応する支援が中心となった。生徒からは、勉強の仕方やノートの取り方、問題の解き方について質問されることもあるため、学習支援員自身の経験を基にアドバイスすることもあった。また、学習時間の前後や休憩時間には、学校生活の様子を聞いたり相談に乗ったりするなどのやり取りも行われた。

4 参加学生の感想

(1) 英語教室（日の出公民館）参加学生

未来塾に参加した約1年は、私にとっても有意義な時間だった。限られた時間の中で、どのように解説すればうまく伝わるのか、生徒自身が答えを導くためにどんな言葉を与えればよいかをいつも考えていた。一方で同じ公民館で支援員をしている先輩や、教職に携わったことのある一般学習支援員の方との関わりは、このボランティアの魅力の一つだと思う。教職についての話や貴重なアドバイスをいただけたことに感謝し、この活動を通して学んだことを今後に生かせるよう努めていきたいと思う。（古川 湖菜）

(2) 英語教室（美浜公民館）参加学生

一人一人分らない所や学ぶスピードが異なるので、それに合わせる事が難しかった。ある時「5分だけ集中してやってみよう」という声かけをしたところ、生徒たちが黙々と学習に取り組み、片付けの時間も集中していて、次の回でもしっかり取り組むようになった。とりあえずやってみる、という小さな目標を示しただけで、やる気になった生徒たちを見て、長い目で見てあげることや強制するように言い過ぎないことが大事だと感じた。1年間をかけて変わっていく生徒を見てきたので、時間をかけて関わる事の大事さも痛感した。元教師の方や他学年の学生と一緒に取り組む意義も大きいので、後輩たちにも是非勧めたいボランティア活動である。（上原 二葉）

(3) 数学教室（富岡公民館）参加学生

最初は学習支援への不安や緊張があったが、徐々に慣れてくると自分が生徒にどのような支援

ができるかを考えるようになった。担当したのは中学2年の数学である。自分が苦手だった数学の魅力が高校生になってから知り、好きな科目になったことを伝えることも支援の一つになると思った。また、現時点の自分の力を知ることができるよう、小テスト3回と学力テスト1回を各学期に行い、「同じことを何度も復習することで、自分の知識として取り入れることができる」という助言もした。未来塾での経験を通して、一人一人に合った助言と支援をすることが何よりも大事であることに気付くことができた。僅か1年間だったがとても良い経験になった。（喜多 功祐）

5 シンポジウムでの発表

シンポジウムの学生発表では、日本語学科3年の清宮 咲歩と瀧沢 珠里が、未来塾の概要、活動内容、活動の成果の3点について発表した。

<活動の成果・感想から>

- 学校でタブレットやPCを使う生徒の学習実態を知ることができた。
- よく相談されたので、今の中学生が考えていることや学んでいることを知ることができた。
- 普段経験できない勉強を教える機会を通して、教え方や伝え方について考えるようになった。
- 元教師である支援員の方々から中学校の現状や中学生の様子などの話を聞くことができた。

6 今後の課題と展望

今年度はテキストを用いず中学生の自学自習を支援する形態となったが、例年同様学生にとっては貴重な体験であり成長と学びの機会となった。次年度も未来塾での学習支援の機会が得られる場合は、支援活動のより一層の充実のため、中学生の側から見た成果や課題、さらなるニーズ等についてフィードバックを得ることが必要である。



2022 年度足立区民対象生涯学習講座(英語)

参加学生	外国語学部英米語学科 3年 上原 二葉、川元 麻衣、桑原 百蘭、児島 晴香、 小林 優汰、佐藤 有志、直井 乃々美、八代 涼花 2年 小川 翔太郎、折笠 渉、坂内 隆斗、田中 啓夢、 富樫 美智雄、原山 要佑
------	---

1 はじめに

足立区民対象の英語講座は、2020 年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックに向けて 2017 年に足立区が独自で「おもてなし語学ボランティアブラッシュアップ講座」を開始するにあたり、併せて「初級英語講座」も開設することとなり、以降毎年5月から7月の第1クール、9月から11月の第2クールに各5回ずつの講座を行ってきた。2020 年度はコロナ禍の中で、講座開催は中止となったが、2021 年度は第1クールには初級講座を、第2クールには中級講座をどちらも Zoom を利用したオンラインで行った。

講師は第1回目から継続して明海大学教職課程センター・地域学校教育センター百瀬美帆教授と多言語コミュニケーションセンター教授パトリシア・ハヤシ教授、タイソン・ロード准教授が務めてきた。また、すべての講座に明海大学外国語学部英米語学科教職履修学生数名が指導補助にあたってきた。

2 実施概要

2022 年度は第1、第2クールとも対面形式で各5回、講座参加人数を20人とし初級講座のみを行った。

両クール共通のタイトルは「アフターコロナ時代の海外旅行を応援『海外で役立つ英会話講座』」で、内容は両講座同一とした。各レッスントイトルと実施日は右表のとおり。



実施日とレッスントイトル

回	実施日	レッスントイトル
	第1クール 第2クール	
1	5月22日(日) 10月9日(日)	At the Hotel
2	6月5日(日) 10月16日(日)	At the Restaurant
3	6月12日(日) 10月30日(日)	At the Clothing Store
4	7月17日(日) 11月3日(木)	Traveling Smoothly: Problems at the Hotel
5	※中止 11月27日(日)	Our Thrilling Overseas Tour

※第1クール第5回講座は新型コロナ感染者数増加のため中止

補助学生名簿 姓のみ(学年)

回	第1クール (3年のみ)	第2クール
1	上原・小林・ 佐藤・直井・ 八代	川元(3)・桑原(3)・小川(2)・ 田中(2)・富樫(2)・原山(2)
2	上原・川元・ 桑原・直井・ 八代	上原(3)・小川(2)・坂内(2)・ 富樫(2)・原山(2)
3	上原・川元・ 桑原・小林・ 佐藤	上原(3)・児島(3)・坂内(2)・ 田中(2)・原山(2)
4	上原・川元・ 桑原・小林・ 佐藤	上原(3)・児島(3)・小川(2)・ 折笠(2)・坂内(2)・原山(2)
5	中止	上原(3)・折笠(2)・田中(2)・ 富樫(2)・原山(2)

3 受講者の感想 (アンケートからの抜粋)

(1) 第1クール

- 目的が「海外旅行を応援」なので、具体的なコミュニケーションの実践は、一番効果的な方法だと思いました。実際に話すのは緊張しましたが、他の受講者の方々の熱心さに背中を押されました。ビデオがかなり早口で難しかったのですが、最初はカタカナの走り書きで良い、などの百瀬先生のアドバイスは、とても参考になりました。
- 学生さんたちも参加してくれたので色々聞きやすかった。何より先生方が楽しく進めてくれるので、毎回楽しみにしていました。このような機会を増やして欲しいです。

(2) 第2クール

- 講師の先生方もプラスして細かく単語なども教えていただき感謝。お手伝いの生徒の方たちも会話練習では色々なキャラクターになってくれて楽しくできてとっても良かったです。
- 大学の英語教育のプロフェッショナルな方々の授業を受け、英語に対する姿勢が変わりました。人生で諦めかけていた英語をまた、学ぶきっかけになりました。

4 成果と今後の課題

受講者からは毎年高評価を得ている。今年度の講座に対する総合評価では「満足」と「普通」を合わせた数値は第1クールでは100%、第2クールでは91%であった。

補助学生にとっては、次の項目にある学生の感想が示す通り、教職科目で学ぶ「生涯学習」の概念が具現化されている姿を目の当たりにできる絶好の機会となった。

一方、第1、第2クール共に同一教材を使用し、指導方法もほぼ同一であったにもかかわらず、実施後アンケートで講座の難易度について次のような差が生じた。

	簡単	ちょうど良い	難しい
第1クール	12%	88%	0%
第2クール	7%	57%	36%

受講者が異なる2グループであるので差異が生じた原因を究明することは難しいが、次年度以降の実施にあたっては、講座の難しさを感じている受講者にはより手厚い個別指導が行えるよう、補助学生のサポートスキルの習熟を図るべきであろう。

5 サポート学生の感想

- 教職を履修する私たちにとっては、目上の方々に教える数少ない貴重な経験でした。受講者の中には海外旅行の経験が豊富な方が多く、旅行先でのお話など、私たちが教えるだけでなく、教えていただく場面も多くありました。

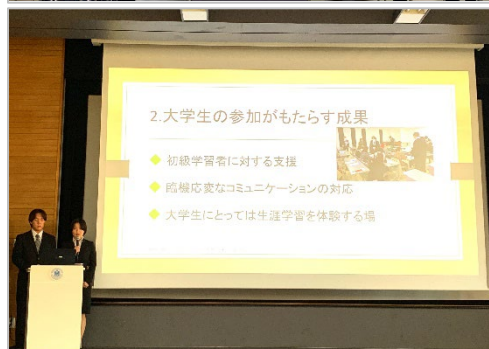
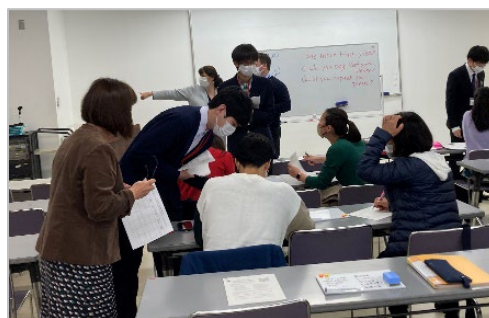
(小川 翔太郎)

- 私たち学生は、20代から80代に及ぶ参加者の方々が、生涯を通して何かを学び続ける姿を見て、生涯学習という言葉の意味を理解することができました。学生でなくなっても、受講者の方々のように学び続ける姿勢をもちたいと感じました。

(上原 二葉)

6 2月5日の感想

シンポジウムでは英米語学科2年生小川 翔太郎と、3年生上原 二葉が講座における大学生の役割と大学生の参加がもたらす講座への効果について報告し、次のように感想を述べた。「思っていたよりも緊張しましたが、配信された時が一番うまくできたので満足しました。」



2022年度足立区英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト

参加学生	外国語学部英米語学科4年 及川 龍之介、加藤 天真、君塚 翔伍、小林 悠太、 佐藤 向日葵、高橋 凜、武藤 美優、米元 拓海
	3年 上原 二葉、内山 瑞貴、川元 麻衣、児島 晴香、 小林 優汰
	2年 小川 翔太郎、折川 渉、田中 啓夢、安田 結貴、 吉澤 亜門、小川 悠真、喜多 功佑、富樫 美智雄、 原山 要祐

1 はじめに

明海大学・足立区連携事業における「英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト」足立区英語マスター講座を修了した者がその成果を発表とする機会を提供し、足立区の中学生在が継続的に自分自身の英語運用能力を磨き、さらにその力を高める機会とすることを目的として2019年より開催されている。

運営をサポートする英米語学科教職履修学生にとっては「英語を話すことの指導」について学ぶ機会となっている。

2 実施概要

- (1) 実施日時 2022年11月13日(日)
午前9時から午後3時まで。
- (2) 会場 明海大学浦安キャンパス
成果発表会 2201 講義室
特別講座 2203 講義室
- (3) 参加人数(発表者・補助学生・教職員)
 - ・足立区発表生徒7人、参加生徒保護者15人、
足立区教育長 学力定着推進課職員 7人
 - ・明海大学補助学生 22人(うち5人は発表者)
 - ・審査員2名、METTS教員4人
- (4) 実施方法

新型コロナウイルス感染防止対策を講じた上で、対面で開催した。具体的には、演台にアクリル版のシールドを設置するとともに、各発表後には、シールド、マイクをその都度消毒した。

本学英米語学科教職課程4年生が司会進行と会場での除菌作業を、審査員補助や会場整備、記録写真撮影、オーディオ操作等を3年生が担当した。

開会式に続いて足立区から7人が発表、審査員

との質疑応答を行い、続いて本学英米語学科教職課程2年生5人がモデルプレゼンテーションを行った。発表者の田中 啓夢は、足立区英語マスター講座修了者であり、自分自身がマスター講座で学んだことがその後の進路決定に影響を及ぼしたについてパワーポイントを用いて発表した。



足立区からの発表者7人と審査



明海大学からの発表者と審査員

午後には審査員を務めた MLACC (本学多言語コミュニケーションセンター) のパトリツィア・ハヤシ教授とタイソン・ロード准教授が、コンテスト参加者を対象として Critical Thinking 力を育むための特別講義を行った。



発表会プログラムは次の通り。

	発表タイトル 発表者氏名・所属学年
1	Yosakoi YAMAMOTO Rio / 足立7中3年生
2	Possibility of games ISHII Kota / 足立14中2年生
3	Why I Like Studying English SHIMADA Yuzuha / 開智高校2年生
4	Facing My Dream MACHIDA Urara/関東国際高校2年生
5	Smoking KOMIYA Yamato / 東洋高校1年生
6	Continuation Is Power OHARA Mai / 都立晴海高校2年生
7	Little Adventures Change Your Life MURAKAMI Naoki/武蔵野大付属高2年生
8	What I Learned through My 20 Years of Life TANAKA Hiromu / 明海大学2年生
9	Importance of Health Promotion from the Younger Orikasa Wataru / 明海大学2年生
10	5G Era YOSHIZAWA Amon / 明海大学2年生
11	What Do You Think about Digitalization YASUDA Yuki / 明海大学2年生
12	Various Shapes OGAWA Shotaro / 明海大学2年生

3 参加者の感想

(1) 参加生徒の感想

- ・ほとんど同じくらいの年齢の人たちとスピー

ーチを通じて意見交流を行えたのが、自分にとってはとてもよい機会になった。

- ・他の出場者や明海大学生のスピーチを聴いて得たことがたくさんあったので、今後はもっと自分を高めていきたい。

(2) 保護者の感想

- ・英語を使用できる機会が少ないと感じていたため、非常にありがたいと思った。

(3) 明海大学生の感想

- ・中高生の発表を聴いて、英語力、発表方法、さらに扱う問題の深い理解等、レベルが高かった。(モデルスピーチ発表者)
- ・マスター講座という学校の枠を超えた地域の英語教育の形についても学ぶことができた。(司会担当者)

4 成果と今後の課題

参加する中高生の英語コミュニケーション能力が年々向上しており、スピーチ後の審査員との質疑応答では、参加者全員がよどみなく反応することができていた。この行事が単なる発表会ではなく、参加者個々の真の英語コミュニケーション力を披露する場となってきたと言える。

将来中学校、高校の英語教員を目指す教職履修学生にとっては、中高生の英語レベルの向上を目的の当たりにできる絶好の機会であることを、今後より強くアピールし、ひとりでも多くの学生が聴衆として参加すべきである。

5 シンポジウム当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、2年生の田中啓夢と4年生の君塚 翔伍がサポート学生を代表して報告した。概要等の報告に加え、この事業に大学生が参加する意義について次の2点を挙げた。

- ① 中高生にとって英語使用者としてのロールモデルとなること
- ② 将来教職に従事する者にとって、行事運営や実施時の配慮事項等についての学びの場であること

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 鈴木 歩、橋本 ありさ 2年 池内 夏美、高木 由紀
------	---

1 はじめに

東京都教育委員会では、2016年度から都立高校生の基礎学力の定着を図るために、放課後の補習授業「校内寺子屋」事業を実施している。東京都立葛西南高等学校では事業開始当初からこの事業に数学と英語で参加し、7年目を終えようとしている。英語に関しては本学の学生が一貫して講師を務めている。昨年度に続き、今年度も生徒を火曜日クラスと木曜日クラスに各 10 人程度ずつに分け、1時間の補習授業を実施した。

2 実施概要

(1) 実施期間

第1学年火曜日クラス（計13回）

2022年9月6日～2023年2月28日

第1学年木曜日クラス（計12回）

2022年9月8日～2023年3月2日

(2) 実施場所

東京都立葛西南高等学校5階教室

(3) 対象生徒

1年生約20人

(4) 講師担当者（計4名）

上記表題に記載の学生で、いずれも教職課程履修者

(5) 教材

「高校英語入門 基礎から英文法の総復習フレッシュノート」（増進堂）及び講師作成教材

3 実施の様子

学生が2人で担当する形を基本とした。英語に苦手意識をもちながらも、校内寺子屋での授業を機に学び直しに意欲を示す生徒など、さまざまな生徒と向き合う中で、教職が単なる知識の伝達ではなく人を育てる仕事であることを痛感する貴重な機会となった。

4 実施してみでの気付きと感想

(1) 指導上の工夫

初めて指導者として教壇に立つことになったので、大学の先生方の指導や自分の過去の経験を踏まえて、授業の準備に取り組んだ。

一つ目は、生徒の学習定着度に合わせた教材の用意である。共通のテキストはあるが、授業を進めるにつれて生徒が苦手としているところや理解していない様子が見られたため、学生が自作の教材も用意し、生徒の理解度に応じて授業が進められるように工夫した。

二つ目は、分かりやすい板書計画である。生徒一人一人の学習状況の違いを頭に置きながら、板書づくりを心がけた。ただ黒板に文字を書いているだけでは、伝えたいことが伝わらないため、授業前に黒板をどのように活用するか話し合っ見やすい黒板づくりを心掛けた。

三つ目は、生徒に視線を合わせたことである。生徒と年齢に近いメリットを生かし、生徒と視線を合わせ、また、生徒との信頼関係を築くために、板書のみならず生徒一人一人の指導に力を入れ、積極的にコミュニケーションを取った。

四つ目は、生徒と一緒に授業を作ったことである。一方的に説明するだけではなく、アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れ、生徒にも授業に参加してもらうことで、生徒の理解度の向上を図った。生徒が苦手だと思ふ項目を共に確認して、納得してもらえるような授業づくりを生徒と共に行った。

五つ目は、授業改善のための振り返りである。毎回授業の終わりに反省会を開き、次回からの質の向上を図った。

(2) 学んだこと

一つ目は、生徒の授業理解度を十分に把握することの大切さである。一人一人の理解度を把握することで、生徒によって教え方を変えることができることを学んだ。

二つ目は、生徒との適切な距離感を保ちながらコミュニケーションを図ることで、生徒との信頼関係が生まれることを学んだ。

三つ目は、授業計画の立案における授業者同士のアイデアの共有の大切さである。個人ではなく複数人のアイデアを基に授業計画を進めることで、より良い授業づくりにつながることを学んだ。

(3) 生徒の声

生徒からは次の声があった。

- ・年齢が近いので相談しやすい。
- ・定期テストの前ではテスト対策も行うことができ良かった。
- ・復習を行うことの大切さが分かった。
- ・少人数のため自分のペースで学べて良かった。
- ・あきらめないで学び続けることの大切さが分かった。

(4) 学生の感想

校内寺子屋学習支援を通して、生徒と作る授業の在り方について学ぶことができました。具体的には、生徒からの質問に明確に答えられるような授業準備の必要性です。

そのためにはPDCAサイクルを活用し、指導の明確化が重要だと学びました。

加えて、黒板の活用方法が今後の課題であると感じています。生徒が授業内でふりかえりを行うために、黒板の書き方を研究していくことによって、生徒が理解を深められることに気付きました。

(池内 夏美、高木 由紀)

寺子屋では配布されたワークを使い、中学の文法復習を進めました。毎回、寺子屋に参加する生徒数が3人程度だったため、大学生と高校生、1対1で学習することができました。

生徒がつまづくポイントがみな同じところであったり、生徒自身同じミスを繰り返すことも多かったため、分かるまで何度も教え、生徒が理解してすらすら解けた時には大きな達成感とともに、自分自身沢山のことを学ぶことが出来、参加してよかったと思います。

(鈴木 歩)

英語が苦手な生徒を中心に英語を教えていたため、英語を学習するという事に積極的になる生徒は少なかったのですが、それでも参加してくれた生徒には、英語が苦手でもどこが苦手なのか、何が分からないのかを一つ一つ生徒の反応を確認しながら、どの程度理解しているか、どのように説明すれば理解しやすいか等を考えながら指導を行いました。英語が苦手な生徒に限らず、生徒に寄り添って学習支援を進めていくことが大切だということが分かりました。

(橋本 ありさ)



5 2月4日当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科2年池内夏美及び高木由紀が登壇して報告を行った。

報告では、スライドを用いて、授業の準備や授業中で工夫したこと、生徒の学習定着度に合わせた補助教材を用意したこと(プリントなど)、分かりやすい板書計画を心掛けたこと、生徒と目線を合わせたこと、生徒と一緒に授業を作ったこと、などが話された。

浦安市学習支援事業「ドラフトゼミ」

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 及川 龍之介
	3年 上原 二葉、手崎 龍之介、児島 晴香
	2年 小川 悠真、館田 悠輝、富樫 美智雄、仲田 未羽、 吉澤 阿門、吉田 優奈
	外国語学部日本語学科 3年 三森 茉柊

1 はじめに

本学の学生は、時には大学であるいは小中学校を会場にボランティア活動を行うことが多いが、外部の会場に年間を通じて赴き、継続した支援を行っている活動がある。それが「ドラフトゼミ」である。

2 実施概要

「ドラフトゼミ」は、NPO 法人ワーカーズコープが浦安市の委託を受けて実施している学習支援事業で、その概要は以下の通りである。

(1) 支援の対象

小学校4年生から高校3年及び高校在学年齢までの子供がいる困窮世帯及び一人親(母子、父子)世帯が対象

(2) 支援の内容

学習に関する支援をはじめ、日常的な生活習慣、仲間との出会いができる居場所づくり、進学に関する支援、高校進学者の中退防止に関する支援、子供と保護者の双方に必要な支援を実施

(3) 支援の体制

浦安市内にある三つの大学に所属する学生が中心となって支援を担当。明海大学からは、現在外国語学部の二つの学科の11人の学生が年間を通じて週3日間、夕方の時間帯に活動している。

(4) 会場及び2022年度の実績

会場は、東野地区複合福祉施設(東野パティオ)で、今年度の明海大学分の活動実績については、2022年5月から2023年3月まで延べ133日間となる(見込みを含む)。

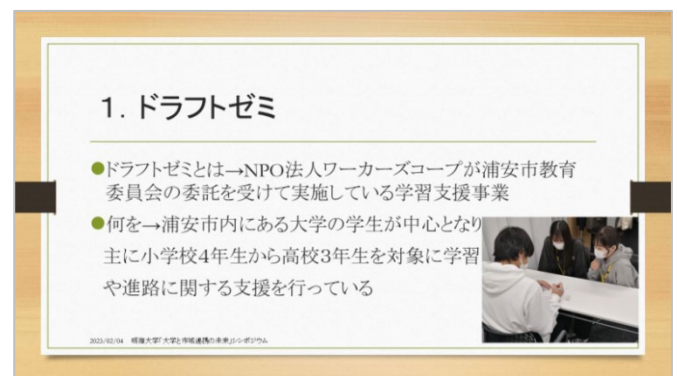
(5) 運営方法

NPO 法人ワーカーズコープが毎月下旬、次の月のシフトとして2名から4名の学生を活動日に割り当て、それを本人たちと大学の担当者にそれぞれ連絡をしていただく方法を取った。従来の大学

側で学生を割り当てる方式に比べ、効率化が図られるようになった。

3 2月4日当日の発表

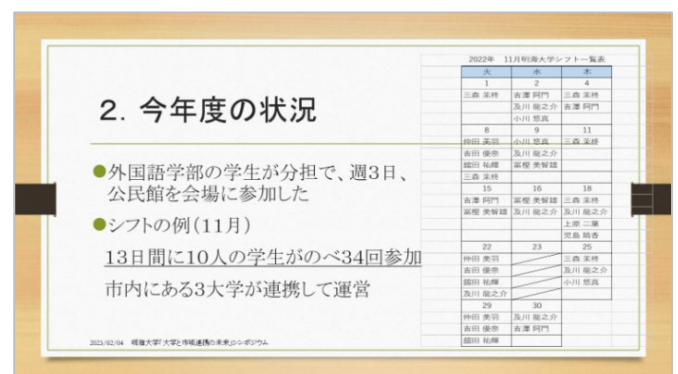
2月4日に開催したシンポジウムでは、外国語学部英米語学科2年富樫美智雄が登壇し報告を行った。以下は、その発表内容の抜粋である。



ドラフトゼミとは、NPO 法人ワーカーズコープが浦安市の委託を受けて実施している学習支援事業のことを言います。

浦安市内にある3つの大学の学生が登録し、小・中・高校生を対象に補習を行っています。

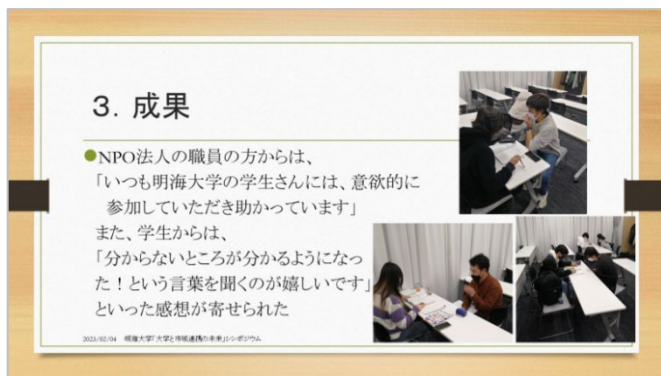
明海大学では、日本語学科、英米語学科の学生が分担して、火水金の週3日、市内の福祉施設で、主に小学校4年生から高校3年生に対して学習や進路に関する支援を行っています。



画面は11月のシフト表ですが、この月は、13日間にのべ34人の学生が担当しました。

成果としては、NPO 法人の方からは、「いつも

明海大学の学生さんには、意欲的に参加していただき助かっています」という感謝の言葉をいただいています。何より、小・中学生や高校生から「分からないところが分かるようになった！」という言葉を書くのが嬉しいことです。また、将来、教員を目指す私にとってはかけがえのない経験となっています。



4 参加した学生の感想

●ドラフトゼミに参加して2年が経ちました。昨年度は思うように活動ができませんでしたが、子供たちとの関わり方や自主学习への促し方のコツが掴めてきたように思います。

この経験を活かして、教育実習や教員採用試験に活かしたいと思います。

(英米語学科3年 上原 二葉)

●ドラフトゼミで活動することで、子どもたちの小さな変化や子どもたちが出すSOSにできるだけ早く気がついてあげることがとても重要であると感じました。

そしてそれらはちょっとした日常会話の中にヒントがあるということを知ることができました。

(英米語学科3年 児島 晴香)

●今年度は新たに2年生が加入し、明海大学の学生11人という体制でドラフトゼミに参加しました。受験対策では生徒一人一人の理解度に合わせて行うことにしました。私は英語を担当しましたが、生徒から「英語の点数が上がった！」「長文が読めるようになった！」などの声をいただきました。

これからも生徒一人一人に寄り添う姿勢を忘れずに活動していきたいです。

(英米語学科4年 及川 龍之介)

●今年度のドラフトゼミを通して、様々な学生と出会って、様々な形の支援があることを知ることができました。

この経験を活かして教育に関わった際の一つの方針で生徒を決めつけることはせず、柔軟に対応するよう心がけたいです。

(英米語学科2年 富樫 美智雄)

●ドラフトゼミに参加してみて、相手に勉強を教えている時に理解してもらい難しさを知りました。また人見知りをする子、異性と話すのが苦手な子、年頃の子たちにどうやったら打ち解けてもらえるのかとても悩みました。しかし、徐々に学校のことや人間関係のこと、近況報告をしてくれるようになりました。

ある受験生には「みう先生に教えてもらいたい！」と言ってくれる子までいて、本当に嬉しく、やりがいを感じています。

私は中学校の英語の教員を目指しています。ドラフトゼミで学べた貴重な経験を将来教員になった時に活かしていきたいと思いました。

(英米語学科2年 仲田 未羽)

5 今後の課題

高校の受験シーズンが近づいてくると、学生たちは、面接の練習(面接官)なども担当させていただく。しかし、必ずしも大学生たちが皆、そうした受験を経験してきている訳ではないので受験生以上に「緊張」することになる。

担当する学生の中には、複数年にわたり従事する者もいるが、基本的に単年度で担当するため、実施主体であるNPO法人の皆さんは別として、成果や課題の継承については個人のレベルにとどまりがちである。

本シンポジウムにおける活動報告は、そうした意味で学生の目線でまとめた貴重な記録となっている。浦安キャンパスに通う学生たちにとって、将来の進路に向けた実践的活動の場として、ドラフトゼミは、大変にやりがいのある事業となっている。

9. パネルディスカッション

◆アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携 ～ 地域連携の現状を踏まえた ICT の可能性 ～ パネリスト

佐藤 学（足立区教育委員会 学力定着推進課 指導主事）

山崎 聡子（東京都立田柄高等学校長）

呉 義偉（明海大学外国語学部日本語学科4年）

児島 晴香（明海大学外国語学部英米語学科3年）

コーディネーター

大池 公紀（明海大学外国語学部教授 教職課程センター副センター長）

米村 珠子（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授）



【大池】ただ今から、2023年明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムの後半に入ります。今年のテーマは先ほどもお話にあったように、「アフターコロナを見据えた地域連携」ということでICTの可能性を含め探っていきたいと思います。本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めます外国語学部の大池と申します。よろしくお願いいたします。サブのコーディネーターを地域学校教育センターの米村が務めます。

【米村】米村です。よろしくお願いいたします。

【大池】シンポジウムの最後のプログラムということで時間が1時間と限られていますので、進行へのご協力をよろしくお願いいたします。

本日、学生によるグループ発表にもあった通り、明海大学では足立区教育委員会、浦安市教育委員会、東京都立高等学校、そして千葉県立高等学校と連携し、学生がボランティアとして様々な形で事業に関わらせていただいています。

昨年度までは新型コロナへの対応があり、なかなか

か思うような活動ができませんでした。今年度も一部の事業を復活させましたが、オンラインを使わざるを得ないような場面もありました。ただ、このような状況の中で、ICTの活用など少しずつ時代が変わってきています。今日は、教育行政や学校、学生、それぞれの視点からそうした点を掘り下げて、今後の地域連携事業におけるICTの可能性を探っていきたいと思っております。

では、まずはじめに、本日この場にご登壇いただいたパネリストの皆さまから自己紹介をしていただきます。併せて学生による発表でも紹介がありましたが、明海大学との連携の中で実施している内容や取り組みの成果について、お話いただきたいと思っております。

まずはじめに足立区教育委員会の佐藤様からよろしくお願いいたします。

【佐藤】よろしくお願いいたします。ご紹介にあずかりました足立区教育委員会教育指導部 学力定着推進課指導主事の佐藤と申します。主な職務内容は、課の名称の通り学力施策を中心に担当しております。

明海大学と足立区は2017年1月11日に連携協力に関する協定を締結しています。連携事業は4つの区分に分かれており、留学生・教職学生と児童生徒の交流、人材育成支援、区民講座とスピーチ・プレゼンテーションコンテスト、文科省委託事業、この4つの中で8つの事業を展開しております。私はこ



のうち区民対象の英会話講座を4年間担当させていただいています。本講座は区民から非常に高い評価を得ている人気講座で、毎回、多くの区民の方からの申し込みがあります。今年度の第1クールでは受講者の全員が「また参加したい」とアンケートに回答していた、本当に人気の講座でございます。

新型コロナウイルス感染症が拡大してからの2021年度には、オンラインによる講座を開講しています。例年に比べて若い方の申し込みが増えているのですが、対面実施よりも受講者同士の人間関係をつくるのが少し難しかったという課題がありました。ただ、オンラインでも対面と同じぐらい質の高い講座が実施できたのは、明海大学の講師の先生方の大変高い授業力にあるものと捉えています。

現在、次年度の講座について検討しているところですが、この2年間の状況を踏まえ、ICTの活用も含めて、先生方と相談して決めていきたいと考えております。以上です。よろしくお願いいたします。

【大池】佐藤様、ありがとうございました。続きまして、東京都立田柄高等学校長の山崎先生、お願いします。



【山崎】田柄高校の山崎聡子です。よろしくお願いいたします。私は東京都教育庁指導部で5年ほど行政

経験を積んだ後、米村珠子教授が校長を務めていらした国際高校の国際バカロレアコースの副校長を3年務めました。今年、校長に昇任したばかりでいろいろと手探りで頑張っているところです。

田柄高校のご紹介を少しさせていただきますと、本校は、在京外国人枠の入試を行っていることと、以前、外国文化コースがあったことから、生徒の約4割が日本以外の国や地域にルーツをもっている大変特色のある学校です。生徒の背景を少しお伝えしますと、最近では主にネパール、中国の出身者が多く在籍しています。明海大学の学生の皆さんからは様々な形でご支援いただいております、特に留学生との交流会は日本人の生徒にとっては異文化を理解する非常に貴重な場です。

外国にルーツをもつ生徒につきましては自身のロールモデルとして大変勉強になる機会となっております。先ほども学生によるプレゼンテーションもありましたが、特に日本語で母国の文化や歴史を紹介するその熱心な姿は、田柄高校で日本語を一生懸命勉強しようとしている生徒にとって非常にいい影響があるかと思っています。

また、この2月に田川麻央先生を講師にお招きして、本校の教員を対象に日本語指導の研修会を行っております。こちらにも様々な教科や科目を外国語である日本語で勉強しなくてはいけない外国にルーツをもつ本校の生徒にとって、どのように私たちが指導したらいいか、ということ学ぶために、教員たちも非常に高い関心をもって参加しているものです。引き続き様々な形でご支援いただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【大池】山崎先生、ありがとうございました。続いて、本学の学生2名から話をしてもらいたいと思います。まずは自己紹介、そして地域連携の事業にどのように関わったか、その取組の成果なども少しお話ししてください。

まずは留学生の呉さん、お願いします。

【呉】皆さん、こんにちは。私は外国語学部日本語学科4年の呉義偉と申します。出身は台湾です。



今まで携わった内容は、主に留学生による児童生徒との交流で、先ほどのプレゼンテーションのように足立区中学生との交流やあけみ英語村にも携わってきました。

いろいろな行事に参加して、一つのことに気が付きました。多分、外国人留学生の皆さんは私と同じように最初は日本人が冷たいというイメージをもつと思うのですが、実際このような活動を通して私が気が付いたのは、実は皆さんは冷たいのではなくてシャイなだけだということです。実際に関わってみると、みんな海外の人はどんな人か、あるいは海外にどんな食べ物があるかという好奇心をもっていると思います。

特に小学生といろいろな交流をして、小学生の好奇心がとても素晴らしいと感じました。実際、私たち留学生がみんなを引っ張ることで、児童が積極的に質問するようになり、活発な雰囲気になって交流も深まりました。以上です。

【大池】ありがとうございます。小学生の好奇心、その素敵なところは、ぜひとも伸ばしてほしいと思います。

続いて児島さん、お願いします。

【児島】明海大学外国語学部英米語学科3年、児島晴香と申します。現在、教職課程を履修しており、将来、千葉県の高校の英語の教師になることが目標です。連携事業で関わっている内容としては、6点あります。

1点目は、校内寺子屋です。こちらは2021年度に参加し、外部講師として葛西南高校での英語の補習授業の支援を行いました。英語が苦手な高校生に

英語の基礎的な部分を教えることができました。

2点目は、浦安市青少年自立支援未来塾です。浦安市の中学校に通う中学生の英語及び数学の学習支援を行いました。地域の教職関係者の方々、市役所の方々と協力して生徒の勉強をサポートすることができました。

3点目は、浦安市学習支援事業「ドラフトゼミ」です。学習支援をはじめ、生活習慣や居場所づくり、進学に関する支援を行いました。子どもたちの小さな変化に気付くことで、子どもたちが出すSOSに気付いてあげること、そしてそれらはちょっとした日常会話の中にヒントがあるので気付いてあげることが大事であることを学ぶことができました。

4点目は、あけみ英語村です。英語を使ったコミュニケーションアクティビティやイングリッシュ・キャンパス・ツアーなどを行いました。先ほどもありましたが、易しい英語を使って英語で説明することの難しさを学びました。

5点目は、足立区の区民講座です。足立区民対象の英語講座の補助を行いました。区民の皆さんとたくさんコミュニケーションを取ることができました。

最後の6点目は、足立区スピーチコンテストで、審査員の補助を行い無事に終えることができました。また、ICTに関して、当日パワーポイントでスクリーンに映したいのにPDFのデータしか持ってきていないという参加者の方がいたので、学生全員で協力をし、PDFをパワーポイントに作り変え、当日は無事に終わることができました。以上です。本日はどうぞよろしく願いいたします。





【大池】児島さん、ありがとうございました。いろいろなことで支えていただいていると実感します。

次に、ICTの活用の現状と課題という視点で、教育現場、学校現場の先生方にお話をいただきたいと思います。教育委員会や学校でどのようにICTを活用しているか、その実態などをお話いただければと思います。併せて、ICTを効果的に活用する場面では、現状での課題も当然あるはずです。そのあたりのお話もいただきたいと思います。

では、まず佐藤様からお願いします。

【佐藤】ありがとうございます。ではまず、足立区のICT教育環境についてご説明させていただきます。足立区では令和元年度からICT教育環境整備の考え方を示しており、そこではまずは教員用タブレット端末を整備して、授業での活用スキルの熟度を上げていくことを優先しました。その後、児童生徒が日常的に活用できる端末の整備を数年かけて段階的に行っていくというものでした。

ただ、国がGIGAスクール構想を一気に前倒ししたことに伴いまして、区も従来の方針を転換して児童生徒に一人1台のタブレット端末を、令和3年度の夏から秋にかけて順次、各校に整備していくこととなりました。現在では一人1台端末環境が実現しています。そのような中、教育委員会におきましては、ICTを活用したオンライン研修を実施したり、授業動画を受講者と共有し、事前に視聴してから参加する事前課題研修型の研修を実施したりするなどの活用をしています。

また、学校においても、授業での活用や各種会議

等のオンライン化などで活用しています。これらのことは恐らく多くの自治体が取り組んでいることだと思いますが、大事なことはICTを日常的に活用する機会を意図的に設定するということです。

やはり活用を日常化することによって授業や研修におけるICTの活用のハードルが下がりますし、その効果が高まっていくと考えています。また、本区では学習アプリケーションとしてAI型の教材であるQubena（キュビナ）を全小中学校に導入し、個に応じた学習の充実を図るための手立てを共有しています。

AI型教材の全校実施からもうすぐ1年が経過しますが、区全体での活用が進んできたところです。ただアプリケーション任せで児童生徒が勝手に学んでいくというものでは決してなく、児童生徒の理解を基に教師が対話的に関わることで、教材の重要性があらためて確認することができます。そして、これはAI型教材に限ったことではなく、ICTを活用していく上でも重要であると捉えております。

【大池】ありがとうございます。佐藤先生、ICT活用の日常化というお話がありましたけれども、先生方のスキルはどうでしょうか。突然コロナの状況が起きて、児童生徒たちだけではなくて、先生方のスキルがどうなったのか、お伺いします。

【佐藤】コロナ禍が始まった直後、一斉休校があった時期に先生方が一番心配されたのが、学力をどのように維持していくか、ということです。やはり学校に来られない時期にどうやって児童生徒の学力を保証していくかということを非常に心配していて、各学校で様々な手立てを講じました。

オンデマンドの授業を撮影したりするなど様々な工夫をしながら、オンラインを使って何か手立てが講じられるのではないかという手応えを感じてスタートしました。そこからスタートしたことで、この3年間、先生方がともに技術を高め合いながら、様々な授業においてもいろいろな場面で使えるようになってきたと捉えています。

【大池】ありがとうございました。では今度は都

立高校、田柄高校の現状などについて、山崎先生にお願いします。

【山崎】まず授業につきましては実技科目を含めて約8割の授業で教員はICTを活用しています。これはあくまで教員の使用率ということです。生徒については今の1年生から一人1台端末になりましたので、2年生、3年生の生徒の端末の利用はほぼありません。

教員のICTの活用内容ですが、主に映像や資料の提示、あるいは生徒の意見や解答を集約する、ということをして授業の中で行っています。また、各教員が作成した教材は共有するために、あるいは生徒が長期休業中に勉強することができるように、オンデマンド教材としてTeamsに格納し、突然の自習や不測の事態にも使えるようにしています。実は12月に本校でインフルエンザが少し蔓延してしまい、急遽生徒を下校させるという事態になりました。校長として授業をどうしようかと思った時に、ICTは8割程度の活用率があるということが分かっていたので、すぐに時間割通りのオンライン授業を1週間ほど行うという決断をし、実行することができました。

その際には、時間講師の先生方にも学校に勤務をしていただいで、学校から教材を配信して授業していただくことができ、これはコロナ禍の間にいろいろな手立てを試行錯誤しながら得てきた成果の一つであると思っています。またその自宅学習期間、オンライン学習期間は生徒の健康観察も行わなければいけないということで、これもオンライン上で全ての生徒の健康観察をすることができました。

ただ課題としては、やはり顔を見ないで、回答だけで生徒の健康状態を把握するのは非常に難しく、一定程度の生徒に対しては電話で状況を確認する必要がありました。

職員会議についても、田柄高校では資料は全てオンライン上、サーバー上で共有し、紙の配布は行わず、ペーパーレスを実施しています。会議の時にはそれぞれが端末を持ち寄り、端末の画面で資料を読



みながら担当者が説明するようにしています。進路指導については、このところオンラインによる就職の面接や事前の企業説明会が行われており、校内の進路室が面接会場となることも珍しくありません。

また、部活動では、本校では田柄イングリッシュ・スピーキング・スチューデントズという英語部が頑張っているのですが、参加する生徒の人数があまり多くないので、顧問が工夫して他校の生徒との合同練習をオンライン上で行い、ディベートの練習などをしたり、といった活用もしています。教員の方もこれまでずいぶん試行錯誤をしており、ICTの使い方についても、最初はスライドを一斉授業で提示するだけだったものが、個々の生徒の習熟度や理解、あるいは言葉の問題などを解決するために、Teamsで教材をあらかじめ共有して、生徒が授業中に自分が必要なページを見たりすることができるように、個別に対応ができるように、工夫されるようになりました。

【大池】ありがとうございます。今、お話がありました。緊急時の対応について言うと、高校は広域の地域から通学してくる生徒が多いでしょうから、なかなか区のレベルと都のレベルでは違うのではないかと感じました。先生方のスキルはどうでしょうか。何か研修などもされているのですか。

【山崎】先生方によってスキルはまちまちです。皆が上手に使いこなせるというのではなく、例えば、動画に長けた方は、理科の危険な実験は実際にしないで映像で見せたり、英語の先生は海外の短いニュースを探してきて見せたり、教科によって様々な取組みがされています。

ICTの活用で一番いい点は、本校の場合、日本語

ができない生徒に対してルビ付きの指導が必要なので、ルビ付き教材を板書する必要がなく、一度作れば何度も使えるということです。そのようなところでは先生方が工夫をしています。

【大池】ありがとうございます。では、今度は学生のお二人から、大学生活やその他の活動で ICT の活用をしている場面などについてお話してもらえますでしょうか。そして実際に ICT を使ってみて、どんな課題があるのか、どう感じているかなどをお話していただければと思います。呉さん、お願いします。

【呉】実は私は3年生の時に大学生による日本語指導支援、そして、2021年あけみ英語村に関わりました。当時ちょうどオンラインになっていて、ICTを初めて利用して、この2つの事業に参加しました。その時に感じたのは、確かに感染防止対策の観点で ICT は、利便性の実現に貢献しましたが、教育的な場でまだ不十分なところがあると思います。

例えば、一番よく出てくるのが、音声がかえにくい、あるいは通信状態が良くない、などの問題があります。それらの問題は大きな課題です。そして最も課題だったのは、提示の仕方とコミュニケーションの問い方にあるのではないかと考えられます。ICT は確かに全ての情報をデジタル化して提示することが大きいメリットですが、実際に一般的な紙媒体と比べて、内容がまとまりやすいという点があると思います。しかし、そこで児童生徒がその内容を吸収できるかどうかは考えなければならない問題だと思います。

また、ICT は対面ではないので、コミュニケーション



ョンの活発さが多少失われてしまうと思います。そのため、ICT をより活用するには、まず情報の分かりやすさ、例えばレイアウトのデザインなどとコミュニケーションの取り方を工夫しなければならないと思います。

【大池】ありがとうございます。今もお話があったように、やはりオンラインを使うことで対面にはないコミュニケーション上の課題や工夫については、私たちもよく考えたり感じたりするところです。では、引き続き児島さん、お願いします。

【児島】現在、明海大学には全ての教室にプロジェクターと書画カメラが設置してあり、ほぼ全ての授業で ICT が使われています。例えば私が現在、履修している教育行政学という授業では、行政についてひたすら先生が教科書に沿って解説するのではなく、各講義の授業範囲を学生が仲間と共に教科書を基に自学をして、授業資料として教科書に関するパワーポイントを作成し、発表します。そして最後に先生がその発表資料を用いて再度、付け足し説明や実際に先生しか知らない体験談を話していただいたり、また、文部科学省が実施した調査の結果などを書画カメラやプロジェクターに映して解説したりすることで学びを深める授業が行われています。

また、今年度、私は、中学校・高校の英語の模擬授業を行いました。模擬授業担当学生のほぼ全員が ICT を使用しています。英語母語話者による音声の使用や YouTube などの視覚教材の使用、また Kahoot! (カフト) や Mentimeter (メンチメーター) などのソフトを使って仲間の意見をプロジェクターを通して即座に見合える機能を効果的に使用するなど、ICT を使うことで教科書を越えた授業を行うことができました。

ICT を効果的に活用する際に課題だと考える点については、便利過ぎるがゆえに YouTube などの解説動画を流すだけのオンライン講座のような授業になってしまい、その先生にしかできない授業ができなくなってしまうという点です。そのため「効果的に使う」というその「効果的」がよく分からない



状態にあります。また、ICTの接続のための準備が長い点や、生徒の学習速度に合わせてあげられない点、例えば英語の本文の音読で長いセンテンスなどを2つに分けられない、ICTをうまく使って分けることができないなどの点が挙げられます。

【大池】ありがとうございます。教育行政の授業の様子も知ることができました。確かに「効果的に」の意味がなかなか分からない、ということはありませんね。

この3年間、コロナ禍で私たちはICTの良さを感じましたが、危うさも当然改めて感じます。やはり対面の良さや大切さも学校現場では感じていらっしゃると思います。

では、次のテーマです。今後の明海大学と各機関との連携事業におけるICT活用の可能性について話を移していきたいと思います。明海大学との連携事業をより一層充実させていくためにも、この間身近になったICTを今後どのように活用すべきか、どのようなことで活用できるか、その可能性についてお話をまとめていただければと思います。

では足立区、佐藤先生、お願いします。

【佐藤】本区で実施している区民講座について、区民対象の英会話講座は、先ほど学生の方々のご発表の中にもあった通りですが、受講者の年齢層は非常に幅広いです。20～80代の幅広い年代の区民の方が受講されていますが、コロナ禍になり、その中には対面であれば参加できるという方もいらっしゃる、オンラインなら参加できるという方もいらっしゃると思います。コロナ禍で参加者のニーズが広がったというよりは、ニーズが見えてきたという方が正確かもしれませんが、今までそういったニーズをつ

かみ切れていなかったところが、オンラインを一回導入したことによって見えてきたということがあります。

ICT、オンラインであれば参加できるという区民の方も参加できるように、対面を主としてつつ一部オンラインを活用した講座にしたり、対面で受講者が学んでいる様子をオンラインで聴講して学べる講座にしたりすることが考えられます。実は申し込みの時点で、ちょっと会話に自信がなくて、まず皆さんが会話をしているのを見たい、聞くことはできませんか、という問い合わせもありました。実際に会場に来てずっと黙って聞いているというのは少し難しいかと思うのですが、オンラインであればもしかしたら可能かもしれません。そういったニーズにもこちら側が気付くことができたという良さがあったかと思います。

また、毎回、講師の先生方にご準備いただいている資料も、文字情報だけではなく、音声とか動画とか、非常にICTの利便性が高いもの、共有するのに利便性が高いものも多いので、その点でもICTを活用していくというのは非常にいいと思っています。

本区ではICT教育推進の基本方針を定めており、そこに3つの柱を立てています。1つ目は学力の定着、2つ目は課題を解決していく力の育成、そして3つ目が場所を選ばない学びの環境の実現、ということを決めています。足立区の児童生徒を対象とした連携事業それぞれの事業においても、この3つの柱で児童生徒の学力向上や課題を解決していく力、そしてオンライン等で場所を選ばない学びの環境の実現を目指しており、区民講座もこの方針に則って開催していると言えます。これからも、今までの経験やノウハウを生かしてICTで見えてきた新しい広がり、気付きをもった連携事業を展開していければと思います。

【大池】ありがとうございます。場所を選ばないということも一つのキーワードとして見えてきたようです。そのような意味でも、足立区の3つの柱を私たち明海大学もしっかりと踏まえながら連携

を図っていきたいと思います。引き続き山崎先生、お願いします。

【山崎】やはりデジタルの資料やオンデマンドというものは時間や場所といった制約を超えることができる非常に便利なツールであるとともに、言語の制約も超えることができると思っています。例えば読み上げソフトです。日本語の文字を読むのが難しい人でも読み上げソフトなら分かる。あるいは翻訳では Google 翻訳とか、DeepL (ディープエル) とか、様々なものがありますが、そういったものを使って情報に手が届く方が増える、という利便性が強くあると思っています。

明海大学のような素晴らしい施設を直接見ることも非常に大事だと私は思いますが、一方で様々な事情で直接訪問することができない生徒も実際にいます。そのような生徒にとっては、一番最初のきっかけとして、学校説明会や大学生との交流など、もしオンラインであれば、授業が終わった後の時間に参加するチャンスがあるのではないかと思います。

また、様々な講師の先生に学校の授業に来ていただくこともあります。これもゲストティーチャーなどの形でオンラインで来ていただくことができれば、より多くの方にご支援いただけたと思います。特に金融教育とか今までの高校にはなかったような分野の指導もこれから必要になってきますので、そういった専門家の方のご支援もオンラインなどでいただけるのではないかと思います。

それから大学の授業などを少し生徒に体験させることができたらいと個人的に思っています。本格的なものでなくても、入門編などをオンデマンドで見ることができれば、生徒が大学の学科や分野を選ぶ時の最初のスタートにはいいかと思います。今までの学科別や分野別の学びというのは、複数の大学や専門学校の先生方に高校に来ていただいて、ブースごとにお話を伺うということがありましたが、そういう1回だけではなくて、オンデマンドなどで体験できれば、生徒のニーズにもう少し細かく対応することができるのではないかと思います。

【大池】ありがとうございます。先程佐藤先生からも場所を選ばないというお話がありました。今、ヒントをいただいている山崎先生からも、オンラインの講座などは出かけて行かなくても、場所を選ばない方法も少し垣間見えてきたようです。学校説明会や交流会などもいいですね。確かに田柄高校に伺うためには大学から2時間半かかりますが、時間を選ばない、場所を選ばないという可能性もオンライン、ICTの活用の中で出てくるのかなと思います。

では、今度は引き続き若い視点でお二人からお話を聞きたいと思います。まずは呉さん、お願いします。

【呉】先程お話しした通り、ICTでまずレイアウト、デザインなどを工夫することで、情報をより分かりやすく伝えることができるのですが、やはり私たちの世代は2年生から全部オンライン授業になってその限界が少しずつ分かってきました。確かに利便性が実現する一方で、その授業全体がやはり一方的になってしまう傾向もあると感じました。その解決策は、とても抽象的なのですが、まず教える側ではなくて、学生を中心に授業を組むことだと思います。

それから、ICTは確かに便利などありますが、ICTに偏らず、紙媒体と合わせて活動を行うのがいいと思います。つまり両者のそれぞれの長所を取り入れて、それぞれ不十分なところを補うという形です。こうした点を踏まえて、さらに積極的に教員が生徒に話しかけて、途中にクイズなどのゲームを導入したりして、コミュニケーションらしい態勢を作るとするのはとても大事だと思います。

【大池】ありがとうございます。ICTの限界なども授業を受けながら段々見えてきたということですね。では児島さん、お願いします。

【児島】今後、よりICTを活用するためには、ICTばかりに頼るのではなく、まずは私たち人間にしかできないことをしっかり知ることが大事だと考えます。確かに皆さんご存じの通り、ICTはとても便利です。しかし私たちにしかできないこ

ともたくさんあります。例えば、先ほども述べましたが、英語の本文を音読している時に長い難しい文が出てきたら、ICTに頼るのではなく、そこは先生たちが子どもたちの学習定着度に合わせて文を区切ってみたり、音読のスピードを変えたりすることができます。このように人間にしかできないことをもっとしっかり私たちが知ること、ICTのメリットを最大限に生かすことができ、デメリットを最小限にすることができると思います。

そして、この人間だからできるメリットを最大限に生かして、人間の苦手とすることや、機械にかなわないことをICTの力を借りることでもっともっと素晴らしい授業だったり、ボランティア活動だったりというのを創り上げることができると思います。

従って、明海大学の連携事業においては、私が今参加している未来塾やドラフトゼミでは入試の過去問題を解く機会が毎年あるので、与えられた音源をそのままのスピードで流すのではなく、生徒が少し頑張ればできるぐらい、今のカプラス1ステップぐらいの難易度でリスニングの音源を、私たち支援員が音読して問題を一緒に解くことで、ICTをもっと効果的に使えると思います。またMEIKAI-JOEや授業改革セミナーなどでは今もZoomのコメント機能を使っていると思うのですが、それに加えて、Mentimeterという新しい、最近、私が所属しているゼミで開拓した視覚教材を使うことで、より生の声を生かしたセミナーなどにすることができると思います。

しかし、これらの技術を巧みに操ることはものすごく難しいと思います。だからこそ、デジタルネイティブ世代と言われている私たちが先頭に立ち、ど

ンドン挑戦していくことで、その知識を1つ下の学年や2つ下の学年、そして先生方にも伝えて、みんなでICTを最大限に生かせる取組ができると考えます。

【大池】ありがとうございます。デジタルネイティブではない世代の私としては、とても耳に痛いお話をお聞きしました。

時間の問題もありますが、ICTの可能性に関して、学校現場のお話がありました。可能性として時間や場所を選ばない、可能性は多大にあるということも分かりました。一方で、学生の側の提言では、ICTの限界であるとか、ICTだけではなくて、私たち人間にしかできないもの、そのあたりを探していくというお話もありました。やはりその辺の情報の交換、DXの時代だからこその情報のやり取り、お互い同士のやり取り、共有がとても大切なのだろーと言えます。

今日の基調講演者の合田先生のお話にあった通り、ICTは他者との対話を深めるためのツール、他者との対話を深めていくツール、その他者は広い意味も狭い意味もあると思いますが、そのツールとしてのICTの側面はやはり忘れてはいけないのらーと感じました。

米村先生、何か感じたことや考えたことなど、コメントをいただけますか。

【米村】最初からお話を伺っていて、少し気になった言葉ですが、例えば佐藤先生からは「日常的に活用する機会を意図的に設定する」ということ。これは非常に大事なことだと思いました。ICTの使用、機会の設定によって、使う側のスキルの向上も図れると思います。それから山崎先生からは、大池先生からもありました通り、時間・場所・言語を超える、そういうツールとしての可能性が見えてきたと思います。呉さんからは、ICTで提供された内容が吸収ができているかどうかの懸念がある、という話は、なるほど実際に交流活動をやっている中で感じたことで、やはりコミュニケーションが一方向になりがちであることはICTに付きものの課題なんらー





うと感じました。児島さんからは「効果的」とは何か、ということがキーワードで出てきました。

そうした話を受けると、現状では ICT の活用が進んでいる中で、まだ活用は限定的だろうということです。基調講演の合田先生の話と結び付けると、やはり学びの転換の壁は、経験から生まれてくる教員の認識であるのではないか。要するに、ICT を使う側の、指導する方の認識が壁になっているというお話もありましたが、皆さんのお話からも出てきた、デマンドサイドに立った構造が大事ということですね。ICT を使う側、大学であれば学生の皆さん、交流であれば交流先の相手、そうした人たちのデマンド、ニーズに応じた使い方がどうできるか、ということをしっかり考えていかなければいけないと感じました。抽象的ですが、以上です。

【大池】ありがとうございます。では今度は会場と Zoom で御参加の方たちからご質問等を受けたいと思います。Zoom 参加の方に関しては、画面に向かって手を挙げていただき、こちらで指名させていただきますと思います。

会場で手を挙げている方から、所属・名前を言っていただき、質問をお願いします。

【上原】明海大学外国語学部3年の上原二葉です。児島さんに質問です。模擬授業で Mentimeter と Kahoot!などのソフトを活用していると聞いたのですが、実際どのようなものなのでしょう。また、実際にどのように活用したのか詳しく説明をお願いします。

【児島】ご質問ありがとうございます。まず Mentimeter はスマートフォンやタブレットで QR コードを読み取ってリアルタイムにアンケートを

集計することができるものです。文字、例えば「1、2、3、4、5、どれだと思いますか?」と聞くと、いろいろな意見があると思うのですが、「2」を押した学生がたくさんいたら、「2」だけ大きくなって見えます。リアルタイムにアンケートの状況が全員に分かるものです。

Kahoot!はクイズ大会のようなものを開けるアプリケーションです。4択問題だったり○×問題などがあります。私は使っていませんが、私と同じ授業の学生が使っていました。実際には教科書の本文に入る前に本文の内容に関するクイズや、動機付けの活動などに使いました。他には本文を読んだ後に「どの単語が本文の中のキーワードになるかな。打ってみよう」といった質問を投げかけて生徒がキーワードを入力します。例えばみんながサンタクロースを入力したら、サンタクロースがキーワードだとみんなが思ったことが分かる、という具合に使いました。

【大池】ありがとうございます。では会場から次の質問です。お願いします。

【清宮】外国語学部日本語学科3年の清宮です。2人の先生方にお聞きします。将来、教師を目指す私たちが今、身に付けておくべき ICT のスキルとは何でしょうか。お願いします。

【大池】佐藤先生から順番に、いいですか。

【佐藤】すごく難しい質問だと思いますが、足立区でも若い先生がたくさんいらっしゃいます。ICT をとても得意にされている若い先生もたくさんいる中で、足立区の研修の中では ICT の活用ももちろんあります。ICT をたくさん使って児童生徒にどのような使い方が効果的なのかというのを探るのも大事なのですが、やはり授業においては学習指導要領に基づいてそれを実現するための手段として ICT をどう使うかという視点が欠かせないので、まずは授業の指導内容や目標をきちんと理解した上で、そこにどんな使い方ができるかということを仲間と議論していく。少し ICT の活用スキルとは離れますが、その仲間と議論をしていく時に、目的、

目標をきちんと定めて議論をするということが非常に大事なことです。

実際にそういった研修をすると、やはり中身が深まっていきます。ICTの活用をどうするかではなく、この目標を実現するためにICTをどう使うか、という議論になっていきますので、そういった視点をもって教師になるということが非常に重要なのかなと思います。

【大池】ありがとうございます。

【山崎】少し回答が難しいかと思います。実は学校の中で一番ICTスキルが低いのは私だと思っていて、教員の方が日々試行錯誤しながら、お互いの授業を見ながら改善に努めているんですね。

ただ、皆さんが教員になる時はもっと違うかもしれませんが、私が多くの授業を見た中で、やはり学びが深まる使い方をしてほしいと思っています。ただ単に単語を覚えるためとか、ただ単に一方的に何かのルールを覚えるためとかではなくて、生徒自身がICTというツールを使って世界を広げること、自ら情報を取りに行き、それが正しいかどうか判断することができて、新しい知識と知識を結び付けることができ、いろいろな人と考えを深める、そういった広がりや深まりのある使い方を授業でやれるようになったらいいなと思っています。

全くスキルがない私が想像で今お伝えしているので、どれほどそれが難しいことか分かりませんが、単なる知識だけを授業の中で繰り返し覚える、そういった使い方ではないことが必要だと思っています。

【大池】ありがとうございました。学びを結び付ける、学びの深まりができる使い方をしてほしいということですね。学びをそれぞれのもっているものを結び付ける、学びの中身を結び付けるということは、どこかにありましたね。学習指導要領です。

佐藤先生が仰ったICTよりも先に学習指導要領を読むことが大事、ということですね。しっかり読んでください。それからICTのスキルを向上させま

しょう。

Zoomの方はご質問がないということで、もうそろそろまとめなくてはならないのですが、少し時間がありますので、最後に今日の4人のパネリストの皆さんから会場にいる方々、そしてZoomでご参加の皆さんに、ご感想などお話しただければと思います。今度は児島さんからお願いします。

【児島】今日は貴重なお話の機会を設けてくださり、ありがとうございます。私は先ほども言った通り、「ICTを効果的に使う」という、この「効果的」の答えを本学の在学中に見つけて、ちゃんと教員採用試験に受かって、いざ教壇に立った時に本当にICTを効果的に使えるような教師になれるように頑張ります。今日はありがとうございました。

【大池】呉さん、感想をお願いします。

【呉】実は本日のICTの課題は私にとって難しい部分もありました。すごく抽象的な意見をお話したのですが、やはりこのICTの課題については今後、とても考えなければいけないことだと思います。

特にこういった科学が進んだ現代ではこれからもICTが我々の日常となります。完全なICTでの授業になる可能性があると思います。ありがとうございます。

【大池】ありがとうございました。呉さんはもう2年ほど本学の大学院で学び続けてもらい、ぜひとも台湾なり世界の場でICTを活用して今度は教える側になってほしいと思います。ありがとうございました。では引き続き山崎先生、お願いします。

【山崎】今日は足立区の様々な取り組みも知ることができて大変勉強になりました。また、授業を実際に受けられていた立場の学生の児島さんと呉さんの視点も大変勉強になりました。

利便性にばかり私たちは目を向けがちですが、より効果的に使うためにはデメリットも見なくてはならないということで、気づきがありました。今日はありがとうございました。

【大池】ありがとうございました。ではラストです。佐藤先生、お願いします。

【佐藤】本日はありがとうございました。非常に勉強になりました。たくさん事業がある中で、また区民講座の話で申し訳ないのですが、今回、オンライン実施となった時に、私が一つ心配したことがありました。毎年この講座を楽しみにしてくださっている年齢層の方々が、オンラインができないという理由で受けられないんじゃないか、という心配をしました。

ただそれは杞憂でした。やはり学生の皆さんの発表でもありましたが、生涯学習として学び続けられている方というのは、オンラインでの受講も学びの一つである、学ぶということはチャレンジすることだ、と考えていて、そのことをあらためて教えられた気がします。そのチャレンジをどのように支援していくかというのが運営側に求められていることなのだと、オンラインの実施を通してすごく勉強させられたところがあります。今後も地域連携の現状を踏まえた ICT の可能性について、連携事業を通して考えていければと思っています。本日はありがとうございました。

【大池】ありがとうございました。本日はご多用の中、4人の皆さんにご登壇いただいて、地域連携における ICT の可能性について、お話をお聞きました。有意義な話ができたとおもいます。

以上をもちまして、本日のパネルディスカッションを終了したいと思います。会場の皆さん、そして Zoom 参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

10. 閉会式

閉会挨拶：明海大学 副学長 高野 敬三



ただ今、ご紹介いただきました明海大学の副学長の高野と申します。この「大学と地域連携の未来」というシンポジウムの発端について、まず少しお話をさせていただきたいと思います。

大学の使命というものは、教育、研究、地域貢献であります。明海大学では、この地域貢献というところに着眼いたしました。学生が地域貢献をすることはとても有意義なことであるということで、2016年に地域学校教育センターというものをつくりました。

小中学校や高等学校あるいは学校以外の様々な教育機関に出て何かしらの地域貢献を行うことは、学生自身の学修となります。こうしたことの意義を踏まえ、広く関係者の皆様や地域の方々と共有するためにこのシンポジウムを始め、今年で7回目となります。

本日はたくさんの方々に Zoom でご参加いただくとともに、実際に会場にも来ていただきまして、本学の学生の発表をお聞きいただきました。学生の発表を聞く前には、文科省の要職を歴任し、現在は文化庁次長でいらっしゃる合田哲雄氏から、「DX時代の授業づくりについて考える」という演題で基調講演をいただき、それを基にパネルディスカッションを行いました。今日は、コーディネーターがうまく仕切ってくれたこともあり、有意義なパネルディスカッションになったのではないかと思います。

ICT を効果的に使うことが課題となっていますが、

特に重要なのは、ICT は「使う」「使わない」という二項対立ではなく、既に「使って当たり前」という時代になっていることです。このことを前提として学生の方から「効果的に使うにはどうすればいいのか」という質問がありました。いつ・どこで・どのように ICT を使うか、これが「効果的に」という解を見つけ出す時に考えなければいけないことではないでしょうか。

ICT といっても様々なソフトがありますし、活用するに当たってそれに頼りっぱなしではダメで、毎回、使わなければならないということでもないといったことなど、様々なヒントが出ていたかと思えます。

お集まりの皆さま方、学生諸君、そしてオンラインで参加されている方々、並びに関係者の皆様方、本日ともに学んだことをきっかけに今後ともこうした課題についてきちんと考え、探究を続けていきたいと思えます。

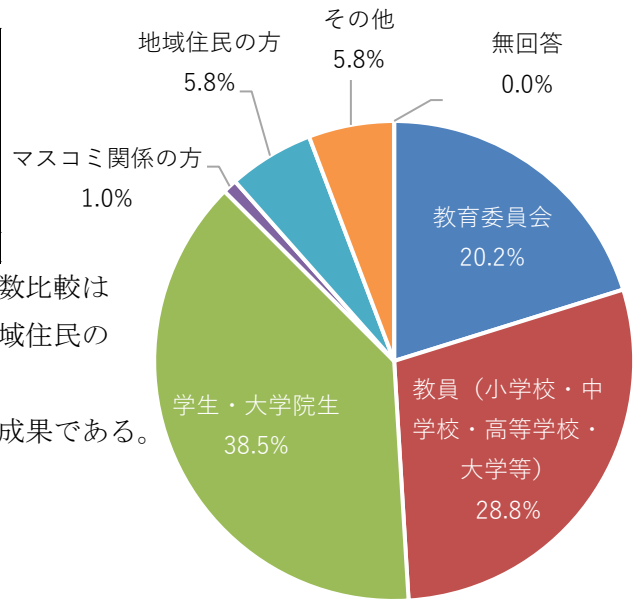
本日はお忙しい中、ご来場、また、Zoom 配信にお入りいただきまして、ありがとうございます。貴重な、非常に長い一日を費やしていただいたことと思えますが、ご協力について感謝を申し上げて、私の閉会の言葉とさせていただきます。

11. アンケート

◆所属を教えてください。

教育委員会	21 人
教員（小学校・中学校・高等学校・大学等）	30 人
学生・大学院生	40 人
マスコミ関係の方	1 人
地域住民の方	6 人
その他	6 人
無回答	0 人
計	104 人

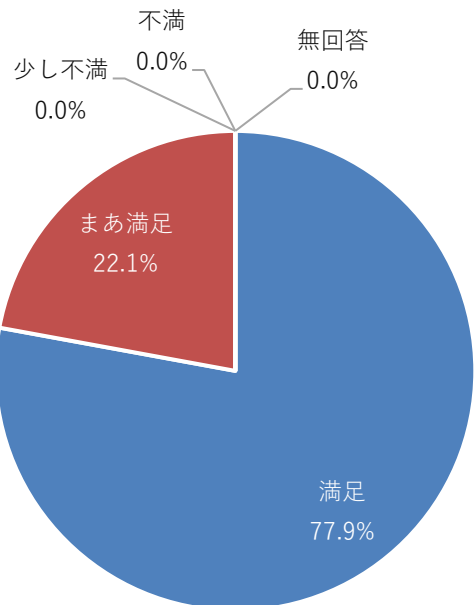
- ・ 年度により参加者の数が異なるので、単純な人数比較はできないが学生・大学院生、マスコミ関係、地域住民の参加が増加している。
- ・ 地域住民の参加が増加したことは非常に大きな成果である。



◆基調講演はいかがでしたか。

満足	81 人
まあ満足	23 人
少し不満	0 人
不満	0 人
無回答	0 人
計	104 人

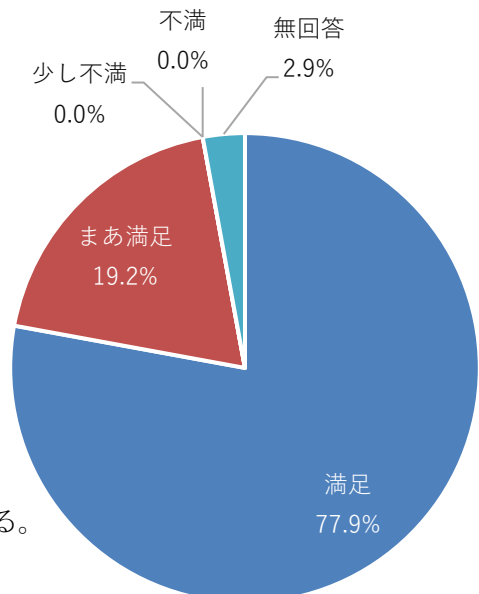
- ・ 参考になった、今後の教育の展望を知ることができた等の前向きな意見が大多数であった。
- ・ 一方で、話が我々の世界と離れていてついていけない場面があった、講演全体を通して一番大事だと思う箇所は理解できたが、それ以外の内容がうまく掴み取ることが出来なかった、という意見もあり、難解さを感じた参加者がある程度的人数存在したと推測できる。



◆学生発表はいかがでしたか。

満足	81 人
まあ満足	20 人
少し不満	0 人
不満	0 人
無回答	3 人
計	104 人

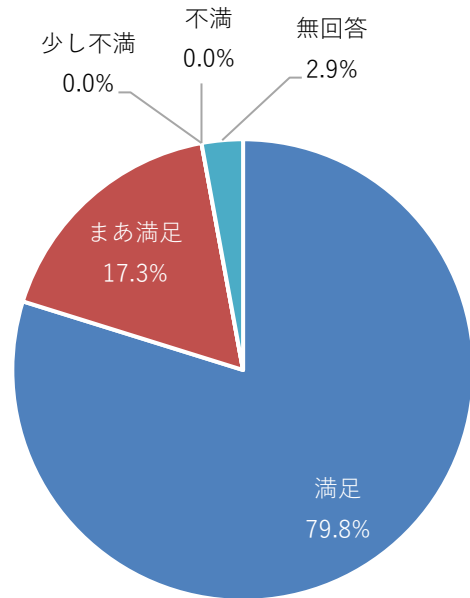
- ・ 学生、大学院生の参加が多かったことで、自分の知らないボランティアもあり参加したかった、今後自分も参加してみたい、こんなにも沢山の活動があると知ることができたといった本事業を身近に感じたという意見が多い。
- ・ 一方、もう少し具体的なシーンのようなものを発表に盛り込んで欲しいという意見があり、来年度に向けた課題である。



◆パネルディスカッションはいかがでしたか。

満足	83 人
まあ満足	18 人
少し不満	0 人
不満	0 人
無回答	3 人
計	104 人

- ・ ICT 活用の現状という切り口と、参加者の関心とのマッチングが非常に良かったと考えられる。
- ・ 学生の、ICT の限界という提言についての肯定的な意見も見受けられ、テーマ、内容ともに満足度の高いパネルディスカッションになったと思われる。

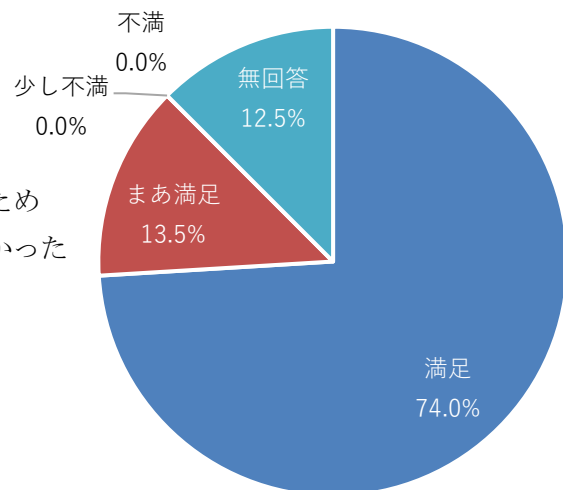


◆Zoom によるオンラインで参加した方にお聞きします。

映像や音声などの配信はいかがでしたか。

満足	77 人
まあ満足	14 人
少し不満	0 人
不満	0 人
無回答	13 人
計	104 人

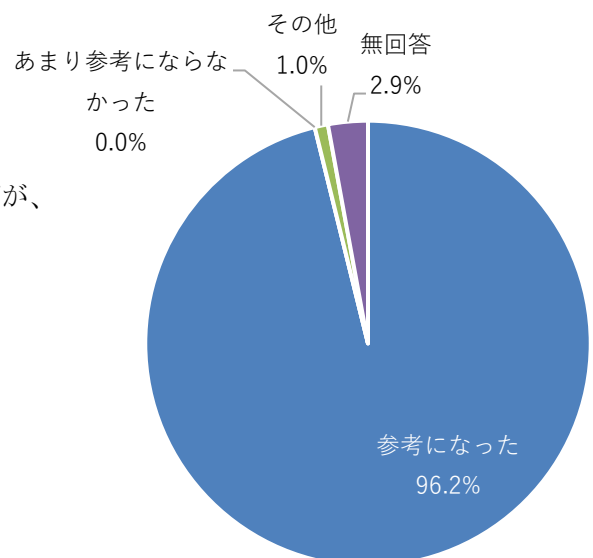
- ・ 配信映像の処理落ちは、視聴側の環境に左右されるためどうしても0にはしきれないが、否定的な意見がなかったという点では今回は成功と判断できる。



◆配布資料（リーフレット）は参考になりましたでしょうか。

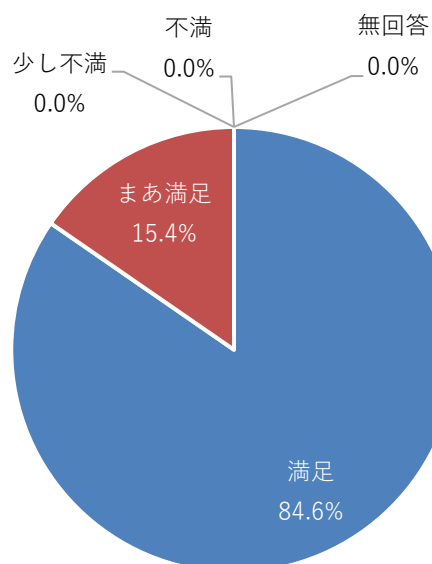
参考になった	100 人
あまり参考にならなかった	0 人
その他	1 人
無回答	3 人
計	104 人

- ・ 当日の参考資料として活用されたのはもちろんだが、事前に発表内容を知ることができたという意見が見受けられた。



◆総合的に見て、本シンポジウムにご満足いただけましたか。

満足	88 人
まあ満足	16 人
少し不満	0 人
不満	0 人
無回答	0 人
計	104 人



- ・ ICT や DX といった現在の教育現場での知りたい事と、本シンポジウムのテーマとのマッチングが非常にうまく行ったと判断でき、アンケートの各設問の満足度の高さがそれを裏付けている。
- ・ 次回以降の改善点としては、学生発表の内容（より具体的なシーン等を盛り込む）、目標としては地域住民の参加の更なる増加による本事業への注目向上が挙げられる。全体的に本シンポジウムは成功だったと考える。

【基調講演 自由回答】

- 行政の方針とこれに対する現状の課題・問題意識が大変良く理解出来ました。改革には地道な努力と継続が必要と感じました。
- 大変意味のあるお話をわかりやすくお伝え頂きました。
- DX時代の授業づくり、未来の教育のあり方を学ぶことができました。
- 難しい言葉が多く、私の知識不足を痛感しました。
- 教育方法の幅がまたさらに広がった感じがしたから。
- 改めてさまざまなことを学べた。
- 教職を学ぶ身として今後参考にできる内容であったから。
- いい経験となりましたが、難しい話だったからです。
- 少々、話が我々の世界と離れていてついていけない場面があったため。
- 普段聞いている話を違った視点から話していたから
- 講演全体を通して、一番大事だと思う箇所は理解できたが、それ以外の内容がうまく掴み取ることが出来なかった
- 学生の報告、シンポジウムでの発言がとても参考になりました、
- DX時代の日本社会と求められる人材の学校教育について、考えることができました。児童生徒が、一人一人の特性や関心を生かし、一人1台端末でどう組み立てるかという視点をあらためて確認することができました。そして、その際の課題である現場の先生方にあるバイアスをどのように解消するかについて、今後考えていきたいと思いました。
- 現在求められる資質能力について、学校現場の実態と合わせて講義いただけたから。
- 学習指導要領改訂を視野に、今そしてこれから重要なことを明確に御講演いただいたから。
- 次期学習指導要領を見据えて、大人である私達の意識を変える必要性を実感しました。
- これからあるべき新しい価値観や変革への道について非常にわかりやすく、現状を的確に捉えながら説明して下さり大変勉強になったため。
- 教育の変遷の歴史、今、求められている教育について様々なデータ及び根拠を提示しながら示していただいた。また、今後、教員を目指す学生への提言もされていて、我々も今までの常識にとらわれることなく学び続ける姿勢が必要であると痛感した。
- これからの教育のあり方がわかりやすく解説されていて勉強になりました。
- 今後の教育改革の視点がよく分かったので。
- 文化庁の考え方を直接聞くことができる貴重な機会となりました。
- 合田氏の話は大変参考になりました。
- これからの方向性を教授いただきながら、現状を振り返りつつ、今後の展開を考えることができた。
- 次期学習指導要領は一人一台端末を前提とした改訂となるという御指摘にハッとさせられました。
- 今後の教育の展望について語られたので。

【学生発表 自由回答】

- これらの取り組みについての学生の教育上の重要性和本学の地域貢献の深度が良くわかりました。教職員と学生の本学に対する愛情の深さも実感致しました。
 - もう少し具体的なシーンのようなものを発表に盛り込んで頂けたらと思います。
 - 緊張せずに発表できました。
 - 皆大きな声でわかりやすい発表をしていたと思います。
 - それぞれ苦労したことややりがいとしっかりと伝わったから。
 - 自分の知らないボランティアもあって、まだ学生生活があったら参加したかったなと思いました。
 - 今後自分も参加してみたいと考えたから。
 - こんなにも沢山の活動があると知れたからです。
 - 緊張はしたが、順調に進められた。
 - 学生の活動を幅広く知れたから
 - 明海大学生がどのような取組を行ってきたか、よくわかりました。足立区としても区民・児童・生徒が大変お世話になっており、明海大学が様々な地域へ大きく貢献していることがわかりました。
 - 本区と関わりのある取組はもとより、日本語指導などについても、事実を即した分かりやすい発表だったから。
 - 様々な地域連携、貢献について、簡潔にプレゼンなされたから。
 - 学生の皆さんな様々な人と関わり、幅広く行動していることを知る機会になりました。
 - 各取組について写真やスライドで明確に示され
- ていて本区が関わる事業以外も十分に理解することができた。また、どの学生の発表の姿勢も素晴らしかった。
- 一人一人がよく頑張った！
 - 学生の方にはいつも迷惑をかけており申し訳ない気持ちで聞いておりました。
 - とてもほのぼのしました。
 - 大学生がきちんと取り組んでいることを知ることができた。また、学生の皆さんの真摯な姿勢も素晴らしかったです。
 - 一人一人の積極的な姿勢が大変頼もしかったです。
 - 留学生も頑張りました。社会連携が参加学生にも良い影響を与えています。

【パネルディスカッション 自由回答】

- 行政及び地域教育機関の対応方針がよくわかると共に本学の地域貢献度が良く理解出来ました。何より本学学生の優秀さに感動致しました。
- 現場感がありました。
- 様々な視点を知ることができました。
- 自分にはない視点や経験を知ることができ、とてもおもしろかったです。共感した部分もありました。
- 今や ICT の時代が来ているのにも関わらず、それについて懸念されることもあるということに改めて気付かされた。そして、それをもとに自分でどうしていくべきかを考えるきっかけとなったから。
- 来年から教員になるからとても勉強になった。
- ICT 教育の現状について深く知れたからです。
- DX 化の話題に付随して ICT 教育のあり方のお話でした。現場に出ていない身としてはやはり少し遠い話のように感じました。
- ICT の現状を知れたから
- ICT 機器の可能性について、あらためて考えることができました。「時間」「場所」「言語」を越えられる利点を生かし、他者との対話を深めるためのツールとしての可能性があると思いました。また、学生の ICT の限界という提言も興味深かったです。
- パネリストが、それぞれの立場の特徴を生かした発言により、円滑かつ深い協議になったから。
- 人選がよく、それぞれの立場で具体的かつ示唆に富んだお話をしていただいたから。
- 行政、学校、学生の三者それぞれの話を聴くことができました。学生の方々の話は興味深く聴かせていただきました。
- 様々な立場の方からの、各テーマについての返答を聞くことができ、自分では当たり前と思っていたことが十分に社会全体に浸透していることであつたり、そうでないこともあつたりと新たな発見があつた。
- 将来教員を目指す、本校でもお世話になった学生の方からの意見が大変参考になりました。
- 進め方がうまかつた。
- 時間の都合で参加できませんでした。
- いろいろな立場からの ICT 活用についての御意見を伺うことができ、大変参考になりました。
- 現在現場で ICT を活用してる身としてより一層効果的な活用の仕方について考えていきたいと思ひました。
- ITC に対するマイナスの面を学生が良くとらえていたので。

【Zoom 開催 配信 自由回答】

- 音や映像の乱れがなかった点
- スムースな場面展開やクリアな配信で、不自由なく参加することができました。
- 映像、音声共に適切だったから。
- 特に問題なく参加できました。
- 画面の移り変わりなどもとてもスムーズだったため。
- 長時間の放映でしたが、特に音声途切れることなく視聴できた。
- 少々画像の動きがぎこちないところもありましたが、気になるほどではありませんでした。
- 音声・映像が一度途切れましたが、一度だけで問題はなかったです。

【配布資料について 自由回答】

- カラー刷りで大変見易いです。発表した学生の所属や氏名も入れた方が記念と記録になるのではないのでしょうか。
- 流れがわかりました。
- わかりやすかった。
- 概要が分かりやすく書いてありました。
- 情報が詳しく書いており、見直すことができたから
- 概要があったので、要点を捉えて講演・発表を聞くことができました。特に、学生による発表の部分の内容は、どのような取組を行ってきたかがよくわかるようにまとめられていたので、発表を聞きながら、手元の資料として活用させていただきます。
- 基調講演合田哲雄氏が画面共有なさった資料をいただきたいです。
- 事前に読むことで、発表内容を予め知ることができた。また、シンポジウム後も、内容を思い出せるよい資料となった。
- 講演等を聞く際、手元に文字資料があると安心します。
- 明海大学の取り組みの理解が深まった。
- 発表の内容がコンパクトにまとめられており、発表を聴く上での手がかりとなっていました。

【次年度以降 シンポジウムテーマ 自由回答】

- 大学発ベンチャー、総合知
- 通信制学校の教育について
- 基調講演、パネルディスカッションにあった DX 時代を受けて、「グローバル化する社会の中で活躍できる人材の育成」について考えてみたいと思いました。
- 日本における外国語教育の意義（AI による自動翻訳の発達を踏まえて）。
- 個別最適な学びと協働的な学びの実現
- 基調講演
- 留学生が中心となるようなテーマを聞いてみたい気がします。
- 一人1台端末
- 地域連携事業ごとの分科会等を設けていただき、参加した学生さんと直に意見交換をしてみたいです。

【全体を通して 自由回答】

- ありがとうございました。以下コメントです。
会場の暖房の温度が少し高かったと思います。
オープンのトイレ工事の音が多少聞こえました。
- いい経験になりました。ありがとうございました！
- シンポジウムに参加させていただき、ありがとうございました。学校教育をどうしていくか、また、学校現場に対し、自分にどのような支援ができるか、あらためて考える機会となりました。明海大学のこれまでのご尽力に感謝いたします。今後ともどうぞよろしく願いいたします。
- 合田先生の講義から、縦串と横串の通った内容で、興味深く視聴できました。様々な準備方、ありがとうございました。
- 副学長、副センター長にはいつも御指導賜りましてありがとうございます。本日も多くを学ばせていただきました。御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。
- 本日は、ありがとうございました。
- 基調講演の人選が素晴らしかったです。オンラインでこのような会に参加できる良さを改めて感じました。また、意欲的に子どもたちと関わり、教育に関する経験を積まれている留学生がいることを知ることができました。これからも浦安市の子どもたちとの交流を継続していただきたいと改めて思いました。本日はありがとうございました。
- 運営等、ありがとうございました。Zoomでの参加でしたが、トラブル等がなく、ライブでの参加と変わらない学びができました。
- ありがとうございました。時間の関係で基調講演のみ参加させていただきました。
- 今後も今日的課題に即した講演会を実施していただけると、現場としては大変勉強になります。
- シンポジウムのご準備お疲れ様でした。大変学びの多い研修会でした。
- いつもお世話になります。今後ともよろしく願いいたします。
- また、参加したいです。ご案内をお願いします。
- せっかくの機会なので、一堂に会して開催できる社会状況になることを願っています。
- とても有意義な機会でした。有難うございました。
- ICT は教育の一つのツールであり、何をどう教えるかの授業づくりが常に大切だと考えます。明海大には CALL システムもあるので、思い切った授業づくりを期待します。

その他の事業報告

12. 日本語指導教員研修（足立区/都立飛鳥高校/都立田柄高校/都立南葛飾高校）

報告：外国語学部日本語学科教授 木山 三佳、同講師 田川 麻央

1 概要

日本語指導が必要な児童・生徒に対する指導について、教員向けの研修をおこなっている。今年度は、足立区小学校教員対象研修を2回、都立飛鳥高校、都立田柄高校、都立南葛飾高校において実施した。

2 年間の実施報告

(1) 足立区教員研修 担当：木山 三佳

- 第一回「母語と日本語両方の育成を目指す教室活動」 (2022/6/3) 参加者……10人

最初に問題の洗い出しのために、日本語指導が必要な児童の言語能力と学習に関わる問題について、ライト・ペア・シェアを行い参加者間で問題意識を共有した。次に、バイリンガルの認知能力についての理論、冰山仮説、敷居仮説、四象限モデルなどの理論を解説した。

最後に小学理科3年「磁石に引き付けられるもの」の単元を使って外国人児童がいるクラスの授業活動において言語面の到達目標、言語的補助をどのようにするかを参加者一人一人に考えてもらった。

具体的な指導のポイント

1. 目標・評価を決める
達成可能な目標を選ぶ・修正する。
言語面の到達目標を加える ★
目標に見合った評価（考えるタスクや表現するタスク）を考える。
2. 内容を決める 観察・体験⇒説明
現物の観察・体験をさせ、興味をもたせて状況を理解させる。
配布資料：認知的・**言語的補助をつける ★**（+日本語の練習）

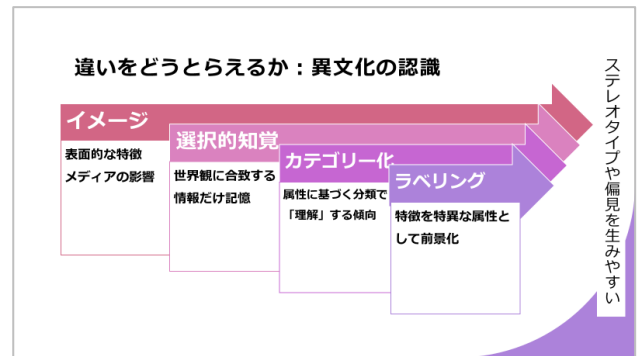
- 第二回「日本語母語児童と協働する多文化の教室」 (2022/12/9) 参加者……5人

日本語指導が必要な児童と日本語母語児童の間では言葉の問題以外にも文化の違いによるコミュニケーション上の問題が起きる可能性がある。

そこで、まず異文化コミュニケーションについての解説を行った。非言語コミュニケーションや価値観といった意識していないレベルでの文化の違いにはどのようなものがあるのか、異文化を理解する

ことについての理論について解説を行った。

次に、より良い異文化コミュニケーションを行うためのトレーニング方法として、マインドフルネス、D.I.E.法などを紹介し、自分のクラス等で実際にどのように活かせるかを考えてもらった。



足立区の受講者の感想から

母語の基礎がしっかりしていれば、それが第二言語の日本語にも転移し使いこなせるようになることが分かりました。

特別支援教室の児童にも生かせる内容でした。4回シリーズの全部に参加しました。今まで学級担任をする中で経験として理解していたことが、この研修で一層理解が深まりました。

外国人の児童に加えて保護者との対応の留意点がよく分かりました。



(2) 都立高等学校日本語指導研修

担当：田川 麻央

東京都立南葛飾高校研修 (2022/10/19)

参加者……20人

東京都立飛鳥高校研修 (2022/12/22)

参加者……20人

東京都立田柄高校研修 (2023/2/16)

参加者……6人

● 「JSL 学生および留学生のための大学での日本語学習支援」

さまざまな背景を持つ生徒に対して、どのような日本語支援を行うべきか模索が続けられている。本研修会ではそのような生徒に対してどのような対応が望ましいのか検討するために、大学での日本語学習支援についてお話した。異文化理解の視点からも理論的な解説を行った。

まず、基礎教育、キャリア教育、共通科目で展開している日本語学習科目について説明した。学習支援システム manaba を使った日本語学習法、自己主導型学習として行っているセルフラーニングの取組を紹介したうえで、クラス活動が難しい学生も他の学生と同じように学べるよう、教材を工夫する方法について説明した。学内施設である MLACC 日本語ゾーンを利用した学習支援方法、日本語能力試験 N1 合格に向けた学内模擬試験の作成と実施、各種資格試験に向けた講座の展開を紹介した。

つぎに、異文化環境である学校という場で日本人生徒、外国に関わる JSL 生徒が互いにどういう力を伸ばしていくことができるのか、価値観や信念、行動様式などの見えない文化にどうやって気づかせるかを考えるために理論的な解説を行った。そのうえで、肯定的な異文化接触のために必要ないくつかの条件を紹介し、学校という場でどういうことができるのか検討した。

肯定的な異文化接触

・接触の量と質

・接触が効果をもつための4条件

- ①親密な関係性を築くこと（密度の濃さ・十分な期間）
- ②対等な地位での接触
- ③共通目標を目指す協働
- ④学校などからの積極的な支持、支援

東京都立飛鳥高校の感想

全日制課程 副校長 竹原 義和 先生
日頃より、本校の教育活動に御理解・御支援を賜り、誠にありがとうございます。

今回の研修会では、大学教育における「ジェネリック・スキル」養成の重要性や日本語指導としてリライト教材が有効であることを認識することができました。また、自立した学習者を育てるために、明海大学が自己主導型学習を通して、授業に様々な仕掛けを用意していることがとても参考になりました。検定取得やそれに向けた対策講座等を実施していることも、学生のモチベーションを高めていることに成功している理由であると実感したところであります。引き続き、本校教職員の日本語指導への御支援をお願いいたします。

東京都立田柄高校の感想

副校長 金澤 剛志 先生

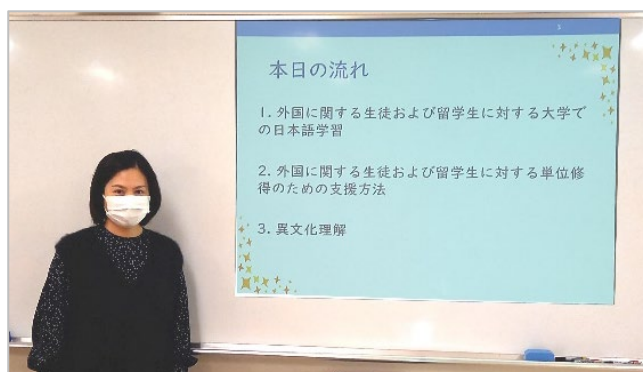
日本語指導が必要な生徒の現状と課題について、明海大学でのカリキュラムや対応している内容が数値やグラフなどの視覚から分かるようにまとまっていたので、とてもわかりやすい内容でした。

日本語指導について、段階を踏まえた計画の設定を行い、現状を踏まえて日本語能力検定の取得時期やそのためのスケジュールを考える必要性を改めて認識しました。

石田 悠人 先生

研修を通じて教わったリライトは、日本語指導という特定の場面だけではなく、平素の教科指導においてもスライドや板書の際に生かすことが出来ると思いました。

本校で過ごす3年間で、本日教授していただいた肯定的な異文化接触の機会を増やすことで、グローバル化が進む昨今の日本において、卒業後も活躍できる人材の教育に励みたいと考えました。今後とも、生徒の日本語指導・進路指導に尽力いたします。



13. 2022年度 英語授業改革セミナー

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 及川 龍之介、加藤 天真、小林 悠太、佐藤 向日葵、 佐保 翼、橋本 ありさ 3年 上原 二葉、児島 晴香、桑原 百蘭、向後 志穂、 佐久間 陸人、志垣 悠馬、直井 乃々美、保足 晟吾、 前田 花奈、八代 涼花、 2年 富樫 美智雄
------	---

1 はじめに

2022年8月26日に第5回「明海大学・朝日大学共催・2022 英語授業改革セミナー」を開催した。新型コロナウイルス感染防止の観点から、明海大学での対面式と Zoom によるオンライン形式を併用した形での実施となり、全国から小学校、中学校、高校の先生方、教育委員会の方々、大学教員、大学生、教育関係者が230人参加した。

2 実施概要

開講式での明海大学安井利一学長と朝日大学大友克之学長の挨拶に続き、第1部の基調講演では、東京国際大学教授、立教大学名誉教授の松本茂先生から、「どんな力を児童・生徒に身につけてもらいたいのか？」という演題で、コミュニケーションや英語指導で大事なことについて、分かりやすい内容で、多くの示唆に富む講義が行われた。講演後には会場とオンラインの参加者との質疑応答が活発に行われた。

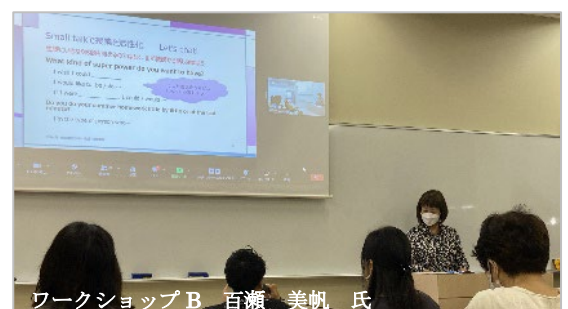


第2部では2つの時間帯（13:00～14:15、14:30～15:45）にそれぞれ4つのワークショップが行われた。ワークショップAでは朝日大学経営学部・英語教育センター亀谷みゆき教授と同センター児玉靖明准教授が、主に高校教員を対象として「困って

いませんか？観点別評価 — 明日から使える評価手法の abc — というテーマでティーム・ティーチングの手法をとりながら、講義及びワークショップを行った。



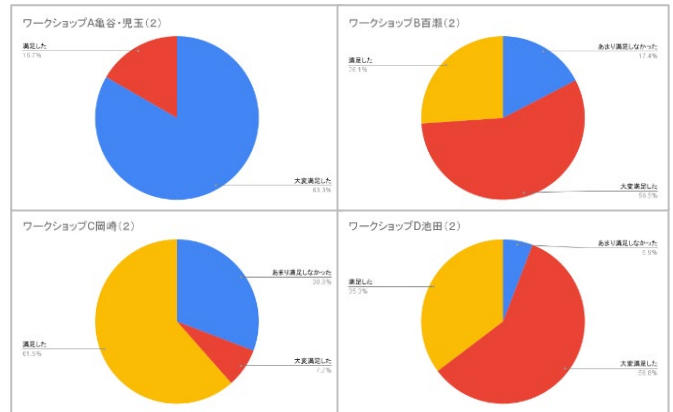
Bでは明海大学教職課程センターの百瀬美帆教授が中高教員を対象に「中高授業における『ラジオ英語講座』活用法」について、Cでは熊本大学教育学部岡崎伸一准教授が中学校教員を対象に「小中接続のリタラシー指導」について、Dでは愛知県立大学外国語学部池田周教授が小学校教員を対象に「小学校「外国語」の指導と評価—教科化3年目の今こそアップデート！」について、それぞれワークショップを行った。全てのワークショップにおいて、講師がファシリテーターとなり、受講者同士がグループワークで意見交換を行いながら、授業を活性化させる指導法や評価について学びを深めることができた。





です。中学生には、まずシャドーイングよりリピーティング。実際にやってみて納得です」のような、講演内容を高く評価するフィードバックが多かった。

各ワークショップについては、2回目の実施についてのアンケート結果を示す。



3 サポート学生の役割



すべての配信、記録、各会場での感染防止対策業務は、明海大学外国語学部英米語学科の教職履修学生が担当した。

各ワークショップへの感想はほぼ肯定的な内容であった。例えばワークショップ A 受講者からは次のようなコメントがあった。

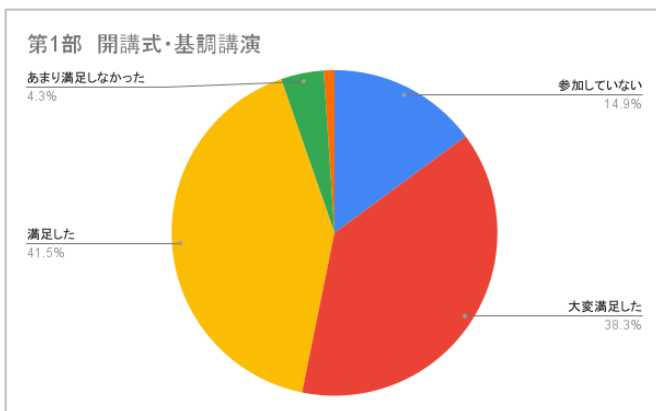
「実践的でわかりやすく、これから他の先生方と共有していきたいと思います。疑問や不安であったことがはっきりした感覚で、今後またこうした内容でぜひワークショップを実施していただきたいと思います。」

本セミナーの目的は、学校現場において教員が、児童・生徒のコミュニケーション能力を育成する授業を実践するための支援であるので、こうしたフィードバックが得られたことが最大の成果であると言える。

参加した学生にとっては、対外的な行事の運営等に係ることで、今後の社会人としての実務訓練に資することができた。また各学校種に指導的な立場にいる講師から指導法を学ぶことができた。

4 成果と課題

(1) 事後アンケート結果



配信トラブルにより開始時刻が大幅に遅れるというアクシデントがあったにもかかわらず、第1部全体の感想として「大変満足した」と「満足した」を合算すると79.8%の肯定的評価が得られた。

基調講演に対して、「大変貴重な講演ありがとうございました。家に帰りニュースのアナウンサーに続けてシャドーイングしてみたのですが、難しかった

(2) 課題

オンライン参加者数の増加に伴い、地域による夏休み終了時期の違いに配慮した実施日を検討する必要がある。また、オンライン形式での実施を含む場合には、安定した配信を提供できるよう十分な計画を立てる必要がある、今回のように予測不可能な配信不良が生じた場合の対処についても検討する必要がある。

14. 文部科学省委託 令和4年度明海大学との連携による専門人材育成・確保事業 — MEIKAI-JOE プラス 2022 小学校外国語科等講座 —

1 概要

令和2年度、令和3年度に引き続き、明海大学が文部科学省の委託を受けて小学校外国語活動・外国語科に関する講座を行った。令和2年度は、本学と教育連携に係る協定を締結し様々な取組を実施している東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、令和3年度からは、福島県いわき市教育委員会と新潟県妙高市教育委員会が連携教育委員会に加わった。そして、令和4年度には、新たに参加希望のあった東京都狛江市教育委員会が連携することとなった。なお、配信動画を視聴するだけのオブザーバー・ボランティアとして、東京都神津島村教育委員会、茨城県土浦市教育委員会、佐賀県伊万里市教育委員会も参加した。

令和3年度までは、小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）や小学校英語教育学会愛知支部理事の協力を得て実施してきた。令和4年度は、これらに加えて、公益財団法人日本英語検定協会の協力を得て実施した。

施となったことから、小学校における外国語科等の内容を中学校の英語教育に円滑に移行していくことが大切である。このことを踏まえて、中学校の英語科教員も受講対象に加えることとした。



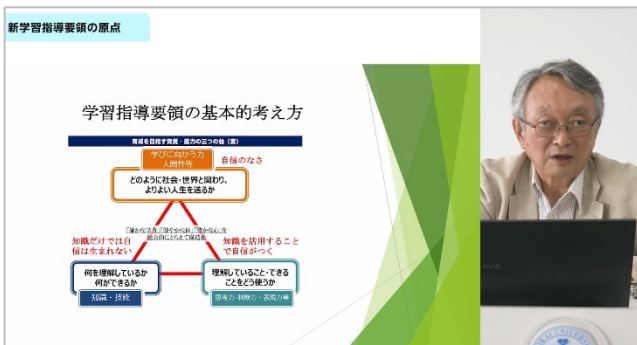
4 主な講座内容

令和2年度において、本学が実施した講座は、本学との連携協定を締結している教育委員会管下の小学校指導訪問等で課題として捉えたことを中心に構成して、予め、講座のテーマを定めて実施した。しかしながら、講座参加者の多くが、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の各領域の具体的な活動事例の研修や、実際の授業映像を活用した講座（実際の授業実演に対する協議・指導・講評）による研修を望んでいることが判明した。

また、令和3年度に実施した本委託事業においても、こうした



講座の受講希望の声は大きく、令和3年度に引き続き、令和4年度においても、受講者が「明日の授業」にすぐに生かせる、いわゆる hands-on 研修としての位置づけで講座内容を構成した。

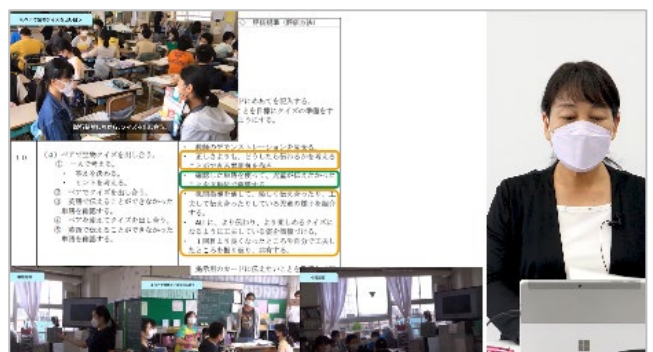


2 目的

小学校外国語活動・外国語科が導入された新学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築するため、令和2年度と令和3年度と同様に、明海大学「小学校外国語科等講座」（通称：MEIKAI-JOE プラス・2022）を開発・実施した。

3 受講対象者

連携教育委員会の公立小学校等の教員等とした。特に令和3年度からは中学校の学習指導要領の全面実



【講座日程等】

講座回	日時	テーマ	講師
1回	5/24(火) 15:20-16:20	新学習指導要領の原点 【講義型】	英検協会会長・上智大学名誉教授 吉田 研作
2回	6/28(火) 15:20-16:20	ティーム・ティーチング 【ワークショップ型】	明海大学教授 百瀬 美帆 明海大学教授 米村 珠子 明海大学教授 Patrizia Hayashi 明海大学准教授 Tyson Rode
3回	7/28(木) 13:30-14:40	聞くこと・話すこと 【講義・演習型】	J-SHINE 理事 育英短期大学非常勤講師 井熊 ひとみ
4回	7/28(木) 14:50-16:00	読むこと・書くこと 【講義・演習型】	小学校英語教育学会愛知支部理事 愛知県立大学教授 池田 周
5回	8/1(月) 9:30-10:40	言語活動の効果を高めるための工夫 ～インタラクションの働きと評価の考え方～ 【講義・協議型】	明海大学教授 金子 義隆
6回	8/1(月) 10:50-12:00	学校段階間の接続の重要性 【講義・協議型】	明海大学教授 坂本 純一 明海大学教授 石鍋 浩
7回	8/2(火) 9:30-10:40	ティーム・ティーチング 【授業研究①】浦安市	明海大学教授 百瀬 美帆 明海大学教授 米村 珠子 明海大学教授 Patrizia Hayashi 明海大学准教授 Tyson Rode
8回	8/2(火) 10:50-12:00	読むこと・書くこと 【授業研究②】足立区	小学校英語教育学会愛知支部理事 愛知県立大学教授 池田 周
9回	9/22(木) 15:20-16:20	聞くこと・話すこと 【授業研究③】いわき市	J-SHINE 理事 育英短期大学非常勤講師 井熊 ひとみ
10回	10/25(火) 15:20-16:20	ティーム・ティーチング 【授業研究④】横手市	明海大学教授 百瀬 美帆 明海大学教授 米村 珠子 明海大学教授 Patrizia Hayashi 明海大学准教授 Tyson Rode
11回	11/14(月) 15:20-16:20	聞くこと・話すこと 【授業研究⑤】妙高市	J-SHINE 理事 育英短期大学非常勤講師 井熊 ひとみ
12回	12/13(火) 15:20-16:20	学校段階間の接続の重要性 【授業研究⑥】狛江市	明海大学教授 坂本 純一 明海大学教授 石鍋 浩

【Zoomによる小学校英語なんでも相談交流室】

今年度の委託事業から、新たに追加した自由参加の相談・交流コーナーである。実施回数は全3回。7月26日(火)、10月14日(金)、12月2日(金)いずれも15:20～16:20に開催した。指導者は、上智大学言語教育センター長・教授(J-SHINE専務理事)藤田保先生にお願いした。

15. 2022 年度教職課程・地域学校教育センター (METTS) の歩み

報告：外国語学部 教授 教職課程センター副センター長 大池 公紀

1 2022 年度の活動について

METTS では、新たに米村珠子教授(前東京都立国際高等学校統括校長)、山本聖志教授(前東京都豊島区立明豊中学校校長)を迎え 9 人体制となった。

「全てがコロナに集約される一年であった」と記してきた 2 年間であったが、22 年度は「対面」「ハイブリット」の文字を多く見かけるようになった一年であった。教育実習の実施時期を一例とした場合、前期・後期では 2020 年は 1 人・28 人(計 29 人)、21 年は 21 人・8 人(計 29 人)、22 年 31 人・3 人(計 34 人)、のように従来のに戻ってきた。Zoom を活用しオンラインで実施をする事案も見られるが、多くは「対面」となり、ほぼ以前と同じ教育活動が実施できるようになった。また 1 月「中学校高等学校訪問研修」2 月「教職学生海外研修(豪州ウーロンゴン大学)」3 月「勉強合宿」等、「休眠状態」から復活した事業もある。「全く以前と同様」とはいかないが、ICT や DX など新たな教育の時代を迎えている気がする。

本年度の新たな取組として、10 月に現職の教員として活躍している卒業生 6 人を招き「教職座談会『教師の魅力』」を開催した。これは、METTS 設立の主旨のもと地道に教員養成を実践してきた結果、現場に人的資源を提供できる組織になったことを示している。今後は、明海 METTS を巣立った教員たちの相互のネットワークを活かしながら現役の教職課程履修学生を外からも支えられるような体制を確立していきたい。

2022 年 12 月、中教審は教員採用に関わる制度改革の方向性を示した。翌 1 月には東京都が 23 年度(24 年採用)からの採用選考実施内容を大きく変更する旨を発表。横浜市や相模原市等も改革の方針を打ち出し、今後他県も追随すると思われ、23 年度は教員採用試験の大きな転換点となる。METTS もこれらを受け教員養成の在り方に真摯に検討を重ねながら、今後も教育に関わる様々な課題を克服

し教員養成の実践を重ね、区市町村、教育委員会及び小中高等学校との連携も更に深めていければと願っている。

2 2022 年度教職課程履修者数

(2022 年 5 月 1 日現在)

	日本語	英米語	中国語	合計(昨年)
1 年次	30	21	※	51 (71)
2 年次	19	43	1	63 (43)
3 年次	16	27	2	45 (35)
4 年次	17	16	1	34 (29)
科目等履修	0	0	0	0 (1)
合計 (昨年)	82 (70)	107 (103)	4 (6)	193 (179)

過去 6 年間の教職履修学生数の推移は、2017 年 128 人、18 年 127 人、19 年 144 人、20 年 151 人、21 年 179 人、22 年 193 人で、履修学生数はこの間 1.5 倍となり着実に増加している

3 2022 年度公立学校教員採用試験合格者

22 年 4 月には正規教員 10 人、講師 9 人が新たに教師としての道を歩み始めたことを報告する。

22 年度であるが、教員採用試験受験者延 28 人(現 19 卒 9)、1 次試験合格者 17 (11・6)、2 次合格者 12 (7・5)。本学規模の他大学と比較しても継続的に 10 人余の合格者を出すこの数字は評価を受けるに十分な数だと確信をしている。

千葉県	中高英語 5 (英米語学科 3、卒業生 2)
	特別支援 1 (英米語学科 1)
東京都	中高英語 5 (英米語学科 3、卒業生 2)
群馬県	中高英語 1 (英米語学科 1)

4 教職課程センター事業

4月 1 年生教職ガイダンス、第 3 回教員採用全国模擬試験

2022 年ちば! 教職たまごプロジェクト開始

5月 教員採用試験対策(教職教養・論文・面接)講座開始

教育実習開始(前期 31 後期 3)

玉川大学連携小学校教員養成特別プログラム
開始

- 6月** 教育実習錬成授業参観集中期
- 7月** 教員採用試験受験者壮行会
教員採用試験受験（現卒 28 人受験）
- 8月** 各都県教員採用 2 次対策面接講座
教員採用 2 次実技試験講座（英語）
- 10月** 教員採用試験 2 次発表（現卒 12 人合格）
教職座談会「教師の魅力」（卒業生 6 人）
3 年対象教員採用試験ガイダンス
- 11月** 3 年対象教員採用スタート模擬試験
2023 年ちば！教職たまごプロジェクト募集
- 12月** 東京都教育委員会教員採用選考説明会
千葉県教育委員会教員採用選考説明会
2 年教職ガイダンス（教育実習校開拓）
- 1月** 玉川大学連携小学校教員免許取得説明会／校
内選考実施
2 年中学校訪問授業研修（豊島区明豊中学）
3 年高校訪問授業研修（都立千早高校）
教育ボランティア活動報告会
第 1 回教員採用全国模擬試験
教員採用試験合格体験発表会
- 2月** 教職海外研修（豪州 ウーロンゴン大学）
- 3月** 新 4 年生対象教職勉強合宿（前期・後期）
教員免許状交付式
第 2 回教員採用全国模擬試験
新年度各学年教職ガイダンス
釧持特任教授「板書指導の在り方」講座
2022 教職課程センター研究紀要刊行

5 地域学校教育センター事業

- 4月** 都立飛鳥・南葛飾高校日本語教育支援開始
足立区連携事業第 1 回連携協議会
- 5月** 連携高等学校 6 校第 1 回連携協議会
足立区民対象初級英会話講座（前期）開始
連携高等学校交流会「大学生と話そう会」
足立区中学校英語授業改善支援開始
文部科学省委託小学校外国語のための認定講
習実施事業（MEIKAI-JOE）開始
- 6月** 浦安市青少年自立学習支援未来塾開始
浦安市教育委員会第 1 回連携協議会
足立区日本語指導第 1 回研修会（小学校）

足立区英語アドバイザー育成研修会開始
明海大学あけみ英語村 2022（区立舎人小）
浦安市学習支援事業ドラフトゼミ開始

- 7月** 都立田柄高校留学生交流会
- 8月** 足立区英語教員対象研修会 1
明海大学・朝日大学共催「2022 英語授業改革
セミナー」開催
- 9月** 都立葛西南高校校内寺子屋開始
足立区中学校留学生交流会（区立新田中）
明海大学 SDGs 入学選抜プログラム開始
- 10月** 明海大学あけみ英語村 2022（区立栗原小）
足立区民対象初級英会話講座（後期）開始
浦安市小学校教育ボランティア開始
足立区中学校留学生交流会（区立第十中）
都立南葛飾高校日本語指導研修会
- 11月** 足立区連携事業第 2 回連携協議会
連携高等学校交流会「大学生と話そう会」
足立区英語マスター講座修了者英語成果発表
会（スピーチプレゼンコンテスト）
- 12月** 連携高等学校 6 校第 2 回連携協議会
都立飛鳥高校日本語指導研修会
足立区日本語指導第 2 回研修会（小学校）
足立区中学校留学生交流会（区立扇中）
足立区中学校留学生交流会（区立第五中）
うらやすこどもクエスト事業（英語講座）
- 1月** 足立区英語教員対象研修会 2
足立区連携事業第 3 回連携協議会（安井学
長・近藤区長臨席 Zoom 開催）
- 2月** 2023 明海大学「大学と地域連携の未来」シン
ポジウム
秋田県横手市包括連携事業事務局会議
都立田柄高校日本語指導研修会
- 3月** 連携高等学校 6 校第 3 回連携協議会
浦安市教育委員会第 2 回連携協議会
文部科学省委託事業（MEIKAI-JOE）成果報
告書提出

16. 2022年度 METTS NEWSLETTER 第1号から第10号 ※表面のみ

第1号 (2022年4月18日)

第2号 (2022年5月23日)

2022年4月18日 (第1号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 2022年度 教諭・講師採用実績

厳しい採用試験を突破し2022年4月から教職に従事する卒業生は正規教員10人、講師9人となりました。今年度は高校正規教員に5人採用されたことが特報です。

正規教員 (公・私立)

佐藤里奈さん	(日本語専) 千葉県立千城台高等学校 (国語)
奥山未彩さん	(日本語専) 東京都立秋葉台高等学校 (国語)
江川有紗さん	(英米語専) 千葉県立山北高等学校 (英語)
嶋田宗暲さん	(英米語専) 千葉県立千葉西高等学校 (英語)
奥野白葉さん	(英米語専) 千葉県成田市立下総みどり学園 (英語)
錦崎由佳さん	(英米語専) 千葉県市原市立蓮津中学校 (英語)
高橋勇気さん	(英米語専) 東京都江東区立有明中学校 (英語)
藤田航嗣さん	(英米語専) 東京都墨田区立本所中学校 (英語)
藤田祐也さん	(英米語専) 東京都江戸川区立立江第二中学校 (英語)
山崎紗緒里さん	(英米語専) 敬愛大学八日市市場高等学校 (英語)



奥山未彩さん

講師 (公・私立)

伊藤和良さん	(日本語専) 船橋市立船橋高等学校 (国語)
山崎伸弥さん	(英米語専) 千葉県千葉市立中中学校 (英語)
遠田明日香さん	(英米語専) 千葉県鎌ヶ谷市立豊里小学校 (全科)
駒沢美里さん	(英米語専) 千葉県茂原市立二宮小学校 (全科)
内藤 卓さん	(英米語専) 東京都墨田区立蓮田中学校 (英語)
中村亮介さん	(英米語専) 茨城県石岡市立石岡中学校 (英語)
鎌倉紗希さん	(英米語専) 千葉県市川市立小池中学校 (英語)
矢吹聡介さん	(英米語専) 福岡県いわき市立玉川中学校 (英語)
他 1名	(英米語専) 千葉県浦安市立南小学校 (英語)



奥山航嗣さん

諦められなかった教職への道 佐藤里奈さん

佐藤さんは卒業後すぐに大生生命保険会社に就職しましたが、高校教職への道を諦めきれずに会社を辞め、講師として千葉県東津田市の中学校で講師として1年半働いた後、千葉県教職採用試験に合格して今年度より千葉県立千城台高校国際科正規教員として勤め始めました。以下は佐藤さんのメッセージです。

「専を捨てたけれど企業を辞めて教員になる、と決意した時に教職課程センターの先生方に連絡したところ温かく応援してくださいました。卒業後にも関わらず、面接対策や試験対策など多くの時間を割いてくださり試験に自信を持って挑むことができました。この大学に入っていなければ、今の私はないと思います。感謝しかありません」



第3号 (2022年6月27日)

2022年6月27日 (第3号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集: 「大学生と話す会」大成功!

5月29日、オープンキャンパス同日、「大学生と話す会2022」第1回が開催されました。このイベントは、明治大学と連携高校との関係をより強固にするために、高校生が直接大学生や留学生と交流することで明治大学での勉強や学生生活について理解を深めることを目的として、地域学校教育センターの主催で、2018年度から実施しているものです。

今回は、都立原林高校、都立竹谷高校、都立山崎高校、都立西西南高校、県立浦安高校の5校から1,2年生73人が参加し、そのうち47人は様々な国や地域の背景をもつ在留外国人生徒の参加者でした。

高校生たちは、午前中に大学紹介やオープンキャンパスの学科体験、意見コーナー展示などを見学した後、昼食は学生食堂マリンズで学食体験をしました。午後には30周年記念館スチューデントホールでの交流会に参加しました。安井副学長と参加した連携校代表の職員、高校東津田副校長先生からの挨拶の後、教職課程を履修している学生11人及び本学外国人留学生13人と高校生が26グループに分かれて、高校生から大学生に質問したり、地域規模の課題についてディスカッションを行いました。



2022年度足立区民対象「アフターコロナの海外旅行を応援!海外で役立つ初級英会話講座」

5月22日、足立区との連携協定(2017年1月締結)に基づき実施されている、2022年度の足立区民対象英会話講座第1クール(春季)が足立区役所で開催されました。「アフターコロナ時代の海外旅行を応援!海外で役立つ初級英会話講座」をテーマに、5月22日から全5回で講座を実施します。講師は、教職課程センター・地域学校教育センターの自兼英会話教員と多言語コミュニケーションセンターのバトリファ・ハヤシ教授とタイソン・ロード下准教授です。講座に集まった20人の足立区民の参加者に対して、「At the hotel」という場面設定で、ホテルのシチュエーション(フロント係)との英会話のやり取りの例を示し、皆さんが楽しく活動に参加しました。

受講者からは、「NHKのラジオ講座を担当している百瀬英帆先生の講座と聞いて参加した。バトリファ・ハヤシ先生とタイソン・ロード先生の皆さんの楽しませる活動に感謝したい。孫がこの4月、明治大学の書学部に入学した。明治大学の講座と聞いて喜んで参加した」などの声が聞かれました。



第4号 (2022年7月25日)

2022年7月25日 (第4号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 2023年度採用 教員採用試験に挑む!

7月10日(日)より千葉県、東京都、埼玉県等を皮切りに、来年度に向けた教員採用試験(一次)が実施され、本学からも多数の学生が受験しました。教職課程センターでは、離隔突破に向けて取り組んでいるすべての受験生の合格を心から祈念するとともに、今後行われる二次試験に向けて全力を挙げて支援していきます。

- 「教職試験は、ほぼ「いせい」だと思います」
- 「面接は、事前の練習の成果もありうまくいきました」
- 「(集団討論で)「何を立てずにどう行う」という指示を守らない受験生がいて驚きました。討論全体の流れの軌道修正を迫るのに苦労しました」
- 「専門科目は問題の難しさが、量が多くなりました。もっと急に試験対策をしておくべきだと反省しました」

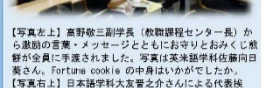
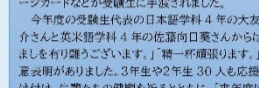
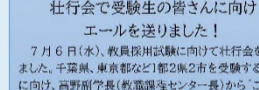
試験の様子を報告してきた4年生の皆さんの感想です。どの人も、無事一次試験を乗り越えることができたという安堵の表情に満ちていました。今年、4年生(現役)で千葉県を受験した人は10人、東京都が6人、他の自治体(群馬県・川崎市・名古屋市)3人で、計19人が離隔に挑戦しました。また、既に現場で講師として勤務しており、二次試験から受験する卒業生も含めると、実に30人の明治大学が来年度教職に立つことを目指して頑張っています。METTSでは引き続き、二次試験に向け全力でサポートをしてまいります。



社行会で受験生の皆さん向けエールを送りました!

7月6日(水)、教員採用試験に向けて社行会を行いました。千葉県、東京都など2都2県を受験する学生に向け、高野副学長(教職課程センター長)からこれまで頑張った力があつた大丈夫!と力強い励ましの言葉とともにお守りとおみくじ頒布。一人ひとりに向けたメッセージカードなどが受験生に手渡されました。今年度の受験生代表の日本語学科4年の大友貴之介さんと英米語学科4年の佐藤日向さんからは、「励ましを有り難うございます。」「精一杯頑張ります。」「と決意表明がありました。3年生や2年生30人も応援に駆け付け、先輩たちの健闘を祈るとともに、「来年度はいよいよ自分たちの番!」との自覚を深めていました。

【写真上】高野副学長(教職課程センター長)から激励の言葉、メッセージとともにお守りとおみくじ頒布が全員に手渡されました。写真は英米語学科佐藤日向さん。Fortune cookieの中身はいいかでしたか。【写真中】日本語学科大友貴之介さんによる代表挨拶。少し緊張感を感じましたが、立派な卒業生でした。【写真下】2・3年生が応援に駆け付けてくれました。



2022年9月26日 (第5号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 教員採用試験 一次試験 17人合格！
二次試験対策も万全に

〇令和4年度教員採用試験 (令和5年度採用) 一次試験合格者数速報！

今年度の教員採用試験は、外国語学部日本語学科及び英米語学科の4年生19人と卒業生9人が受験し、17人が一次試験に合格しました。都県別の一、二次試験合格者数は下表のとおりです。

受験地	校種・教科	受験者数	現役生合格者数	卒業生合格者数	合格者数計
千葉県	中高・国語	3	1	-	1
	中高・英語	11	5	3	8
東京都	中高・国語	1	0	-	0
	中高・英語	7	4	2	6
埼玉県	中学・英語	1	-	1	1
群馬県	中学・英語	1	1	-	1
茨城県	中学・英語	1	-	0	0
川崎市	中高・国語	1	0	-	0
新潟県	中高・英語	1	-	0	0
名古屋府	高校・国語	1	0	-	0
合計		28	11	6	17



上：授業中の様子 下：面接対策の練習

これまで教職課程センターでは、一次試験対策として教職教養・一般教養問題ビデオ講義を始め、専門教科講義や模擬集団面接・集団討論など地域に応じた対策講義を実施してきました。



模擬面接の練習

二次試験対策では、各地区の試験に応じて日本語での個人面接や集団面接、集団討論、模擬授業に向けて、本音さながらの面接や模擬授業の練習を行いました。実技試験である英語リスニングテスト (東京都) や英語による面接 (千葉県、東京都)、模擬授業 (千葉県) 対策では、MLACCからPatrizia Hayashi 教授と Tyson Rode 准教授の多大なる協力のおかげで、試験直前まで受験者一人ひとりに応じたきめ細やかな練習を行うことができました。

＜試験後の学生の感想から＞

- 〇大学で手厚く指導してくださったので、教室に入る前までは緊張していましたが、教室に入ってしまうあとはほっとできると思えました。
- 〇集中力を切らさずに、最後まで取り組めたのでやりきることができたと思います。
- 〇予定したところまで模擬授業が進められなかったり個人面接ではもっとこう話せばよかったところもありますが、沢山練習してきてからこそ緊張したのと思っていた状況と違って自分もがやっていたことが出せたのだと思います。一次試験から約2か月間、こんなに速く毎日大学に通った身体は初めてでした。皆さんも遅寝早起きで毎日練習に付き合ってくれたら、本当にありがとうございました。
- 〇 (英語対策は) 想定外のアプリティッシュ・イングリッシュで話されて驚いたと感じましたが、練習を積み重ねたおかげで、頑張ってきた成果を出せました。

2022年10月24日 (第6号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

合格おめでとう！教員採用試験 (二次合格最終) 結果速報

10月に入り2023年度教員採用試験結果が都道府県ごとに発表されました。6日に発表された千葉県の合格者は中高英語で英米語学科4年生君塚翔伝さん、佐藤向日葵さん、卒業生の山崎早希さんの3人、特別支援で英米語学科4年生小林悠太さん、小学校科で卒業生の吉原千華さん、駒沢美里さんの計6人でした。7日には群馬県中学校英語に英米語学科4年生の武藤美優さんが合格しました。14日には東京都中高英語で英米語学科4年生の鈴木歩さん、関野玲佳さん、橋本ありきさん、卒業生の小野勝春さん、内藤卓さんの計5人が合格しました。合格者の喜びの声を伝えます。なお、10月末に福島県の教員採用試験の二次合格 (最終) が発表され、今年度の合格者数が確定します。

佐藤向日葵さん (千葉県・中高校英語)

二次試験対策をMETTSの先生方が親身に指導してくださったので、当日に自身のベストが出せたと思っています。学校現場でも自分の良さが出るように努力していきたいと思っています。ご指導ありがとうございました。



橋本美優さん (群馬県・中学英語)

私は教育実習後に教員になりたいという気持ちが強くなり、地元で合格できた喜びを強く実感しています。ご指導いただいた先生方には本当に感謝しています。



関野玲佳さん (東京都・中高校英語)

1次、2次試験共にMETTSの先生方の手厚いサポートを受け合格する事ができました。残り半年の大学生活を教師になるという自覚を持ってこれて以上に勉強力を入れていきたいです。



東京都・千葉県・群馬県合格者数一覧

受験地	中高英語		小学校科		特別支援	計
	現役	既卒	現役	既卒		
東京都	3人	2人				5人
千葉県	2人	1人	2人	1人	1人	6人
群馬県	1人					1人
						計 12人

教職座談会「教師の魅力」を開催

10月10日、現職の教師として活躍している卒業生を招き「教師の魅力」を伝えていただく座談会を開催しました。右写真左から、大塚純加先生 (江東区立第二島中学校英語科)、小関聖翔先生 (千葉市立貝塚中学校英語科)、佐藤里奈先生 (千葉県立千城高校国語科)、池田義友先生 (足立区立第五中学校英語科)、江川有紗先生 (千葉県立流山北高校英語科)、船田宗晋先生 (千葉県立千葉西高校英語科) の6人の先生方が自分の思いや経験を後輩たちに伝えるため、忙しい中を駆けつけてくださいました。勤務5年目で3年生のクラス担任を務めている大塚先生は学校行事の写真等を示しながら、「早起きが辛くて仕事に行きたくない気持ちの時もあるが、生徒に会えば「やっぱり来てよかった」と励まされることもある」と話してくれました。参加した教職課程2年生、3年生のアンケートには、「教師になる気持ちが強くなった」や「このような機会があれば参加したい」との感想が見られました。来年度も同様の会を開催する予定です。



2022年11月21日 (第7号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 教員採用試験合格者の声等 METTS 事業報告

前月号では、教員採用試験合格者12人うちの3人の声をお伝えしましたが、今月号では、ほかの合格者たちの声をお伝えします。

千葉県教員採用試験合格者

君塚翔伝さん (中高英語)

METTSの先生方が徹底的に指導してくださったお陰で、緊張せずに試験に臨むことができました。本当にありがとうございました。立派な教員になれるように精進していきます。



小林悠太さん (特別支援)

長期に渡り私たちをサポートしていただいたため、当日もそれほど緊張することなく試験に臨むことができました。これから来年の4月に向けて、勉強していきたいと思っています。



駒沢美里さん (卒業生：小学校)

卒業してから面接や模擬授業などの対策をしていただき本当に感謝しております。本音は緊張せず臨むことができました。合格という報告ができ非常に嬉しいです。



山崎早希さん (卒業生：中高英語)

卒業後もMETTSの先生方に温かく根気強く背中を押していただいたのでなんとか合格できました。卒業後もこんなに面倒見てくれる大学には他に無いと心から感じました。本当に感謝しております。



東京都教員採用試験合格者

鈴木歩さん (中高英語)

METTSの先生方の手厚いサポートのおかげで合格することができました。これからは小学生の時から夢に見ていた英語の先生として新たなスタートを切りたいと思います。



橋本ありきさん (中高英語)

METTSの先生方の熱心な御指導をサポートと、一緒に採用試験に向けて頑張ってきた仲間たちのおかげで合格することができました。4月に向けて頑張りさせていただきます。



内藤卓さん (卒業生：中高英語)

METTSの先生方からの厳しくも暖のあるご指導を受け、良い結果を残すことができました。今後一歩の教師として、子供たちに寄り添った指導を行えるよう努めます。



小野勝春さん (卒業生：中高英語)

諦めないで本当に良かったと思っています。周りで応援してくれた家族、友人、指導してくださったMETTSの先生方の支えあっての賜物です。ありがとうございました。



その他卒業生からも感謝の言葉をいただいています。

都立南葛師範高校日本語指導研修会

10月19日、教育連携協定に基づき、東京都立南葛師範高等学校の日本語指導研修会において、本学の田川麻央講師が指導を行いました。当日は、20人の先生方を対象に「JSL 学生および留学生への大学での日本語学習支援」をテーマとして、①外国にルーツのある大学生に対する各授業での支援方法、②単位取得のための支援方法、③留学学習支援、④異文化理解の1点について、本学での取組を紹介しました。これは、南葛師範高校の在学外国人生徒への日本語指導を深めるに当たり、大学での日本語指導を参考にしたいという要望に応じたものでした。参加した先生方からは「学生を自立した学習者にするための取組が参考になった」などの声がありました。



2022年12月23日 (第8号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集：現場の先生方を支える日本語指導教員研修

12月9日、昇立区との教育連携に基づく「明海大学連携事業」小学校教員向け外国人等児童の日本語指導研修会が、昇立区梅田地域学習センターで開催され、区内の小学校から3人の先生方と、「あだち日本語学習ルーム」から2人のスタッフの参加がありました。講師は、外国語学部日本語学科主任・木山三佳教授が務めました。昨年度から全4回のシリーズを年2回ずつに分けて実施し、今回は最終回の第4回目となりました。第3回に続き対面で開催することができました。

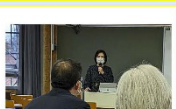
テーマは、「日本語母語児童と協働する多文化の教室」とし、異文化コミュニケーションの難しさ、非言語コミュニケーションの種別と非言語コミュニケーションを成功させるポイント、文化による価値観の違い、多文化の教室をより良い教室にするための方策などについて、さまざまな学説と豊富な具体例を基に解説しました。参加者からは、「4回シリーズの全部に参加した。今まで学校担任をする中で経験として理解していたことが、この研修で「層理解が深まった」「外国人の児童に加えて保護者との対応の留意点がよく分かった」などの感想がありました。



飛鳥高校での日本語指導研修会

12月6日、教育連携協定に基づき、東京都立飛鳥高等学校の日本語指導研修会において、本学外国語学部日本語学科の田川麻央講師が指導を行いました。当日は、20人の先生方を対象に「外国にルーツのある学生と大学における日本語指導」をテーマとして、外国にルーツのある大学生に対する各授業での支援方法や単位取得のための支援方法について、本学での取組を紹介しました。また、飛鳥高校で行っている日本語学習支援の状況や本学の学生の成長についての情報提供を行いました。

研修の後、参加した先生方からは「生徒のモチベーションを高め、授業以外でも自発的に日本語を学習するような仕組みをすることが必要であり、検定取得やそれに向けた対策講座等を授業外でやってくれることもその一つであることが分かった」などの感想がありました。前号 (第7号) で取り上げた東京都立南葛師範高校での日本語指導研修会を既に今年度実施しており、来年2月には東京都立南葛師範高校での日本語指導研修会も予定しております。今後も、METTSでは日本語学科と協働しながら現場の教員のニーズに応じた支援を企画して提供していきます。



2023年1月23日 (第9号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 3年生向け教員採用試験対策本格化

教職課程を履修している3年生を対象とした教員採用試験説明会が2日連続で開催されました。2022年12月21日には、東京都教育庁人事師範考課の羽田和生課長代理から東京都の教員になることの魅力、教員の働き方改革、研修制度、教員採用試験のあらましなどについての説明がありました。翌12月22日には、千葉県教育庁教職課教員課の西宮大輔管理主事から、教師になることの魅力、千葉県の求める教員像、研修制度、働き方改革などの説明や、千葉県教員採用試験のあらましなどについての説明がありました。東京都説明会に参加した学生からは、「自分で調べても得られなかった情報を貴重な体験談を聞くことができ、とても勉強になった」「誰一人残さず、すべての子供が将来への希望をもって自ら学び、育む教育、という考え方に感銘を受けた」などの感想が寄せられました。千葉県説明会に参加した学生からは、「人の成長に携わりながら自分も成長できるという教師の魅力が分かった」「学校でも働き方改革が進んでいることが分かった。」「集団面接の討論では、協調性が大事であることが分かった」などの感想が寄せられました。

千葉県 西宮管理主事




東京都 羽田課長代理



教職実践演習特別講座実施

12月12日に教職課程4年生34人を対象とする教職実践演習第12回の授業において、外部講師をお招きした特別講座を実施しました。講師は東京都港区立白金小学校校長の吉野達雄先生でした。吉野校長には、創立147周年を記念した白金小学校での学年担任や生徒指導の取組についての紹介や、教員に求められる資質・能力に変わる講義・演習を行っていただきました。また、白金小学校の5年生出陣の花井先生と小野澤先生にもご参加いただき、ICTを活用した副会合ゴールを見据えた指導について実践報告していただきました。学生からは、「講義・演習を通して、教員だけでなく社会人に求められる様々な資質や能力について考えることができた。などの声が聞かれ、教職について、より学びを深めることができる授業になりました。」


吉野達雄校長



うらやすこどもクエスト

12月26日、本学体育館にて、浦安市と本学の包括連携協定に基づき、子どもたちの知的好奇心を広い視野を育むことを目的とした、うらやすこどもクエストが3年ぶりに開催されました。本事業は浦安市が市内の3つの大学の協力の下、開催しているものです。今回は浦安市内の公立小学校の児童11人が参加し、「外国の習俗や文化を身近に感じませんか？」の学習テーマのもと、教職課程センターの百瀬美帆教授、多言語コミュニケーションセンターのPatrizia Hayashi教授とTyson Rode 准教授が指導に当たり、12人の教職課程履修学生がサポートを行いました。子どもたちは、簡単な英語を使いながら、「スーパーカーレース」や「インタビュースト」などのコミュニケーション活動を大学生とともに楽しく行い、活動後には学生の案内で大学見学をしました。

右写真は活動の様子



2023年2月24日 (第10号)

METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 「大学と地域連携の未来」シンポジウム開催

アフターコロナを見据えた大学教育と地域連携
～地域連携の現状を踏まえたICTの可能性～

2月4日(土)、今回で7回目となる、2023 朝海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムが、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催され、来学者を含め約130人が参加しました。開会式では、本学の学生である及川隼之介さんと橋本ありさんが総合司会を務め、安井利一学長、足立区教育委員会大山日出夫教育長、浦安市教育委員会鈴木忠吉教育長から挨拶いただきました。

当日プログラム

12:30 **開会式**
12:40-13:40 **基調講演**
講師：合田 柁雄氏（文化庁次長）
演題：「DX時代の授業づくりについて考える」

13:50-15:20 **学生発表**
グループA 大学生による日本語習得支援
グループB 留学生等による児童・生徒との交流
グループC 大学生による学習支援

15:30-16:30 **パネルディスカッション**
テーマ：「アフターコロナを見据えた地域連携～地域連携の現状を踏まえたICTの可能性～」

16:40 **閉会式**

基調講演では、文化庁次長の合田柁雄氏からGIGAスクール構想で多様化する子どもたちの学びの現状や次代を見据えた学びの転換について、大々示唆に富むお話が伺えました。

地域連携事業についての学生発表では、都立高校や足立区、浦安市などで行われている日本語指導支援や学習支援、本学留学生との交流会などが紹介されました。

パネルディスカッションには、足立区教育委員会指導主事佐藤孝氏、東京都立田柄高等学校山崎聡子氏、本学学生の呉義徳さんと島崎晴希さんが参加し、ICTを活用した今後の地域連携について議論が行われました。

右：オンラインによる基調講演（合田氏）



学生たちが、司会や発表者、パネリストの役割をしっかりと果たし、今年も有意義なシンポジウムを開催することができました。



総合司会の及川さん、橋本さん



グループBの学生発表



パネルディスカッションの様子

<参加者アンケートから>

【基調講演】 これからの教育の在り方がわかりやすく解説されていて勉強になった。（教員）教職を学ぶ者として今後の参考に内容だった。（学生）現状を振り返りつつ今後の展望を考えるとよかった。（教員）

【学生発表】 一人ひとりの積極的な姿勢が大変頼もしかった。（教員）学生が様々な人と関わり幅広く行動していることを知るよい機会になった。（教員委員会）

【パネルディスカッション】 それぞれの立場で具体的に示唆に富んだ話を聞くことができた。（教員委員会）ICT時代に感念されることにあらためて気持ち自分でもどうしていくべきか考えるきっかけとなった。（学生）

17. 2022 年度 METTS 事業参加学生一覧

2022年度METTS事業参加学生一覧

日本語指導支援（飛鳥高等学校）

<全日制課程>

応用言語学研究科博士後期課程3年 林 苗

日本語学科4年 田中 愛唯

日本語学科4年 菊地 竜星

日本語学科4年 平 七海

日本語学科3年 茨田 真愛

<定時制課程>

日本語学科4年 田中 愛唯

日本語学科3年 大橋 瑠織

日本語学科卒業生 永沼 綾乃

日本語指導支援（南葛飾高等学校）

応用言語学研究科博士後期課程3年 林 苗

応用言語学研究科博士前期課程2年 沈 伽迪

応用言語学研究科博士前期課程2年 楊 凱

日本語学科4年 菊地 竜星

日本語学科4年 角田 涼輔

日本語学科4年 浦野 遥風

日本語学科3年 茨田 真愛

日本語学科3年 高橋 紅葉

日本語学科3年 松本 夏保

日本語学科3年 ヴ バオ ゴック

訪問交流会（都立田柄高等学校）

日本語学科4年 ウー イウエイ

日本語学科1年 マ ズイカ

日本語学科1年 レ ティ フェ

英米語学科4年 リュウ ハクブン

英米語学科3年 グェン ティ トウイ ズオン

経済学科2年 パク ジュアン

大学生と話そう会 2022

日本語学科3年 清宮 咲歩

日本語学科3年 滝沢 珠里

日本語学科3年 三森 茉柊

日本語学科2年 岡村 萌果

日本語学科2年 能勢 舞桜

英米語学科3年 上原 二葉

英米語学科3年 内山 瑞貴

英米語学科3年 川元 麻衣

英米語学科3年 桑原 百蘭

英米語学科3年 福川 陽南

英米語学科3年 田中 啓夢

大学生と話そう会 2022（留学生）

日本語学科4年 ウー イウエイ

日本語学科3年 リ ショウイ

日本語学科3年 リョウ イゼン

日本語学科3年 リョウ ユ

経済学科3年 グェン ティ アン

経済学科3年 グェン ティ ヴァン アイン

経済学科3年 グェン キム イエン

経済学科3年 ホアン ヴァン ドック

不動産学科2年 エン コウレイ

HT学科2年 グェン ティ フォン タオ

HT学科2年 コボリ エミ ホイ メイ

HT学科2年 チョン ヴィエット ニヤット

HT学科2年 ファム トウ フェン

HT学科1年 サプコタ ルペス

明海大学あけみ英語村 2022（留学生）

日本語学科2年 トウ ゴウ

日本語学科1年 グェン ティ マイ リー

英米語学科4年 エンリケス カール

英米語学科4年 鈴木 歩

英米語学科4年 橋本 ありさ

英米語学科3年 グェン ティ トウイ ズオン

英米語学科2年 大野 杏里

英米語学科2年 梶原 グロリア

英米語学科2年 高木 由紀

英米語学科2年 中川 なさり

不動産学科2年 エン コウレイ

HT学科2年 グェン ティ フォン タオ

HT学科2年 コボリ エミ ホイ メイ

HT学科2年 チョン ヴィエット ニヤット

HT学科1年 サプコタ ルペス

明海大学あけみ英語村 2022（教職履修生）

英米語学科4年 池上 温哉

英米語学科4年 及川 龍之介

英米語学科4年 加藤 天真
 英米語学科4年 君塚 翔伍
 英米語学科4年 小林 悠太
 英米語学科4年 佐藤 向日葵
 英米語学科4年 佐保 翼
 英米語学科4年 椎葉 晴斗
 英米語学科4年 関野 玲佳
 英米語学科4年 高橋 陽人
 英米語学科4年 高橋 凜
 英米語学科4年 武藤 美優
 英米語学科4年 横田 裕哉
 英米語学科4年 米元 拓光
 英米語学科3年 坪 凌平
 英米語学科3年 磯野 奨
 英米語学科3年 上原 二葉
 英米語学科3年 内山 瑞貴
 英米語学科3年 川元 麻衣
 英米語学科3年 桑原 百蘭
 英米語学科3年 向後 志穂
 英米語学科3年 児島 晴香
 英米語学科3年 小林 優汰
 英米語学科3年 坂脇 海翔
 英米語学科3年 佐久間 陸人
 英米語学科3年 櫻井 栞
 英米語学科3年 佐藤 有志
 英米語学科3年 志垣 悠馬
 英米語学科3年 高橋 昂瑛
 英米語学科3年 手崎 龍之介
 英米語学科3年 直井 乃々美
 英米語学科3年 福岡 拓馬
 英米語学科3年 福川 陽南
 英米語学科3年 保足 晟吾
 英米語学科3年 前田 花奈
 英米語学科3年 村上 光紀
 英米語学科3年 八代 涼花
 英米語学科3年 吉澤 大空
 英米語学科3年 吉田 未来

足立区中学校異文化交流事業（新田中学校）

英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科4年 松井 建人

英米語学科3年 伊藤 千鶴
 英米語学科2年 高木 由紀
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 HT 学科2年 鈴木 恭湖
 HT 学科1年 サプコタ ルペス

足立区中学校異文化交流事業（第十中学校）

英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科4年 松井 建人
 英米語学科2年 大野 杏里
 英米語学科2年 高木 由紀
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 英米語学科2年 中川 なさり
 HT 学科2年 鈴木 恭湖

足立区中学校異文化交流事業（扇中学校）

英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科4年 バト エレデネ バトチュルン
 英米語学科4年 松井 建人
 英米語学科2年 大野 杏里
 英米語学科2年 高木 由紀
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 英米語学科2年 中川 なさり

足立区中学校異文化交流事業（第五中学校）

英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科4年 松井 建人
 英米語学科2年 大野 杏里
 英米語学科2年 高木 由紀
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 英米語学科2年 中川 なさり
 HT 学科1年 サプコタ ルペス

英語マスター講座成果発表会

英米語学科4年 及川 龍之介
 英米語学科4年 加藤 天真
 英米語学科4年 君塚 翔伍
 英米語学科4年 小林 悠太
 英米語学科4年 佐藤 向日葵
 英米語学科4年 高橋 凜

英米語学科4年 武藤 美優
 英米語学科4年 米元 拓海
 英米語学科3年 上原 二葉
 英米語学科3年 内山 瑞貴
 英米語学科3年 川元 麻衣
 英米語学科3年 児島 晴香
 英米語学科3年 小林 優汰
 英米語学科2年 小川 翔太郎
 英米語学科2年 折川 涉
 英米語学科2年 田中 啓夢
 英米語学科2年 安田 結貴
 英米語学科2年 吉澤 亜門
 英米語学科2年 小川 悠真
 英米語学科2年 喜多 功佑
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 英米語学科2年 原山 要祐

校内寺子屋（葛西南高校）

英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科2年 池内 夏美
 英米語学科2年 高木 由紀

浦安市小学校英語支援

英米語学科4年 池上 温哉
 英米語学科4年 及川 龍之介
 英米語学科4年 君塚 翔伍
 英米語学科4年 佐藤 向日葵
 英米語学科4年 佐保 翼
 英米語学科4年 鈴木 歩
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科4年 武藤 美優
 英米語学科4年 横田 裕哉

浦安市未来塾

日本語学科3年 清宮 咲歩
 日本語学科3年 滝沢 珠里
 日本語学科3年 牧 和摩
 英米語学科4年 佐保 翼
 英米語学科4年 高橋 凜
 英米語学科4年 武藤 美優
 英米語学科3年 上原 二葉
 英米語学科3年 内山 瑞貴

英米語学科3年 児島 晴香
 英米語学科3年 手崎 龍之介
 英米語学科3年 渡辺 渚稀
 英米語学科2年 喜多 巧祐
 英米語学科2年 佐藤 百恵
 英米語学科2年 豊島 隼人
 英米語学科2年 布施 名菜
 英米語学科2年 古川 湖菜
 英米語学科2年 安田 結貴

浦安市学習支援「ドラフトゼミ」

日本語学科3年 三森 茉柊
 英米語学科4年 及川 龍之介
 英米語学科3年 上原 二葉
 英米語学科3年 手崎 龍之介
 英米語学科3年 児島 晴香
 英米語学科2年 小川 悠真
 英米語学科2年 舘田 悠輝
 英米語学科2年 富樫 美智雄
 英米語学科2年 仲田 未羽
 英米語学科2年 吉澤 阿門
 英米語学科2年 吉田 優奈

明海大学・朝日大学共催 英語授業改革セミナー

英米語学科4年 及川 龍之介
 英米語学科4年 加藤 天真
 英米語学科4年 小林 悠太
 英米語学科4年 佐藤 向日葵
 英米語学科4年 佐保 翼
 英米語学科4年 橋本 ありさ
 英米語学科3年 上原 二葉
 英米語学科3年 児島 晴香
 英米語学科3年 桑原 百蘭
 英米語学科3年 向後 志穂
 英米語学科3年 佐久間 陸人
 英米語学科3年 志垣 悠馬
 英米語学科3年 直井 乃々美
 英米語学科3年 保足 晟吾
 英米語学科3年 前田 花奈
 英米語学科3年 八代 涼花
 英米語学科2年 富樫 美智雄

足立区民対象生涯学習講座

英米語学科 3年 上原 二葉
英米語学科 3年 川元 麻衣
英米語学科 3年 桑原 百蘭
英米語学科 3年 児島 晴香
英米語学科 3年 小林 優汰
英米語学科 3年 佐藤 有志
英米語学科 3年 直井 乃々美
英米語学科 3年 八代 涼花
英米語学科 2年 小川 翔太郎
英米語学科 2年 折笠 渉
英米語学科 2年 坂内 隆斗
英米語学科 2年 田中 啓夢
英米語学科 2年 富樫 美智雄
英米語学科 2年 原山 要佑

MEIKAI-JOE プラス 2022 生徒役

英米語学科 3年 上原 二葉
英米語学科 3年 児島 晴香
英米語学科 3年 小林 優汰
英米語学科 3年 保足 晟吾

